協同教育実践資料　３

確かな学力を育む指導の研究

学ぶ意欲を高める授業をめざして

小松市立丸内中学校　著

杉江修治　監修

日本協同教育学会

本書は、小松市立丸内中学校が 2006 年 11 月 24 日に

平成 17・18 年度　石川県教育委員会指定「評価を生かした学力向上推進事業」

平成 17・18 年度　小松市教育委員会指定「教育課程研究推進校」

としての発表を行った折の研究紀要に加筆調整を加えたものである。

はじめに

「大好きな丸中のために、私は生徒会長に立候補して･･･」。これは、後期の立会演説会のひとこまである。私は、胸が熱くなった。学力向上の研究も、究極のところすべてここに行き着かなければならないと今更のように思ったものである。

『学びくん』とは、丸中風シラバスの名前である。本校には、三人の強い味方である「～くん」がいる。食の教育を推進するための「バイオくん」（生ごみ消却気）、環境教育を推進するための「ソーラーくん」（太陽光発電機）とも、今では完全に生徒達の心の友になっているが、この『学びくん』は、まだそうなっていない。研究主任の苦悩は、今も続いている。

シラバス作りは生徒の学習意欲の喚起のみならず、教師一人一人のベースとしての「教材研究力」、単元全体の見通しを立てる「授業設計力」、そして「授業展開力」アップに繋がっていったといえる。シラバスの中に「自学へのアドバイス」という項目を入れたことが、本校の教育目標である「自主・自律」を具現化することにもなっている。自学という事は、口にする事はたやすいが、このような手だてをとらないとなかなか実現されないものだと。ようやくわかったように思う。

10 月初旬、新しい 2・3 学期用の『学びくん』が届いた。これまでのものに比べ違った内容や表現が目につく。確実に「進化」してきているといってよい。今後も改定を重ねていく事になるが、この営みが教師自身の授業力向上の土台を築き、生徒のさらなる学力向上に繋がっていく事だろう。

学力検査や学力調査をする度に、一喜一憂する。なるべくデータを見ないでおこうと思うのは、ごく自然な気持ちである。しかし、今ではむしろ積極的に知ろうとするようになってきたことは大変うれしいことである。それは我校にもようやくＰＤＣＡのサイクルが機能し始めたからである。「Ａ＝改善」の努力とその手ごたえを感ずるからこそ検証データを知りたいと思う。最近では、ホームドクター同様、多くのデータが揃ってきた。これまでの情緒的な分析が客観的データに裏打ちされるからこそ、学力の「見立て」がより正確なものになっている。私は今でも刑事ドラマよろしく、教師の「勘」はかなり当たっていると思っている。しかし、それに冷厳な数字の客観データとがミックスされた時、分析や治療方針は磐石なものになる。ＰＤＣＡサイクルの意味もようやく実感できるようになってきた。

一方、私達の研究を根底から支え、揺さぶりをかけてくださった杉江教授との校内研修会はいつも新鮮で、腹にこたえた。「学力向上には、学びの集団の質を鍛えることが要件である」との指摘である。先般「授業に楽しく取り組める」と答える生徒が 100％である 3 年生の研究授業が行われた。生徒と教師の心の通い合いがあり、暖かくすばらしい授業展開だったと思っていた。が、整理会での杉江教授の指摘は鋭かった。「もっと生徒主体の授業を作っていかないと･･･」。その通りである。そして、その後に続く教授の改善策は、理想の授業スタイルをシミュレートさせてくれるものであり、夢が描け、やる気も出てきた。

「我校には点数に囚われている生徒がいる」。そんな指摘もある。それが現実だとしても、生徒が協同学習する中で、自分も伸び、仲間と楽しく学習している実感を何とか味わわせてやれ

ないものか、そんなしかけができる教師になりたいと、誰しも思ったに違いない。

また、他教科の先生との授業研究もできるようになってきた。生徒の代弁者としての他教科の教師の声が聞ける。言える。そして技を盗める。もちろん自分の授業に応用する、といったように、授業改善もずいぶん進んできた。

それから丸中の指導案の形式もようやく整ってきた。書かれている内容も変わってきた。ずいぶん長い道のりだったと思う。ここまで導いて頂いた指導主事の先生方のお力添えに心から感謝したい。まるで本校の職員のように、暗くなってからも快く足を運んでくれ、ていねいに心温まる助言をして頂いた。その結果、指導案の各項目の書き方だけではなく、授業のねらいや授業構成を明確にシミュレートできるようになってきたのである。一年前の指導案と比べてずいぶん変わった。その変化した分、教師の授業力が向上したことになる。今、教師に一番求められるもの、それは「自己学習力を高めること」。この二年間の研究活動の中で培ってきたことである。

ここでまとめられていることは、研究という代物ではなく、取り組んだことの「まとめ集」かもしれない。真新しいこともほとんどないといってよい。しかし、地道に、そして決して背伸びをせず実践を積み上げてきたことは疑いない。この地についた研究は、「蟻のような速さ」かもしれないが、今後も継続される。そして「確かな」学力が生徒に「確かに」身についていっているように思う。「蟻のような速さ」かもしれないが。

平成 18 年 11 月

小松市立丸内中学校
校長　　西　市造

目　次

はじめに

研究の概要
1. 主題設定の理由 …… 8
2. 研究の仮説 …… 9
3. 研究の全体構想 …… 9
4. 研究組織 …… 12
5. 研究の歩み …… 13
6. 研究の内容 …… 14

成果と課題 …… 21

研究全体会報告 …… 25

研究の実践
国語科 …… 40
社会科 …… 49
数学科 …… 58
理科 …… 71
音楽科 …… 81
美術科 …… 88
保健体育科 …… 95
技術・家庭 …… 107
英語 …… 122
特別支援 …… 142
第１学年部会 …… 152
第２学年部会 …… 156
第３学年部会 …… 159

資料　各教科の「学びくん」の例 …… 162

おわりに …… 173
監修者後記 …… 174

研究の概要

研究の概要

学校研究主題：確かな学力を育む指導の研究―学ぶ意欲を高める授業をめざして

「確かな学力」とは知識･技能はもちろんのこと、これに加えて学ぶ意欲や自分で課題を見つけ、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力等まで含めたものをいう。

（文部科学省ホームページより）

1. 主題設定の理由

変化の激しい社会を主体的に生き、未来を拓く人間の形成をめざすとき、「確かな学力」を身につけることはきわめて重要なことである。「確かな学力」の育成を考えたとき、わかる授業、力がつく授業へのわれわれの工夫や努力が何よりも根底をなすはずである。

本校は、昨年度「確かな学力を育む指導の研究―評価を生かした授業の改革」を主題に掲げ、

① ねらいを明確にした授業
② 個に応じた指導や評価の工夫
③ 効果的な教材の開発･改善
④ 教科内外の交流による授業研究

を中心に取り組んできた。また、学習の習慣化、定着化を図るために、学年会を中心に取り組んできた。

県の基礎学力調査や小松市の基礎学力調査の分析を行い、指導における課題は何か、どんな力をつけていかねばならないのかを話し合い、教科のテーマを決定した。その中で「思考力･表現力」が足りないととらえた教科が多く、学校全体としても「思考力･表現力」を重点的につけていこうと考え、指導法を工夫してきた。

成果としては、第一に教師の意識が変わったことあげられる。そして、教師が常にねらいを意識した授業を行うことによって、生徒の学習の理解が高まった。また、他教科との授業交流を重ねることにより、共通の授業づくりの視点、生徒の多面的見方による授業づくりの視点など、教職員一体となった指導が可能となり、さらなる授業改善を進めることができた。

また、実践や研修を行っているうちに確かな学力をはぐくむためには「課題に向かう力」、すなわち、生徒の学ぶ意欲を高めることがより大切ではないかと考えるようになった。2 月の小松市の学習意識調査からは、「自宅学習習慣」がやや弱いことも明らかになった。

昨年度の反省を生かし、本年度は教科でつけるべき力を大切にしながら、生徒の学ぶ意欲に焦点をあて、家庭学習に対しても主体的に取り組める支援を工夫したいと考え、本主題を設定した。

2. 研究の仮説

授業理解と意欲の相乗効果をねらい、以下の 3 つの仮説を設定した。

（1）生徒に単元の学習の見通しを持たせ（内容やめあてがわかる）、ねらいが明確な授業を行っていけば、生徒は意欲的に授業に参加し、思考力、表現力を含めて学習の理解も高まるだろう。

（2）授業の中に主体的に学習に取り組む場面や、協同して学習する場面を作り、自分や仲間の成長を感じる評価の工夫をすれば、生徒の学習意欲は高まるだろう。

(3)家庭学習（予習、復習）のあり方を工夫すれば、生徒は授業に意欲的に取り組むだろう。

3. 研究の全体構想

研究の全体構想については 18 ページに図示する。

なお、その図にある『学びくん』については説明が必要である。これは学年ごとに 1 学期用および 2･3 学期用の 2 分冊からなる、全教科のシラバス集であり、生徒全員に配布される。

その作成目的は次の通りである。

① 生徒が学習の到達目標を意識し、見通しを持った主体的･計画的な学習を可能とするために利用する。単元ごとの到達目標や学ぶ時期・時間などを示してある。授業のオリエンテーションで利用したり、学習の振り返りに利用できるように作成した。
② 生徒の自学意識を育てるため、家庭学習の参考になり、利用できるものを作成した。

教科によって①、②への重きの置き方が多少異なっている。

また、保護者に対しても、学習内容や評価について『学びくん』を通して関心を持ってもらいたいと考えている。

学びくんの具体例は本書末に資料として掲載した。

また、全体構想に続いて、2005 年度、2006 年度の各教科の研究主題一覧を付した(p. 11)。2006 年度は 2005 年度の成果と課題を受けて「思考力」「表現力」に加え、すべての教科に「意欲」を加えた研究主題となった。

2005 年度　各教科の研究主題一覧

教科名	研究主題
国語	自分の思いを自分の言葉で表現できる生徒の育成。
社会	基礎基本の定着を図りながら、考える力、表現する力を伸ばす学習活動の工夫。
数学	基礎力を応用力に生かし、筋道を立てて表現する力を伸ばす授業づくり
理科	実験、観察の技能、表現力を伸ばす授業づくり、科学的思考をより向上させる授業づくり。
音楽	学ぶ力、考える力、表現する力を伸ばし、育てる評価の工夫。
美術	個性を引き出すために、感性を豊かにし、技法を生かした充実した内容の作品づくりをめざす。
保健体育	生徒による練習計画作成の実践、および改善と工夫による学ぶ力、考える力の育成。

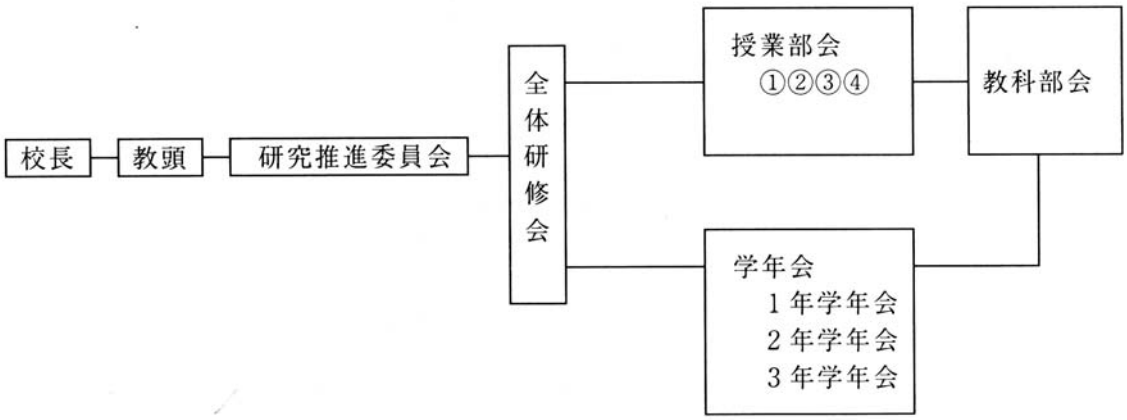
技術家庭	創造する意欲を育てる豊かな体験のあり方。
英語	既習事項を使って自己表現できる能力の育成。
特別支援	ラポール作りと適切な言葉かけの方法。

2006 年度　各教科の研究主題一覧

教科名	研究主題
国語	場に応じた言葉を選び、意欲的に自分の意思を伝え合おうとする生徒の育成。
社会	生徒の意欲を引き出し、考える力、表現する力を伸ばす指導の工夫。
数学	意欲を持ち、深く考え解決しようとする力を育む授業をめざして。
理科	予想や仮説を立て、実験、観察を行うことによって、学ぶ意欲を高める授業づくり。
音楽	主体的に学ぶ力、考える力、表現する力を伸ばす指導の工夫。
美術	意欲をより高める授業の工夫・改善―美術科における協同学習の工夫。
保健体育	自主的なグループ学習の展開によって意欲を引き出し、確かな学力として定着する体育指導のあり方。
技術家庭	学ぶ意欲を育てる豊かな体験のあり方。
英語	意欲的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する活動の工夫。
特別支援	この特性や能力を生かし、自信を持って学習に取り組める支援を探る。

4.　研究組織

次に研究組織を図で示す。



研究会推進委員会

教務、研究担当（3 名）からなり、研修会や職員会に提案する原案を作る。

全体研修会

- 研究の進め方やそれぞれの部会の取り組みについて共通理解を図る。
- 講師を招いての研修会。
- 市の研修会の活用。

授業部会

教科を 4 つのグループ（「理科・数学・美術」「英語・音楽・特別支援」「技術・家庭・国語」「社会・体育」）に分ける。

・ 研究授業の事前検討会。
・ 授業整理会。

教科部会

教材研究、指導法の工夫、指導案の作成。

学年会

よりよい学習集団づくりを推進。

5. 研修のあゆみ

2005 年度

月	研究活動	内　　容
4	第 1 回校内研修会	2005 年度の研究主題の検討、決定。
5	教科部会	前年度の基礎学力調査や 3 学期の学力調査を分析。各教科の研究主題や取り組み課題を決定。
	学年部会	全校生徒を対象に学習意識調査を行い、各学年で分析。
6	第 2 回校内研修会	各教科の取り組み、各学年の取り組みテーマを確認。
	授業交流週間	
	計画訪問	研究授業（国語、社会、理科、家庭、英語、日本語、特学。）
7	授業交流週間	
8	教科部会	1 学期の反省、2 学期の取り組みについて。
	学年部会	1 学期の反省、2 学期の取り組みについて。
	第 3 回校内研修会	加藤明先生講演会「指導と教科の一体化の意味と授業改善のポイント」（小松市研修会）。
9	第 4 回校内研修会	8 月の部会の報告。基礎学力調査の結果分析の報告と今後の課題の確認。
	授業交流週間	
10	第 5 回校内研修会	杉江修治先生を迎えて研究授業（社会）。講演「学習・指導と評価の一体化」。
	第 1 回要請訪問	国語、英語、数学、技術の研究授業。
11	先進校視察	犬山市立犬山中学校視察（2 名）。
	第 2 回要請訪問	国語、理科、体育、日本語教育の研究授業。
	研究発表会参加	芦城中学校研究発表会に全員参加。
12	第 6 回校内研修会	各校の研究発表会参加による報告会。 研究のまとめ方について。
1	第 7 回校内研修会	1 年目のまとめと 2 年目の取り組みについての検討。
	教科部会	授業アンケートの分析。

2	第 3 回要請訪問	社会、音楽、美術、特学の研究授業。
3	第 8 回校内研修会	シラバスの書き方の検討、来年度の方針について。

2006 年度

月	研究活動	内　　容
4	第 1 回校内研修会	2006 年度の研究主題の検討、決定。
5	教科部会	基礎学力調査や 3 学期の学力調査を分析。研究の具体的な進め方、テーマについて。
	学年部会	研究の具体的な進め方について。
	第 2 回校内研修会	各部会からの研究の具体的な進め方の確認。
6	第 1 回要請訪問	国語、社会、理科、英語、技術、美術、特学の研究授業。
	第 3 回校内研修会	杉江修治先生を迎えて研究授業（国語）。講演「確かな学力を育む指導の研究―学ぶ意欲を高める授業をめざして」。
	第 2 回要請訪問	体育、音楽、過程、数学の研究授業。
7	第 3 回要請訪問	社会、理科、英語の研究授業。
	第 4 回校内研修会	『学びくん』2・3 学期分について。研究紀要について。
8	研究大会に参加	第 3 回日本協同教育学会に参加。
	第 5 回校内研修会	協同学習について。
	第 6 回校内研修会	県学力調査の結果分析の報告と今後の課題の確認。
	第 4 回要請訪問	『学びくん』の検討、起用、研究発表会の授業について。
9	教科部会	授業アンケートの分析。
	第 7 回校内研修会	研究紀要について。
	第 8 回校内研修会	杉江修治先生を迎えて研究授業（理科）。授業反省会。
10	第 9 回校内研修会	研究紀要の検討。
11	第 10 回校内研修会	研究発表会の指導案検討。
	研究発表会	

6. 研究の内容

（1）単元を見通した学習と毎時間の目標を明確に示す工夫

1）単元見通し学習の工夫

生徒が単元全体の内容や授業の流れ、つけるべき力を理解することによって、自分が学習していることの意味をつかんだり、内容理解がしやすくなる。また単元に対する関心も高めることができる。そうすれば学習意欲も喚起できると考えている。そのため単元の内容やつけるべき力を示したシラバス的なもの『学びくん』を作成した。それを単元の始めに利用し、生徒が単元を見通せるように工夫している。また単元内容を問題形式にしたものを生徒に示すなど、教科によって工夫し実践している。

2）課題の提示の仕方の工夫

授業の課題（ねらい）が生徒に明確に伝われば、生徒は意欲的に授業に取り組み、授業理解も高まる。黒板やワークシートを利用し、課題の明確な提示の仕方を工夫、実践している。

3）教材研究の充実

『学びくん』の作成は教師にとって充実した教材研究であった。『学びくん』を作成するためには教師が単元の目標や授業のねらいを十分につかまなければ、作成できないからだ。学期が始まる前に一通り教材を見通すことができた。さらに生徒の成長、実態に合わせ、教材を研究し、ねらいがぶれない授業、生徒の意欲・関心を喚起する授業づくりを心がけている。

（2）協同学習を取り入れた授業の工夫、評価の工夫

☆協同学習とは　「グループ学習が協同学習ではありません。協同学習とは、学習集団全員が高まることをその集団のメンバー全員が目標にして学習することを言います。したがって、授業を組み立てる立場の教師から言えば、協同学習は手法ではなくて考え方なのです。」（日本協同教育学会第３回大会における、杉江修治氏によるワークショップレジメより抜粋）

1） 協同学習を取り入れた授業の工夫

・ 単元を見通して、主体的に学習する場や学び合いの場を設定する。
・ 協同して学び合う価値のある課題づくりをする。
・ グループやペア学習などさまざまな学習形態を工夫する。
・ 個人思考を大切にし、自分の学習に責任を持たせる。
・ 生徒に互いに学び合い高め合うという意識を持たせていく。生徒同士が関わり合うことを大切にしていく。

2）評価方法の工夫

授業や学習を通して、自分の成長や仲間の成長に気づき、喜びを持てるように多様な評価方法を工夫する。

・ 自己評価
・ 相互評価
・ 教師の評価
・ 教科のポートフォリオ

など各教科で工夫し、実践している。

3）より良い学習集団の形成

① 信頼関係のある温かい人間関係の中での学び合いが学習意欲を高めると考える。そのような学習集団を授業の中で作っていく、という意識を教師が持って授業に臨むことが大切であると考える。

② 学級・学年経営をしていく上でも生徒同士が関わり合う活動を大切にし、温かい人間関係を築けるように取り組んでいる。また、学習の基礎・基本を定着させるための取り組み（朝自習、テスト前後の取り組み、自主学習ノートなど）を各学年で行っている。

(3) 家庭学習の指導の工夫

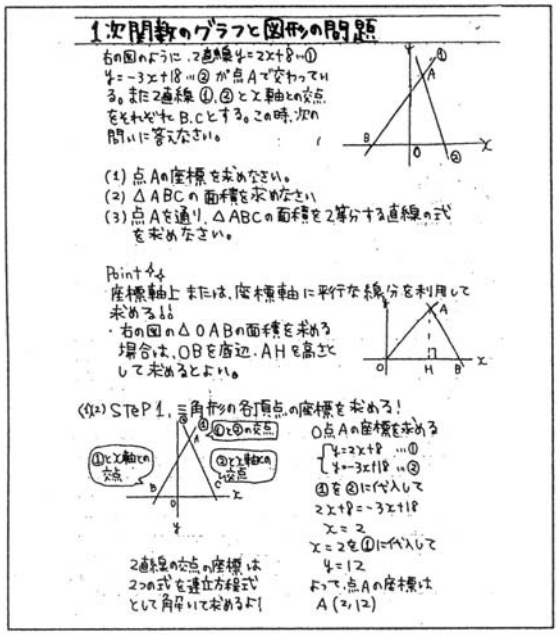
1) 『学びくん』の活用

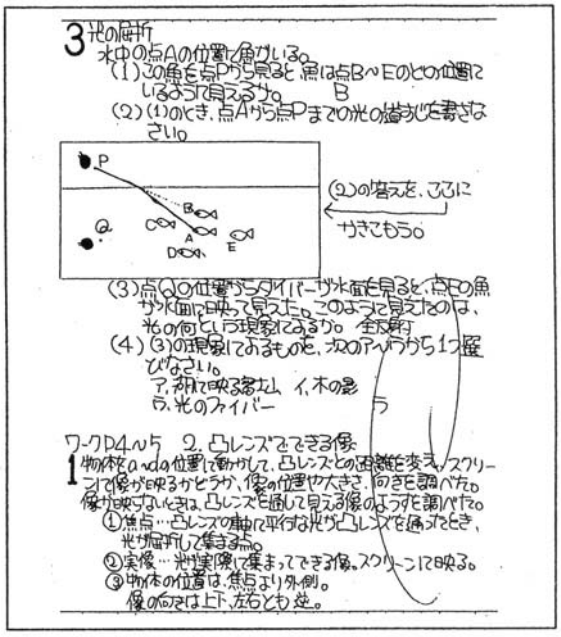
・ 『学びくん』の到達目標を活用し、日々の予習・復習を行う。
・ 自学へのアドバイスを活用して、自分の学習を深める。
・ テスト前に自分の学習状況を確認するために使う。

など『学びくん』の活用方法を紹介し、家庭学習の定着を教科や学年で指導している。

2) 自学ノートの工夫

家庭学習を定着させるために、自学ノートに取り組んでいる。自学ノートをうまく使っている例を生徒に紹介したり、アンケートをとって意識づけをしたり、各学年で工夫している。





自学ノートの事例

(4) 指導と評価の一体化を図る

1) 丸中の指導改善の流れ

2005 年度	
4 月	県基礎学力調査の実施（中 3）。
5 月	全校生徒を対象に学習意識調査を実施
8 月	県基礎学力調査の結果の分析、教科部会で問題点、原因、改善策を話し合う。校内研修会で共通理解を図る。
10 月	授業研究会を定期的に行う、その際他教科とも交流し、授業の幅を広げていく。
12 月	授業アンケートを全校生徒を対象に全教科で実施、生徒の授業理解の程度や指導法の問題点を話し合い、改善につなげる。
2 月	市の学力調査を実施（中 2）。

2006 年度	
4 月	市の学力調査を分析、昨年度県の学力調査の結果を再確認し、重要指導事項を検討。
	県学力調査実施（中 3）と学習意識調査（全校）を実施。
5 月	授業研究会を定期的に行う。その際他教科とも交流し、授業の幅を広げていく。
6 月	授業アンケートを全校生徒を対象に全教科で実施。
7 月	県基礎学力調査の結果の分析、教科部会で問題点、原因、改善策を話し合う。校内研修会で共通
8 月	理解を図る。

4 月（県）、2 月（市）の学力調査、5 月の学習意識調査、7 月、12 月の生徒による授業アンケートを軸としてＰ→Ｄ→Ｃ→Ａで実践していく。

2） 他教科を交えて授業研究を行う

昨年度から一人 1 回以上の研究授業を行い、他教科の授業も見合うということを行っている。授業を見る視点を示した用紙を持ちながら授業を参観し、反省会を行ってきた。

今年は教科をくくり、固定したグループを作って、指導案を検討したり、授業反省会を行い、話し合いが深まるように工夫した。また授業の視点も絞ったものに改良した。

他教科と交流しての授業研究は、授業の改善に効果的であった。例えば、生徒の新たな面が見られる。同じ教科では感じない疑問点が指摘される。他教科の教師が生徒の立場になって意見を述べる。指導方法の新たな発見がある。などである。

授業参観用紙

1	研究授業を見るときの視点　　（指導案）
□	①単元の目標や評価計画における目標、本時のねらいに整合性がありますか。
□	②この評価規準で、生徒が本時の目標を達成したか見ることができますか。
□	③評価規準は無理のないものになっていますか。
□	④指導案から授業がイメージできますか。
2	研究授業を見るときの視点　　（授業）
□	①本時のねらいをわかりやすく示していますか。
□	②生徒が自分の課題として主体的に受けとめていますか。
□	③説明や指示は生徒にとって明確なものになっていますか。
□	④活動はねらいに沿ったものになっていますか。
□	⑤評価の方法やポイントは適切でしたか。

※：□はチェック欄（授業参観者が項目を確認しながら授業を参観）

3）基礎学力調査を効果的に生かす

県や市の学力調査の結果を各教科で分析し、生徒にどんな力がついたか、足りない力は何かを洗い出していく。

また、自分の授業を見直す機会ととらえ、結果から自分の授業の特徴や指導の改善点を考え、授業に生かそうとしている。通過率が県を下回っているものはもちろんだが、県の通過率を上回っていても通過率が 50%に達しないものも取り上げ、改善できるように考えている。

数学基礎学力調査の分析結果

①通過率が県を10%以上上回ったもの

	本校(%)	県(%)	関・意・態	見・考	表現処理	知識理解	学年
文字を用いた式の計算ができる	74.2	56.1			○		1，2年
一元一次方程式を解くことができる	67.7	53.3			○		1年
回転体を見取り図で表すことができる	83.9	65.7			○	○	1年
空間図形における辺の位置関係について理解している	67.7	51.8		○		○	1年
別の見方・考え方に関心をもち、問題場面の数量関係を連立方程式を用いて表すことができる	54.8	40.4	○	○	○		2年
平行線の性質を理解している	83.9	72.2				○	2年
円周角と中心角の関係を理解している	67.7	51.4				○	2年
具体的な事象の中にある数量の関係を調べて一次関数を見いだし、それを用いて考察したり予測したりしようとする	80.6	68.1	○		○		2年
直線の式をよみとることができる	74.2	57.5			○		2年
根拠となる事柄を明らかにして、三角形の合同を証明することができる	93.5	71.8			○	○	2年
	67.7	55.6				○	2年
	45.2	29.5		○	○		2年
具体的な事象の中にある関数関係の中から、比例、反比例、一次関数の関係を見いだすことができる	58.1	45.0		○		○	1，2年
	71.0	48.3		○		○	1，2年
	83.9	70.9		○		○	1，2年
事象の中にある関係や法則を見いだし、文字を用いて式に表すことができる	64.5	49.5		○			1年
	51.6	40.8		○			1年
	38.7	24.9	○	○	○		1年

②通過率が県を下回ったもの

	本校(%)	県(%)	関・意・態	見・考	表現処理	知識理解	学年
基本的な確率の求め方を理解している	19.4	35.2		○		○	2年

③通過率が50%を下回ったもの

	本校(%)	県(%)	関・意・態	見・考	表現処理	知識理解	学年
基本的な確率の求め方を理解している	19.4	35.2		○		○	2年
問題場面の数量関係を連立方程式を用いて表し、問題を解決することができる	25.8	23.7			○	○	2年
具体的な事象の中にある数量の関係を調べて一次関数を見いだし、それを用いて考察したり予測したりしようとする	11.9	39.0	○	○			2年
反比例のグラフの式をよみとることができる	48.4	35.9			○		1年
平行四辺形及び平行線の性質を理解している	15.2	41.4				○	2年
根拠となる事柄を明らかにして、三角形の合同を証明することができる	45.2	29.5		○	○		2年
事象の中にある関係や法則を見いだし、文字を用いて式に表すことができる	38.7	24.9	○	○	○		1年

4）授業アンケートや学習意識調査を生かし、生徒の実態をつかむ

2005 年度から 5 月に全校生徒の意識調査を取り始めた。また学期の終わり（7 月と 12 月）に授業アンケートを取り、今年で 2 年目となった。生徒自身の変容や去年の生徒との比較ができるようになり、少しずつ、特徴がつかめるようになってきた。

次ページの表のＡ→Ａ、Ｂ→Ｂによって同じ生徒達がどのように変容したかをつかめる。比較は去年と今年の同じ学年を比較できる。データがそろってきて生徒達の形成的変化がつかめるようになってきた。これからも継続して意識調査や授業アンケートをとっていきたいと考えている。

学習や生活に関する調査集計
（平成18年・平成17年との比較）

比較　比較　比較

A → A　B → B

	そう思う／どちらかといえばそう思う の合計	H18・1年	H17・1年	H18・2年	H17・2年	H18・3年	H17・3年	H17・3年 県平均
(1)	学校が好きだ	84.5%	86.8%	73.3%	74.2%	81.9%	79.1%	77.0%
(2)	国語の勉強が好きだ	50.0%	66.0%	67.6%	31.3%	56.7%	73.6%	49.0%
(3)	社会の勉強が好きだ	55.5%	60.4%	66.7%	74.2%	78.7%	69.1%	58.5%
(4)	数学の勉強が好きだ	80.9%	70.8%	70.5%	60.2%	52.8%	60.9%	55.6%
(5)	理科の勉強が好きだ	78.2%	53.8%	69.5%	77.3%	73.2%	69.1%	59.9%
(6)	音楽の勉強が好きだ	75.5%		62.9%		70.9%		
(7)	美術の勉強が好きだ	68.2%		64.8%		63.0%		
(8)	保健体育の勉強が好きだ	62.7%		57.1%		58.3%		
(9)	技術の勉強が好きだ	75.0%		77.1%		78.0%		
(10)	家庭の勉強が好きだ	66.4%		71.4%		54.3%		
(11)	英語の勉強が好きだ	71.8%	82.1%	69.5%	60.2%	68.5%	65.5%	47.4%
(12)	道徳の時間が好きだ	70.9%		66.7%		55.1%		
(13)	学級活動の時間が好きだ	70.0%		61.9%		79.5%		
(14)	総合的な学習の時間が好きだ	63.6%	70.8%	65.7%	53.1%	63.0%	62.7%	67.7%
(15)	国語の授業はよく分かる	87.3%	84.9%	73.3%	52.3%	79.5%	85.5%	69.1%
(16)	社会の授業はよく分かる	75.5%	75.5%	75.2%	87.5%	85.8%	82.7%	71.5%
(17)	数学の授業はよく分かる	95.5%	91.5%	80.0%	67.2%	70.1%	67.3%	72.8%
(18)	理科の授業はよく分かる	83.6%	71.7%	71.4%	71.9%	82.7%	73.6%	71.0%
(19)	音楽の授業はよく分かる	85.5%		68.6%		70.1%		
(20)	美術の授業はよく分かる	88.2%		67.6%		74.0%		
(21)	保健体育の授業はよく分かる	81.8%		68.6%		70.1%		
(22)	技術の授業はよく分かる	85.7%		76.2%		87.4%		
(23)	家庭の授業はよく分かる	81.8%		71.4%		70.9%		
(24)	英語の授業はよく分かる	78.2%	85.8%	60.0%	60.9%	66.9%	65.5%	56.6%

5 学校の授業以外に、1日だいたいどれくらい勉強しますか。
（土日を除く、宿題・塾・家庭教師の時間を含む）

		H18・1年	H17・1年	H18・2年	H17・2年	H18・3年	H17・3年	H17・3年 県平均
1	全く、または、ほとんどしない	0.0%	0.9%	9.5%	9.4%	3.1%	0.9%	12.1%
2	30分より少ない	2.7%	10.4%	15.2%	9.4%	3.9%	0.9%	16.8%
3	30分以上、1時間より少ない	19.1%	20.8%	27.6%	35.2%	7.1%	7.3%	25.1%
4	1時間以上、2時間より少ない	46.4%	40.6%	40.0%	35.9%	50.4%	47.3%	30.9%
5	2時間以上、3時間より少ない	25.5%	17.9%	7.6%	7.8%	27.6%	31.8%	12.2%
6	3時間以上	6.4%	9.4%	0.0%	2.3%	7.1%	10.0%	2.8%

6 ふだん家庭でしている勉強は、次のうちどれに近いですか。（複数回答可）

		H18・1年	H17・1年	H18・2年	H17・2年	H18・3年	H17・3年	H17・3年 県平均
1	学校から宿題が出れば、宿題をする	92.7%	96.2%	92.4%	90.6%	90.6%	90.0%	86.0%
2	テストがあれば、それにそなえて勉強する	88.2%	88.7%	88.6%	87.5%	90.6%	91.8%	81.1%
3	予習や復習をする	81.8%	85.8%	47.6%	38.3%	28.3%	26.4%	30.1%
4	興味があることについて自分で調べたり、確かめたりする	20.9%	25.5%	12.4%	10.2%	9.4%	13.6%	14.9%
5	塾から宿題が出れば、宿題をする	24.5%	32.1%	24.8%	22.7%	30.7%	42.7%	29.1%
6	宿題が出てもしない	0.9%	0.9%	2.9%	4.7%	5.5%	1.8%	7.5%

研究の全体構想

めざす生徒像
自主・自律・活力ある生徒

自ら進んで学習に取り組む生徒
自分で考えて行動できる生徒
自分の思いを伝えられる生徒
仲間を思いやる生徒

研究主題
確かな学力を育む指導の研究
～学ぶ意欲を高める授業をめざして～

特に育てたい力 ＝ 学ぶ意欲・自ら学ぶ力

研究仮説	仮説1 生徒に単元の学習の見通しを持たせ、ねらいが明確な授業を行っていけば、生徒は意欲的に授業に参加し、思考力、表現力を含めて学習の理解も高まるだろう。	仮説2 授業の中に主体的に学習に取り組む場面や協同して学習する場面を作り、自分や仲間の成長を感じる評価を工夫すれば、生徒の学習意欲は高まるだろう。	仮説3 家庭学習（予習・復習）のあり方を工夫すれば、生徒は授業に意欲的に取り組むだろう。
研究内容	○ 単元を見通した学習と毎時間の目標を明確に示す工夫	○ 協同学習を取り入れた授業の工夫 ○ 評価の工夫	○ 家庭学習の指導の工夫
手だて	《手だて1》 単元見通し学習の工夫 「学びくん」を使い、その単元でつけるべき力や学ぶ意義を知らせ、学習の見通しを持たせる。	《手だて4》 協同学習を取り入れた授業の工夫 ・授業の中に主体的な学習の場や学び合いの場を設定する。 ・生徒の関心や意欲を引き出す教材や課題を工夫する。	《手だて7》※ 「学びくん」の活用 「学びくん」を活用し、学習の仕方を示したり、予習・復習を指導する。
	《手だて2》 課題の提示の仕方の工夫 1時間のねらいを黒板に示したり、ワークシートに示し、1時間のねらいを明らかにする。	《手だて5》 評価方法の工夫 自分の良さや仲間の良さに気づき、喜びを持てるように多様な評価方法を工夫する。 ・自己評価 ・相互評価 ・教師の評価 ・評価のポートフォリオ	《手だて8》 自学ノートの工夫 自学ノートに生徒が意欲的に取り組めるように、評価を工夫したり、取り組み方の指導を工夫する。
	《手だて3》 教材研究の充実 教材研究を十分に行い、教師の教材に対する理解を深める。	《手だて6》 より良い学習集団の形成 ・授業によって学級を育てるという視点を持つ。 ・学年会を中心とした取り組みを行う。	

指導と評価の一体化

・基礎学力調査を効果的に活用する。
・授業アンケートや学習意識調査を生かし、生徒の実態を把握する。
・他教科を交えた授業研究を行い、授業の改善に生かす。

成果と課題

1　成果

(1) 生徒の変容

全体構想図の《手だて１》から《手だて８》を行ってきたことによって、次のような変化が見られた。

1) 県基礎学力調査より

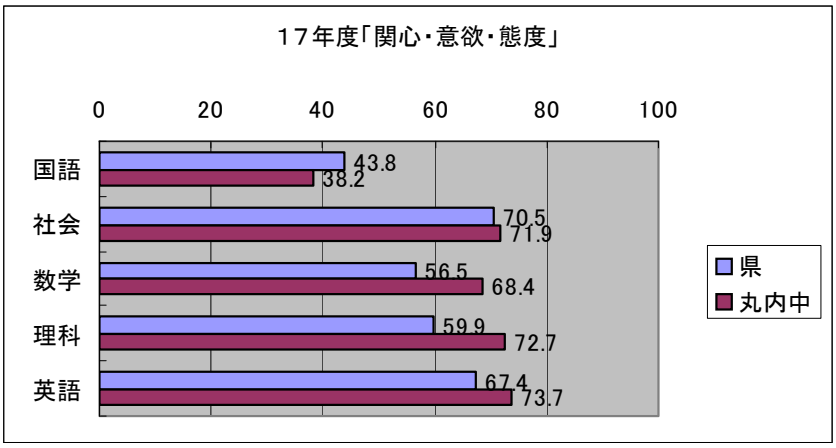
2005 年度通過率（%）

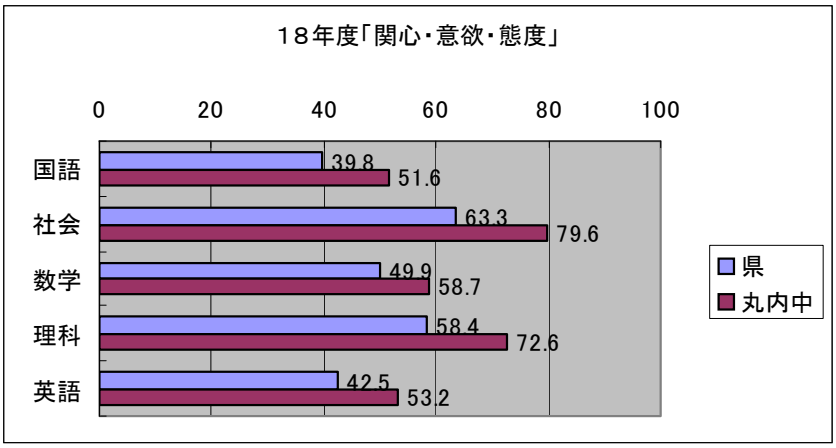
	国語	社会	数学	理科	英語	全体
県	55.9	68.7	65.6	63.0	71.3	324.5
本校	59.7	75.6	71.2	66.5	78.5	351.5

2006 年度通過率（%）

	国語	社会	数学	理科	英語	全体
県	59.3	59.8	59.7	60.0	64.2	303.0
本校	64.2	72.4	69.1	70.8	75.3	351.8

結果は上の通りであり、県の通過率との差は昨年度よりどの教科も一貫してプラスの方向に大きくなっている。また下の図にある観点別に見ると、「関心・意欲・態度」の県との通過率の差も、2005 年度にくらべて 2006 年度は大きく広がり、より望ましい方向に変化している教科が多い。





2）授業アンケートから

次に昨年 12 月のアンケートと今年 7 月のアンケートの結果を比較して示そう。数値は「とてもそう思う」「まあまあそう思う」と答えた生徒の割合の合計を全学年、全教科通して平均値を求めたものである。

質問項目	2005・12	2006・7
授業に楽しく取り組めた	73.2	75.8
時間ごとのめあてがわかった	70.3	69.4
自ら進んで学習に取り組む場面があった	60.8	62.1
授業内容が理解できた	73.8	76.1
個人やグループが先生にアドバイスしてもらえる場面があった	50.1	60.7

この結果から、わずかではあるが、授業が改善され、楽しく授業に取り組んでいる生徒が増えているといえる。

3）各教科の研究実践より

多くの教科で協同学習を取り入れたことによって、授業に対する意欲の向上がみられた。例えば、「消極的な生徒でも、少人数のグループでは自分の考えを伝え合えていた」「男子と女子とをペアにして作業をさせると、男子の物づくりの意欲が女子の意欲を引き上げた」等の様子が見られた。また、授業後の生徒の感想にも「他の人のいろいろな意見が聞けて楽しかった」「授業が以前よりも楽しく、考えて取り組むようになった」「班で協力できるようになった」など意欲の向上が感じられる記述が多くあった。仮説 2 を検証する結果である。

4）学年の取り組みから

家庭学習の指導として「自学ノート」の取り組みを全学年でそれぞれ工夫しながら行ってきた。その結果、4 月から 9 月末までに 500 ページ学習した生徒もみられた。まだまだ家庭学習が授業に対する意欲にまではつながらないが、家庭学習の取り組みとしては一定の成果がみられた。これは仮説 3 を検証する成果である。

(2) 教師の変容

- 2 年間研究を行ってきて、大きな変化があったのは教師の意識である。他教科との授業研究を通し、自分の知らない生徒の姿を発見したり、授業を行う上での新たな視点や指導法を発見できた。また常に「ねらいを明確に」ということを意識して授業を行うようになった。
- 『学びくん』を今年の 4 月から使用するために、昨年度の冬から作成にかかった。1 学期間使用し、改良を加えた。生徒に「この単元で何ができるようになればよいのか」が、よりわかりやすくなるように表現を工夫し、2、3 学期分を夏休みに作成した。時間がかかり、苦労の多い作業であったが、学期を見通した教材研究ができたという点では価値があった。学期全体の教材のねらいや目標をつかみ、指導計画を工夫することができた。
- 杉江先生を招いて協同学習についての研修会を重ねる中で、教育を行う上で当たり前のことに気づかされた。「暖かい信頼関係の中での学習が意欲づけになる」「授業の

中で学習集団を作っていくべき」など生徒同士の関わりの大切さを改めて認識でき、日々の授業の中でそれを意識し、実践していくことができた。

・ 今までは教師としての経験や憶測で生徒の力を判断することが多かった。しかし、研究を進める中で、県や市の基礎学力調査の分析を行い、弱い分野を洗い出し、授業の改善点を考え実行する。という流れができてきた。また全校生徒を対象に学習意識調査、授業アンケートを定期的に行い、その結果からも自分の授業を振り返ったり、生徒の変容がつかめるようになった。

2 今後の課題

課題は山積みであるが、次のことに力を入れて、これからも生徒の学習意欲を高める研究を進めていきたい。

・ 単元見通し学習の工夫　教科によってまだばらつきが見られる。『学びくん』を活用したり、効果的な単元見通しの方法をさらに工夫していかなければならない。

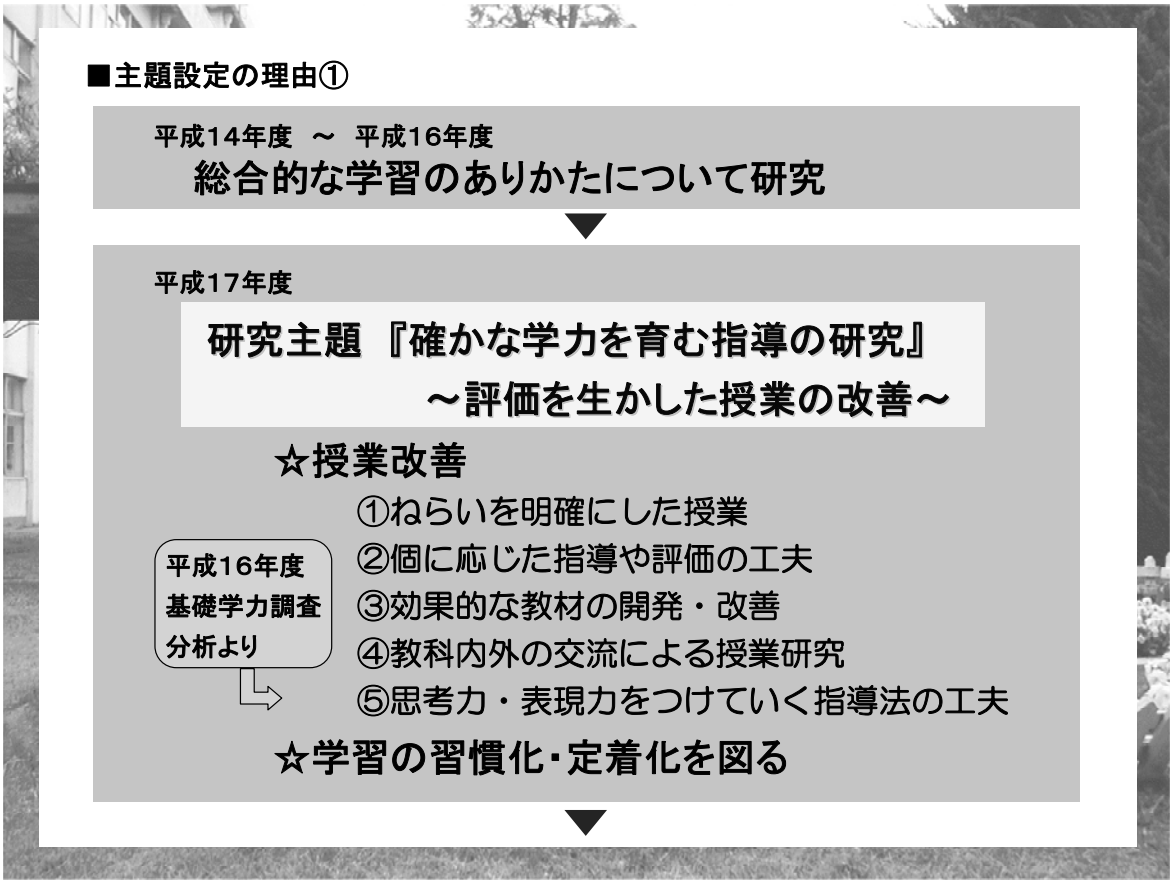
・ 協同学習の進め方の工夫　まだまだ協同学習に対する教師側の理解の足りなさもあり、実践が十分には行われていない。協同学習の基盤となる学習集団づくりに力を入れながら、課題の作り方や学習の進め方、互いの良さを認め合う評価の工夫を続けていきたい。

・ 家庭学習の定着　今年 5 月の意識調査の結果、家庭学習の時間は県に比べると多いが、内容は受け身的なものが多い。また『学びくん』を家庭学習に利用している生徒の割合が期待していたよりも多くない。より家庭学習に利用できるように改善したり、使い方の工夫を提示して、自学が定着していくようにしていきたい。

・ 学習意識調査、授業アンケートの活用　学習や生活に関する調査項目のめざす目標を今後どのように設定すべきか検討していかねばならない。とりわけ「教科が好き」「教科の授業がよくわかる」の項目の目標をどう立てるのか考えていきたい。今年 5 月の調査では、「教科が好き」：2 年 57.1～77.1%、3 年 52.8～78.8%、「教科の授業がよくわかる」：2 年 60.0～80.0%、3 年 66.9～85.8%であり、この教科による 20%の開きをどう改善していくか、少なくとも全学年全教科「〇〇%以上」という目標が立てられるよう努力していきたい。また基礎学力調査や授業アンケートを分析することの難しさを痛感した 2 年間であった。授業アンケートの項目も改善して、より授業改善に役立つものにしたいと考えている。

研究全体会報告

主題設定の理由と研究の全体構想



本校では平成 16 年度までの 3 年間、総合的な学習のあり方について研究してきました。昨年度は総合的な学習の研究が一区切りついたことと、「評価を生かした学力向上推進事業」の指定を受け、学校研究の中心を必修 9 教科に移行しました。生徒に確かな学力をつけるためには、まず、授業が大切である、と考え、研究主題を**「確かな学力を育む指導の研究―評価を生かした授業の改善」**としました。

そして

①ねらいを明確にした授業

②個に応じた指導や評価の工夫

③効果的な教材の開発・改善

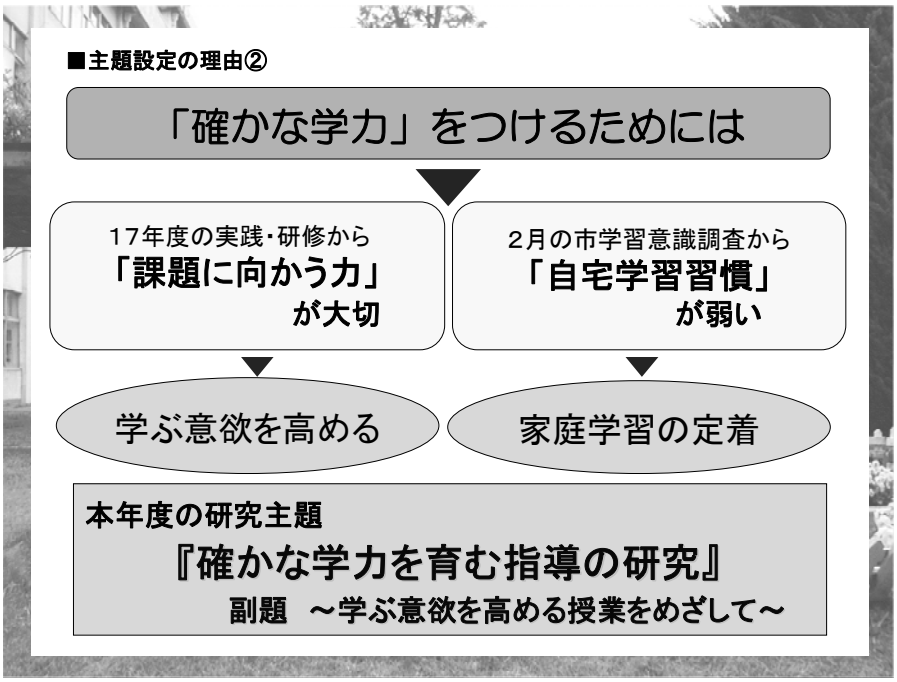
④教科内外の交流による授業研究

を中心に授業改善に力を入れてきました。

基礎学力調査の分析からは、思考力・表現力が弱いことがわかり、その力をつけていく指導法の工夫も行ってきました。また、学習の習慣化、定着化を図る取り組みを学年会を中心に取り組みました。

しかし、実践や研修を行っていくうちに、確かな学力をつけるためにはまず、「課題に向かう

力」、すなわち学ぶ意欲を高めることがより大切なのではないかと考えるようになりました。そのことが思考力や表現力をいっそう高めることにつながるのではないかという思いからです。また２月の小松市の学習意識調査から、「自宅学習習慣」がやや弱いことも明らかになりました。よって本年度は、思考力・表現力等、教科のつけるべき力を大切にしながら、生徒の学ぶ意に焦点をあて、家庭学習に対しても主体的に取り組める支援を工夫したいと考え、副題を「学ぶ意欲を高める授業をめざして」と変更して取り組みました。本校では確かな学力を「文部科学省」の考える「確かな学力」に準じて考えています。



すなわち「確かな学力」とは知識・技能はもちろんのこと、これに加えて、学ぶ意欲や自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、より良く問題を解決する資質や能力等まで含めたものをさします。

■研究の仮説

＜仮説1＞
生徒に**単元の学習の見通し**を持たせ、
ねらいが明確な授業を行っていけば、
生徒は意欲的に授業に参加し、
思考力、表現力を含めて学習の理解も高まるだろう。

＜仮説2＞
授業の中に**主体的に学習に取り組む場面**や、
協同して学習する場面をつくり、
自分や仲間の成長を感じる評価を工夫すれば、
生徒の学習意欲は高まるだろう。

＜仮説3＞
家庭学習（予習・復習）のあり方を工夫すれば、
生徒は授業に意欲的に取り組むだろう。

■研究の全体構想

特に育てたい力 ＝ 学ぶ意欲 ・ 自ら学ぶ力

	仮説1	仮説2	仮説3
研究内容	単元を見通した学習と毎時間の目標を明確に示す工夫	協同学習を取り入れた授業の工夫、評価の工夫	家庭学習の指導の工夫
手だて	1 単元見通し学習の工夫 2 課題の提示の仕方の工夫 3 教材研究の充実	4 協同学習を取り入れた授業の工夫 5 評価方法の工夫 6 より良い学習集団の形成	7 「学びくん」の活用 8 自学ノートの工夫

指導と評価の一体化

・基礎学力調査を効果的に活用する
・授業アンケートや学習意識調査を生かし、生徒の実態を把握する
・他教科を交えた授業研究を行い、授業の改善に生かす

研究の仮説として、授業理解と意欲の相乗効果をねらい、

(1) 生徒に単元の学習の見通しを持たせ、ねらいが明確な授業を行っていけば、生徒は意欲的に授業に参加し、思考力、表現力を含めて学習の理解も高まるだろう。

(2) 授業の中に主体的に学習に取り組む場面や、協同して学習する場面を作り、自分や仲間の成長を感じる評価を工夫すれば、生徒の学習意欲は高まるだろう。

(3) 家庭学習（予習・復習）のあり方を工夫すれば、生徒は授業に意欲的に取り組むだろう。

以上 3 つの仮説を設定しました。

研究の全体構想については本紀要「研究の概要」の 3 に書いてあります。

3 つの仮説から、研究内容を「単元を見通した学習と毎時間の目標を明確に示す工夫」「協同学習を取り入れた授業の工夫、評価の工夫」「家庭学習の指導の工夫」とし、8 つの手だてを考えました。

またこれらの実践を支えるものとして「基礎学力調査を効果的に活用する」「授業アンケートや学習意識調査を生かし、生徒の実態を把握する」「他教科を交えた授業研究を行い、授業の改善に生かす」ことにも取り組みました。

次に手だて 7 に示した『学びくん』の作成意図について説明致します。『学びくん』とは本校が作成したシラバスのことです。各教科の例は紀要の資料に載せてあります。3 点にまとめられます。

1 つは、生徒が学習の到達目標を意識し、見通しを持った主体的・計画的な学習の手助けになるようにと考えました。単元ごとの到達目標や学ぶ時期、時間などを示してあります。授業のオリエンテーションで利用したり、学習の振り返りに利用できるように作成しました。

2 つ目は生徒の自学意識を育てるため、「自学へのアドバイス」の欄を設け、家庭学習の参考になり利用できるものとして作成しました。

また 3 つ目として、保護者に対しても、学習内容や評価について『学びくん』を通して関心を持ってもらいたいと考えています。

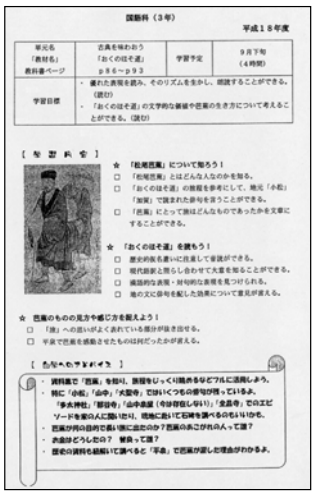
研究の内容と実践

■研究の内容

単元を見通した学習と毎時間の目標を明確に示す工夫①

1　単元見通し学習の工夫

●「学びくん」の活用



「学びくん」国語科（３年）

研究内容　　単元を見通した学習と毎時間の目標を明確に示す工夫

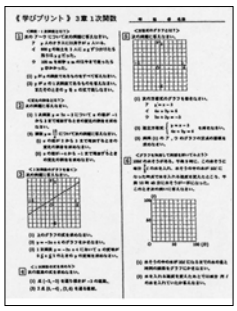
手だて１　単元見通し学習の工夫

■研究の内容

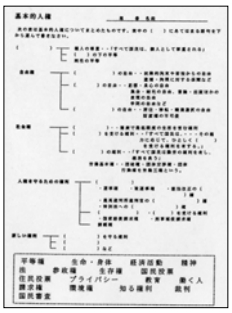
単元を見通した学習と毎時間の目標を明確に示す工夫①

1　単元見通し学習の工夫

●問題形式



《学びプリント》（数学科）



問題形式の例（社会科）

先ほど説明しました学びくんを使い、単元の始めにオリエンテーションを行いました。この単元でつけるべき力や学習内容を見通すことによって、自分が学習していることの意味をつかんだり、内容理解がしやすくなる。そうすれば学習意欲も喚起できると考えました。また単元の学習内容を問題形式にして生徒に示すなど、教科によって工夫しています。

■研究の内容

単元を見通した学習と毎時間の目標を明確に示す工夫②

2　課題の提示の仕方の工夫

- 黒板
- ワークシート

【課題を黒板に明示する】

■研究の内容

単元を見通した学習と毎時間の目標を明確に示す工夫③

3　教材研究の充実

- 「学びくん」の作成
- 生徒の実態把握
- 授業研究

■研究の内容

協同学習を取り入れた授業の工夫・評価の工夫①

4　協同学習を取り入れた授業の工夫

- 単元を見通して、主体的に学習する場や学び合いの場を設定する。
- 協同して学び合う価値のある課題づくりをする。
- 個人思考を大切にし、自分の学習に責任を持たせる。
- 生徒に互いに学び高め合うという意識を持たせていく。
- グループ、ペア、一斉など学習内容に応じて活動形態を工夫する。

手だて２　課題の提示の仕方の工夫

授業の課題、ねらいが生徒に明確に伝われば、生徒は意欲的に授業に取り組み、授業理解も高まると考えました。方法として「黒板に明示す「」ワークシートに示す」を実践してきました。

手だて３　教材研究の充実

教材研究を充実するということは、教師が教材を十分理解し、明確なねらいを提示できるということです。『学びくん』を作成することによって、学期が始まる前に一通り教材を見通すことができました。その上でさまざまな調査の結果や生徒の実態に合わせて教材研究を行い、ねらいがぶれない授業、生徒の意欲、関心を喚起する授業を心がけてきました。

手だて４　協同学習を取り入れた授業の工夫

協同学習とは集団のみんなが高まることを目標にして学習す

ることをいいます。自分の学習に責任を持ち、暖かな人間関係の中で学び合う。そういう活動が学習意欲を高めると考え、授業の中に協同学習を取り入れていきました。その際、

・単元を見通して、主体的に学習する場や学び合いの場を設定する。

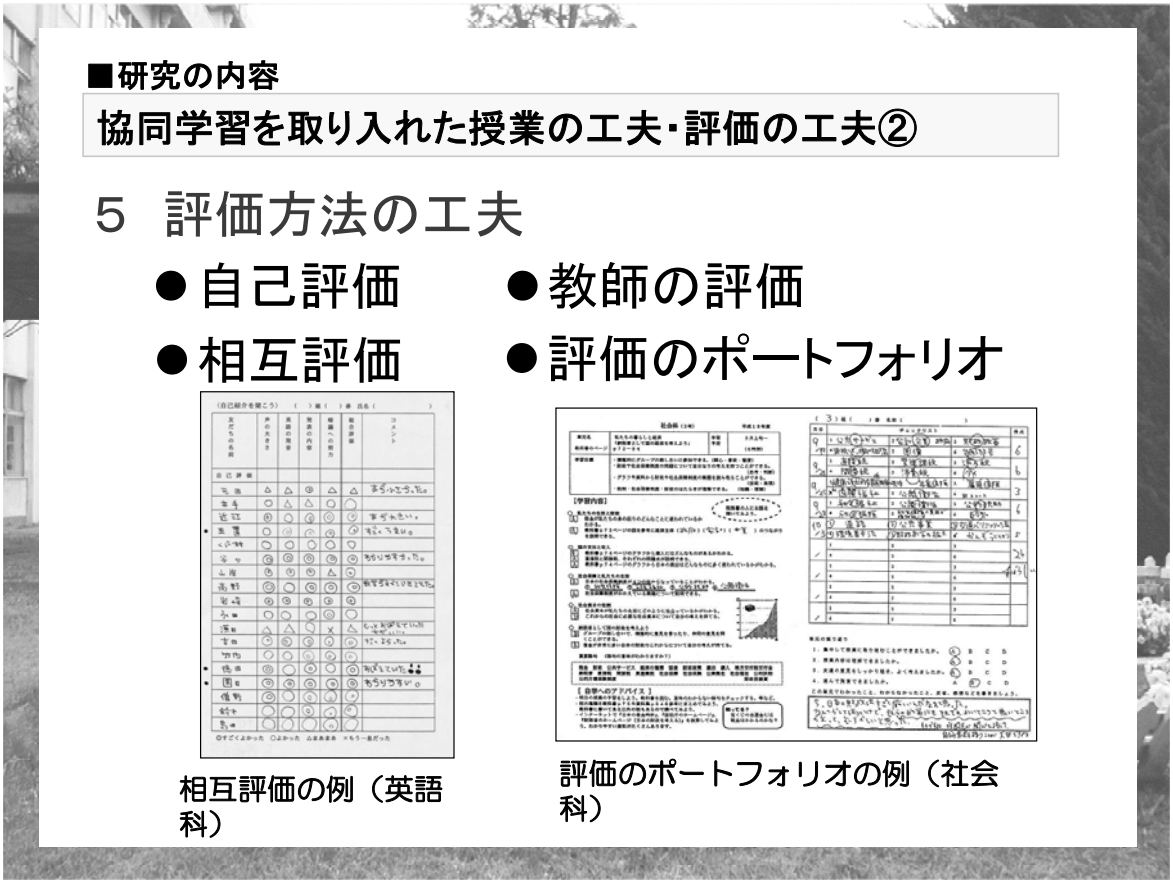
・協同して学び合う価値のある課題づくりをする。

・個人思考を大切にし、自分の学習に責任を持たせる。

・生徒に互いに学び高め合うという意識を持たせていく。
・グループ、ペア、一斉など学習内容に応じて活動形態を工夫する。

ということに留意して取り組みました。

本日の授業も協同学習の考えのもと行いましたが、いかがでしたでしょうか。実践が浅く、十分なものではなかったかもしれませんが、生徒同士の関わりを大切にして授業を行いました。

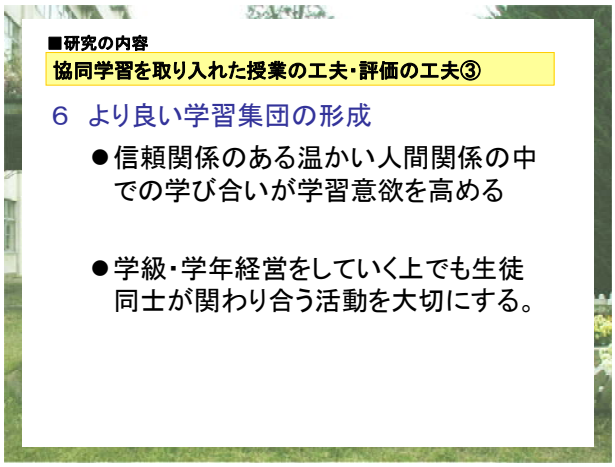


手だて５　評価方法の工夫

自分や仲間の成長に気づき、喜びが持てるようになれば、学習意欲も高まると考え、評価方法を工夫しました。

・自分の成長や頑張りがわかる自己評価。
・互いの良さを認め合える相互評価。
・つまずいている生徒や頑張っている生徒への教師による声かけ、レポートなどへの書き込み。
・自分の変容がつかめる『学びくん』を利用したポートフォリオ。

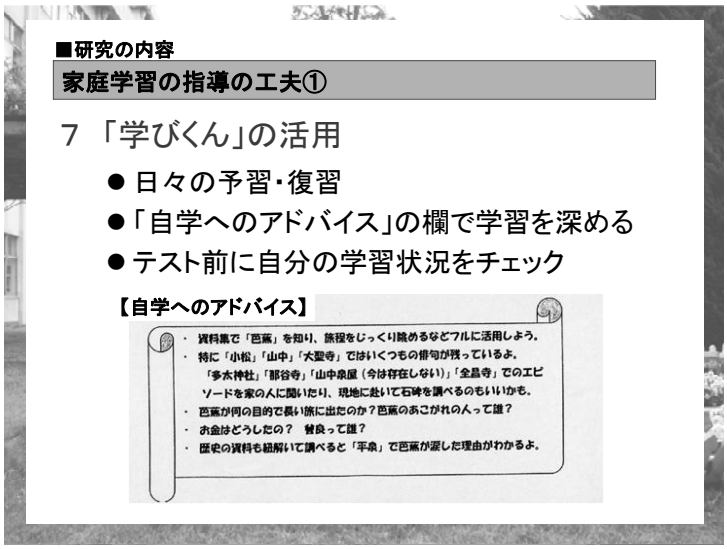
など各教科で工夫し、実践しています。



手だて６　より良い学習集団の形成

協同学習が成立するためには信頼関係のある温かい人間関係が必要です。そのような学習集団を授業の中で作っていくという事を、教師自身が意識する事が大切です。また、折に触れて生徒に自分の学習に対する責任や、学び合うことの大切さを話してきました。また学級・学年

経営をしていく上でも生徒同士が関わり合う活動を大切にし、温かい人間関係を築けるように努力してきました。



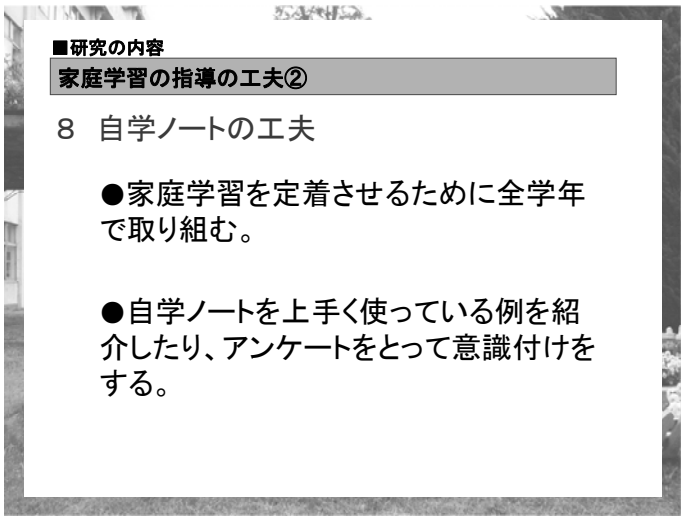
手だて７　『学びくん』の活用（家庭学習の指導の工夫）

家庭学習の指導については、『学びくん』を活用することを薦めてきました。明日の授業は何をするのか、今日の授業の要点がわかったのか、を確認したり、テスト前には自分の学習状況をチェックするように指導しました。

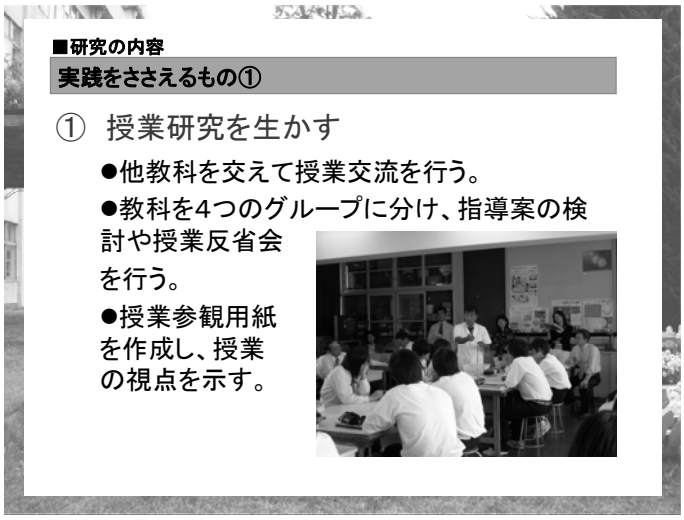
また自学へのアドバイスの欄を参考にして、学習を深めてとほしい願っています。

手だて８　自学ノートの工夫

宿題以外にも自学ノートで学習することを薦めてきました。自分で課題を見つけ、自発的な学習を身につけてほしいと願っているからです。自学ノートは全学年で取り組んでおり、定着するために各学年で、自学ノートを上手く使っている例や、アンケートをとったりして、意識づけを行ってきました。



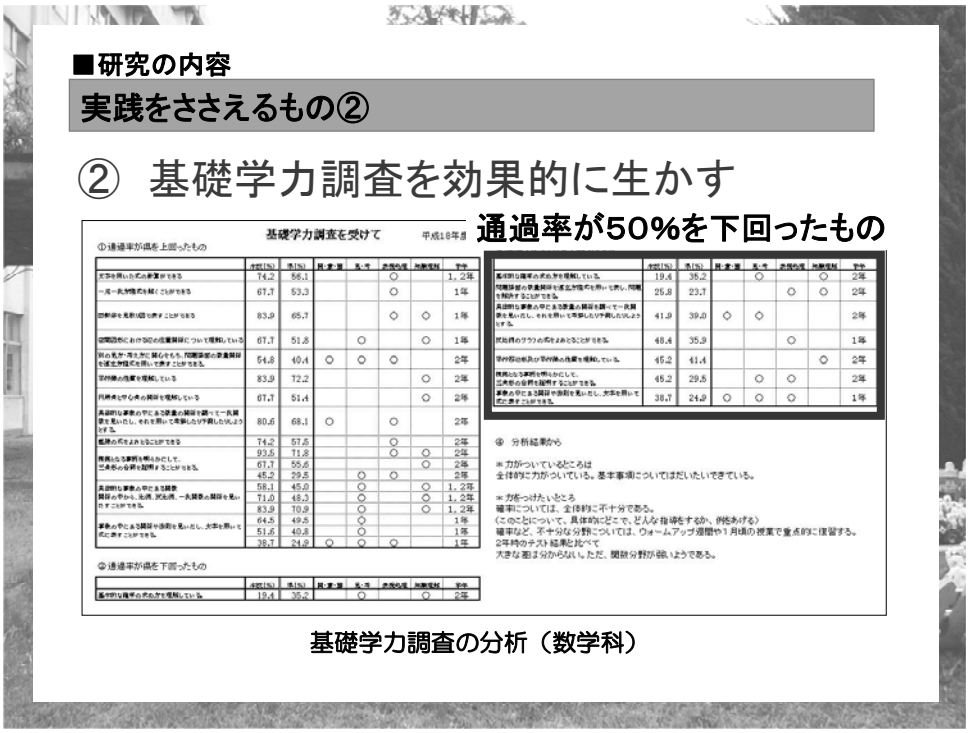
また、手だての１から８の実践を支えるものとして、授業研究による授業改善を行ってきました。昨年度から一人年１回以上は他教科を交えた研究授業を行っています。今年度は教科をくくり（例えば、国語科と技術家庭科の教師が一緒に）指導案の検討をしたり、授業反省会を行ってきました。指導案も書き方を検討し、「意欲を引き出す工夫」の項目を設け、その授業の中での意欲化の手だてを書くことにしました。また授業参観用紙（「研究の概要」6－（4）参照）を作成し、授業を見る視点を明確にして、話し合いが深まるように工夫しました。



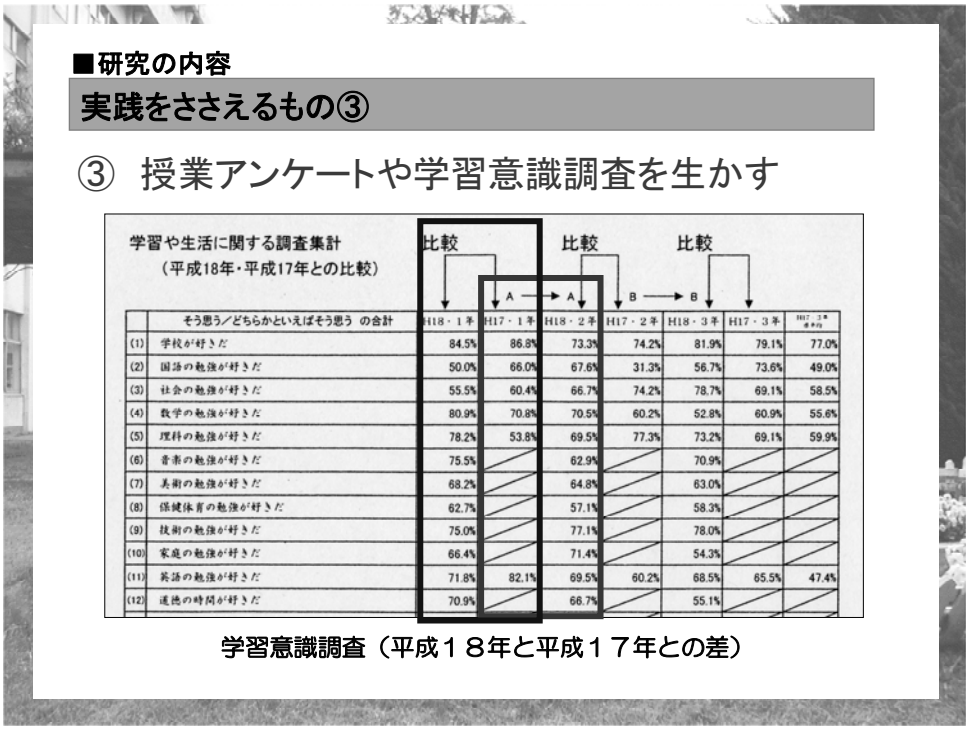
次に県や市の基礎学力調査を各教科で分析し、生徒にどんな力がついたのか、足りない力は何かを洗い出していきました。また。自分の授業を見直す機会ととらえ、指導法の改善を心が

けました。

この表は県の基礎学力調査を分析した数学科の例ですが、生徒の弱い分野をとらえ、これからの指導に生かそうとしています。また。通過率が県を上回っているものでも、50%に達しないものは取り上げて改善できるように考えていきました。

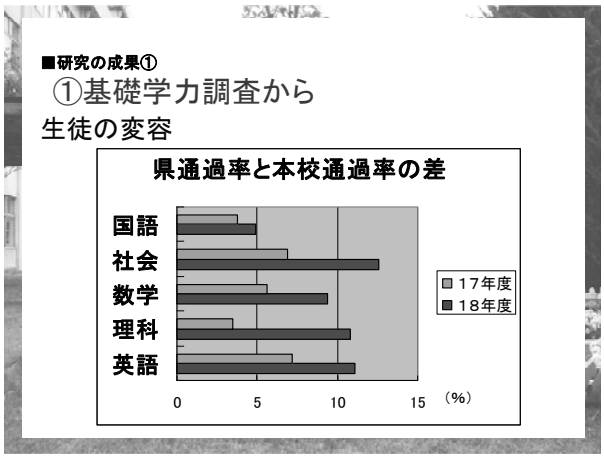


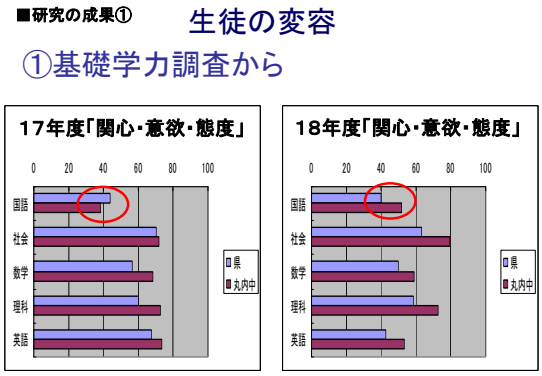
2005 年から 5 月に県の学習意識調査と同じものを全校生徒にとり、7 月と 12 月に授業アンケートをとっています。今年で 2 年目となり、生徒の変容や去年との比較ができるようになってきました。この表は 5 月の学習意識調査をまとめたものです。A→A は同じ生徒がどのように変容したかをつかみます。比較は去年と今年の同じ学年を比較できるようにまとめてあります。データがそろってきて生徒達の形成的変化や特徴がつかめるようになってきました。



このように授業研究や各種調査を活用しながら手だて 1～8 を実践してきました。

研究の成果と課題

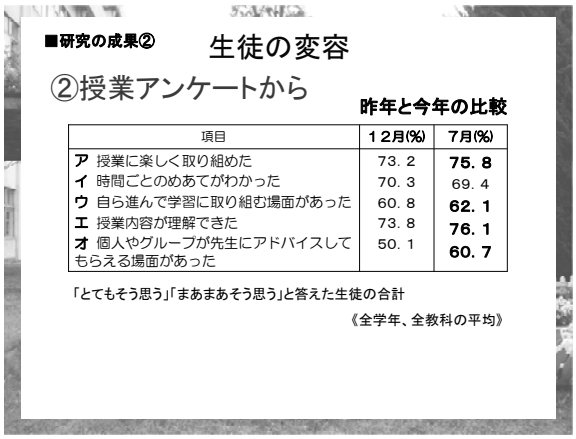




1 年半の研究を通して生徒にも少しではありますが、変化が現れてきました。

基礎学力調査の結果を 2005 年度と 2006 年度を比べると、各教科とも平均通過率が県の通過率を上回り、その差は 2006 年度の方が大きくなっていました。学習の定着に向上が見られたといえます。

また観点別に見ると、「関心・意欲・態度」の県との通過率の差はグラフのように 2005 年度に比べ、2006 年度は大きく広がり向上しています。



■研究の成果② 生徒の変容

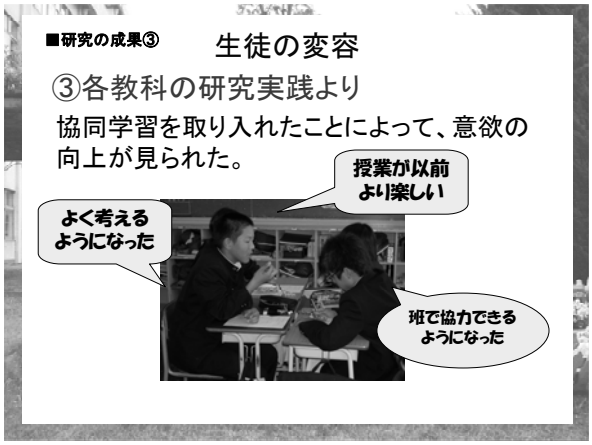
②授業アンケートから

昨年と今年の比較

項目	12月(%)	7月(%)
ア 授業に楽しく取り組めた	73. 2	**75. 8**
イ 時間ごとのめあてがわかった	70. 3	69. 4
ウ 自ら進んで学習に取り組む場面があった	60. 8	**62. 1**
エ 授業内容が理解できた	73. 8	**76. 1**
オ 個人やグループが先生にアドバイスしてもらえる場面があった	50. 1	**60. 7**

「とてもそう思う」「まあまあそう思う」と答えた生徒の合計

《全学年、全教科の平均》



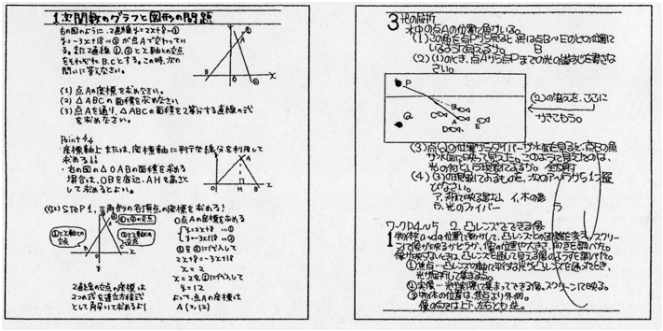
この表は授業アンケートの全学年、全教科の平均を昨年12月と今年7月とで比較した表です。学校全体としては、わずかではありますが、授業が改善され、楽しく授業に取り組んでいる生徒や授業内容が理解できたという生徒が増えているといえます

各教科の実践からも協同学習を取り入れたことによって授業に対する生徒の意欲の向上が見られたと報告されています。例えば「消極的な生徒でも、少人数のグループでは自分の考えを伝え合っていた」。という報告があったり、生徒の感想にも「授業が以前よりも楽しく、考えて取り組むようになった」「班で協力できるようになった」などがありました。

■研究の成果④　　生徒の変容

④学年の取り組みから

自学ノートの取り組みは、家庭学習に対する意識付けに、一定の成果がみられた。



自学ノートの例

また学年の取り組みの中で、自学ノートの取り組みについては、生徒により差があり、家庭学習が授業に対する意欲にまではつながってはいませんが、家庭学習に対する意識付けとして、一定の成果があったと考えています。

一方、私達教師が学んだことも多くあります。

生徒と共有した「ねらい」を常に意識して、授業を進めるようになりました。また『学びくん』を作成することによって学期を見通した教材研究ができ、指導計画を工夫することもできました。

杉江先生をお招きしての研修会では教育を行う上での当たり前のことに改めて気づかされました。「温かい信頼関係の中での学習が意欲付けになる」「授業の中で学習集団を作っていくべき」など生徒同士の関わりの大切さを改めて認識し、実践していこうとする思いを持つようになりました。

■研究の成果⑤　　教師の変容

- 生徒と共有した「ねらい」を常に意識して授業を進める
- 「学びくん」作成による教材研究の充実、指導計画の工夫
- 協同の意識を持って生徒を教えていこうとする思い
- 客観的資料から自分の指導を振り返る

さらに、今までは教師としての経験や憶測で生徒の力を判断することが多かったのですが、研究を進める中で基礎学力調査や学習意識調査など客観的な資料から生徒の力を分析したり、自分の指導を振り返り、授業改善につなげることができるようになりました。

■今後の課題

今後の課題

- 「学びくん」をより活用したり、効果的な単元見通しの方法をより工夫していく。
- 協同学習の基盤となる学習集団作り、課題の作り方、評価の工夫に努める。
- 学習意識調査、授業アンケートの目指す目標をどう設定していくか、検討する。
- 「学びくん」をより家庭学習に利用できるように改善する。

今後の課題として、主に次の４点があげられます。

① 単元見通し学習の工夫はまだ教科よってばらつきが見られます。『学びくん』をより活用したり、改良したり、効果的な単元見通しの方法を工夫していきたいと考えています。

② 協同学習の基盤となる学習集団づくり、課題の作り方、評価の工夫にさらに努めていく必要があります。

③ また、学習意識調査、授業アンケートを行う上で、めざす目標すなわち本校の到達目標のパーセンテージをどう設定していくか、検討する必要があります。

④ 最後に家庭学習を充実させる指導の工夫をさらに行っていきたいと考えています。本校は家庭学習の時間は県に比べると多いのですが、内容は宿題、テストに備えるなど受け身的なものが多いという実態は変化がありませんでした。主体的な家庭学習ができるように指導をさらに工夫していきたいと考えています。また、『学びくん』を家庭学習に使用している生徒は全体の４分の１でしかありません。より家庭学習に利用できるように改善していきたいと考えています。

このように、まだまだ課題は山積みですが、本日ご参会の皆様からご意見やご感想をいただき、これからもさらに研究を進めていきたいと考えております。

（報告者　本間　真弓）

研究の実践

国　語　科

1 教科研究主題

場に応じた言葉を選び、意欲的に自分の意思を伝え合おうとする生徒の育成

2 主題設定の理由

昨年度は「自分の思いを自分の言葉で表現できる生徒の育成」という国語科研究主題で研究を進めてきた。表現活動に力を入れ、討論やスピーチなどの音声表現と、感想や作文などの文章表現の二つを重視して指導を行った。音声表現については、授業中に活動を設定した後で教師や他の生徒に肯定的に評価されることにより自己表現に対する抵抗が少なくなったようだ。文章表現に関しては、できるだけ多くの文章を書かせて、添削して返すことに努めた。その結果、書くことに少しずつ慣れ、書く意欲が高まったようだ。

昨年度の指導の結果、自己表現に対する抵抗は減ったように感じられた。しかし、表現している言葉が適切ではなかったり、話し言葉と書き言葉を意識せずに表現していたりなど、その場に応じた言葉を使っているかについては疑問が残った。そのときに思いついた言葉でいい加減に自己表現するのではなく、豊かな言語感覚を持ち、その場に最も適した言葉を用いてよりよい表現をめざしていかなければならない。

また、年度当初の教科部会で小松市の学力調査と生徒の実態を分析して話し合った結果、分かりやすく説明する力（話す・書く力）が充分ついていないと判断し、3 年間の見通しを持って育てたいという結論に達した。その他には、語彙の不足も問題点として話題にあがった。場に応じた言葉を選ぶためには、ある程度の語彙力も必要である。

これからの社会を生きていく生徒にとって、その場に応じた言葉を選んで自分の意思を伝え合う力は必要不可欠である。伝え合う力が高まれば、よりよい人間関係が構築され、学習集団としてのとまとまりができ、学習に対する意欲が高まると考える。将来的にも、家庭や社会の中で、適切に自己表現でき、その結果多くの人と分かり合え、さらに豊かな人生を送ることができるであろう。

以上のような理由から、本主題を設定した。

3 実践の内容

(1)　ねらいを明確にした授業

生徒に学習の見通しを持たせるために、『学びくん』を活用した。年度当初の授業で『学びくん』を配布し、年間計画と評価の観点、単元の学習目標や、達成目標などを確認しながら、1 年間の流れとつけたい力を説明した。2、3 年生には、前年度の学習がどの単元で生かされるのかを意識させ、単元の系統性に気づかせるようにした。

そして、新しい単元に入る時には、必ず教科書の単元の扉にある「単元のねらい」を板書し、ノートに書かせることで単元のねらいを全員で共有することをめざした。同時に『学びくん』を用いて、この単元での達成目標を確認し、学習が終わった時には、達成できたかチェック欄に印をつけて確認させた。

毎時間の授業では、本時のねらいを板書し、意識させるように心掛けた。「この時間が終わったらこんな力がついている」「こんなことがわかる（できる）ようになった」という願う具体的な姿を提示し、学習の意欲化を図った。

(2)　主題にせまるための工夫

場に応じた言葉を選んで話したり書いたりする機会の設定を意識し、授業の構成を考えてきた。そのためには、語彙が豊富でないと適切な言葉を選択できない。そこで、年度当初の教科部会で新出漢字の習得を目的とした漢字調べと、難語句調べを予習として徹底させることを決め、語彙力を増やす取り組みを行ってきた。文章を読んだときに意味が何通りもある語句については､内容を照らし合わせて適切な意味を選ぶなど､辞書の活用を徹底することから始めた。

また、豊かな言語感覚を身につけるためには、読書は必要不可欠であると考えた。全校の取り組みとして朝自習の時間に読書を行うとともに、学級文庫を各クラスに設置し、幅広いジャンルの本を読む機会を設けている。

それを実現する具体的な授業の取り組みとして、1 年では「話す・聞く」の領域を重視して指導を行った。1 学期は「発見したことを伝えよう―スピーチの会を開く」という教材で小学校と中学校の違いを見つけて 1 分間スピーチを行った。自分の言いたいことが効果的に伝わるように構成を考えさせ、スピーチメモを作ってスピーチに臨んだ。準備に時間をかけた分、人前で話すことが苦手な生徒も自分の言葉でスピーチすることができた。テーマは「小学校と中学校の違い」であったが､小学校の違う生徒にとっては､それぞれの小学校の違いも発見でき、興味深い内容となった。

2 学期は「話し合って考えよう　グループ･ディスカッション」で 4～5 人グループを作り、グループで自分の意見を伝え合う学習に力を入れて行った。「保育園の時にお世話になった先生にお祝いの気持ちを伝える方法」をテーマとし、考えやすいように、手紙と電話にしぼってディスカッションを行った。初めに個人でその方法を採る理由、その方法の特長・問題点を考えさせ、その後で話し合いを行った。事前に特長や問題点を考えさせているので、スムーズに話し合いが進んだ。

普段の授業では、授業に積極的に取り組もうとする生徒が多く、発問に対して自分の意見を言いたがる傾向にある。意欲的で良いことではあるが、反面で自分の意見を通そうとして他の意見が聞けない生徒も中にはいる。誰かが発言している最中に、反対の意見を言い始めてしまうこともあり、基本的な授業のマナーの指導も行っている。

ディスカッションの様子

2年生では「短歌を味わう」の教材で、言葉の拡がりを目的とした取り組みの研究授業を行った。具体的には、教科書にあげられている作品を学習したあと、巻末の短歌作品について 4人のグループを作り、一つの短歌を選び、自分達の「読み」を深める学習活動を設定した。

先ず、自分自身でその作品に詠まれている世界（聞こえるもの、見えるもの、香り、情景、作者の心情）について自分の考えをワークシートに書き込むこととした。

次に、グループの協同学習として、司会、記録、発表、サポーターの4つの役割に分担して、それぞれの考えを発表し合った。そして、話し合いによって深まった「自分達の読み」を、クラス全体に発信するという活動の流れである。教師側の「しかけ」が功を奏し、生徒達の白熱した話し合いは時間をも忘れるほどであった。

授業終了の感想では、この学び合いに取り組むことで、自分だけでは見えなかった言葉の裏側や､微妙な感情の動きを仲間の思考を通して享受し合うことができたという感想が多かった。一つの言葉にも大きな拡がりのあることを知り、作者がなぜこの言葉を選んだのかという心情まで考えるようになり、短歌作品の鑑賞のおもしろさを感じることができたようである。

ただ、教師側の課題の提示に曖昧な点があり、せっかく言葉が広がり、味わい、深まったにもかかわらず「グループでまとめる意味はあるのか」と、参観者からの指摘があった。「グループの話し合いの結果､『読み』をまとめるように」としてしまったことに大きな失敗があったことは否めない。

しかし、協同学習をすることで学ぶべき姿、支え合う姿が随所に見られた。グループの発表者が皆の前で発表する際、緊張のあまり泣き出しそうになるのを横にいたサポーターが何気なく交代して何事もなかったかのように支えるという場面があった。「頑張れ」という温かい声援が教室のあちこちから聞こえ、一つの学習集団としての連帯感とも信頼感ともとれる温かい雰囲気に包まれるということがあった。

このようにクラス全体では話すことに抵抗がある生徒も多いため、少人数での意欲的な発表の機会をことある毎に設定している。

3年生の一斉授業では、発言する生徒が決まっている。しかし、自分の考えを持ちながらも、声を発することがない生徒もいるため、少人数での学習形態を度々設定してきた。

昨年度は自分の考えを伝え・聞き合う場面を設定するために、毎授業開始とともに、一人ずつ1分間のスピーチを行ってきた。普段なかなか見ることのない学級の仲間の意外な一面を垣間見ることで、仲間として認め合い、尊重していこうとする雰囲気が広がり、教師側からの働きかけがなくても自分の出番を意識し、聞いてもらうための準備も万全に行うほどになった。思春期にありがちな「恥ずかしいから言いたくない」という意識が、「聞いてもらいたい」という意識へと変わった瞬間である。

今年度も同じ取り組みを後期から始めることにした。まだ「恥ずかしい」から完全に脱することはできないが､「どんな話をするのだろうか」という意欲的な気持ちで聞くことができるようになった。「聞いてもらえる」という喜びが、「是非聞いてもらいたい」に変化する日が必ず来るはずである。

「聞き上手になろう」という教材では、ビデオのトーク番組を見て相手の話したいことを引き出すためにはどんな工夫が必要かを考えていった。その学習を基に「私の将来の夢」について「自分がゲストならばどんなことを話したいか」を中心に考えを巡らせ、インタビュアーの聞き方を工夫させた。実際にインタビュアーとゲスト、助言者、記録者に分かれて対談をした。

友だちの「将来の夢」を聞くことで、自分の進路を考えるきっかけにもなり、盛り上がった対談となった。また、普段の生活の中でも、「聞くこと」の大事さがわかり授業に臨む姿勢・友だちとの軽妙な会話にも変化が見られた。

(3) 評価の工夫

まず『学びくん』を使い、ねらいに沿った課題の提示と学習活動の流れの確認を徹底することで授業後の生徒達の理解度や集中度合いを自分で振り返ることができるように工夫した。

また、文章表現に関しては、感想や作文などの「書く」機会を増やし、添削したり評価の観点に合ったコメントを添えたりして返すように心掛けた。瞬時に評価し、生徒に返すことで、生徒達が学びを振り返りができ、次の学習活動に対する意欲へと変わっていった。

音声表現については、活動後の自己評価やグループ内での相互評価を重視した。教師からの評価だけでなく、クラスメイトから評価されることで意欲化が図られた。授業中の音読や発言の際にも、適切な音量、間の取り方、速度についての指導を適宜行い、日常的に意識させた。

4 成果

ねらいを明確にした授業の成果としては、『学びくん』で学習活動や到達目標を確認したり、単元や毎時間のめあてを明記したりしたことで、授業後の到達目標を意識できる生徒が増えた。授業アンケートの結果を見ても、「1 時間ごとの授業のめあてがわかったか」という問いに対して肯定的な回答した生徒の割合が全学年で大幅に増えている。

2、3 年生では、単元の系統性を意識して指導した結果、既習事項と現在学習している教材との関連を理解し、「なるほど、去年頑張ってやってよかった。」という自分の力がついていると確認できることにつながり、さらに意欲的に学習に取り組むことができた。

主題にせまるための取り組みの一つとして協同学習を意識した工夫の結果、意欲的に自分の意見を伝えようとする生徒が増えたようである。消極的な生徒も少人数のグループでは、自分の意思を伝え合うことができ、充実した時間を過ごすことができた。

また、読書や語句調べにより、語彙を増やし豊かな言語活動を推し進めることで、以前は文章中の言葉の引用が多く見られたが、読み取ったことを自分に置き換えて書くことができるようになるなど、自分の感想を自分の言葉で表現しようとする意欲が感じられるようになった。

5 今後の課題

生徒は与えられた課題に対しては、積極的に取り組むようにはなったが、自ら課題を求めていこうとする姿や、発展的な学習への取り組みへの拡がりが少なかった。この反省を生かし、授業中の学習活動のみならず発展的に学習できる機会を増やし、生徒が自ら進んで学習に取り組みたくなるような仕掛けづくりをさらに工夫していくことが今後の課題であると考える。

研究発表会公開授業指導案

第３学年３組　国語科学習指導案

指導者　西尾　伸子

1　単元名

話す・聞く　説得力のある話し方をしよう

2　単元の目標

① 学習活動に見通しを持ち、説得力のある話し方の学習に積極的に取り組もうとしている。（関心・意欲・態度）

② 話の中心の部分と付加的な部分、事実と意見との関係に注意して、話したり聞き取ったりしている。（話すこと・聞くこと）

③ 話の内容や意図に応じた説得力のある表現に注意して、話したり聞き取ったりしている。（話すこと・聞くこと）

④ 相手や目的に応じて話し方を変える必要があることに気づいて話したり聞き取ったりしている。（言語事項）

3　指導にあたって

（1）教材観

この教材では「相手を納得させるための話し方を学ぶ」ことが目標である。そのために、説得力のある話し方のポイントを考え、ロールプレイング（役割演技）による練習を通して話し方を身に付けていくことが求められる。活動に際してはこれまで学習してきた「話すこと・聞くこと」の内容をふまえることが重要であると考える。特に 2 年時に学習した「立場を考えて討論しよう」の学習を思い出し、自分の意見を一方的に押し付けるのではなく、数字や根拠を明確に示すことによって、相手がきちんと理解し納得するような話し方について学習していくことによりコミュニケーションの力が培っていけると考える。

（2）生徒観

本校では意欲を高めるための手立てを試行していくことを本年度のねらいとしており、国語科でも、「場に応じた言葉を選び、意欲的に自分の意思を伝え合おうとする生徒の育成」を年間テーマとして掲げ、様々なコミュニケーションの場を設定し、目標達成をめざしている。

石川県・小松市の基礎学力調査の結果から、「自分の考えを伝える力」がまだ充分ではないと分析した。また、普段の学習活動・生活の中で見られる生徒達の言語活動についても未熟で、自分の考えを伝えることは伝えるが、場に応じた言葉を選んだり相手を納得させるような根拠も示さないままであったり、どちらかというと一方的な言い放し・押し付けの会話が多くみられ、「対話」とは程遠いおしゃべりになっている現状がある。

以上の現状をふまえ、場に応じた適切な言葉を選んだり、相手を納得させられるような根拠を示したりすることで相手がきちんと理解し納得するような話し方について考えていきたい。

(3) 指導観

説得力を高める話し方の必要性を考えることが本単元の目標と掲げ、相手を説得するための3つのポイントを押さえることから始める。その3つのポイントを意識し、「説得する方」と「説得される方」ペアとなり、それぞれの立場からどう説得したらよいか、またどう説得されたいかを考えたロールプレイングを行なう。

ロールプレイングのために、身近な話題から社会人になったつもりで、「A.生徒会役員の立候補を勧める」「B.テレビゲームをやめるよう説得する」「C.車を販売する時にハイブリッドカーを勧める」「D．部活動が終了したが、健康のためにジョギングをするよう説得する」の4つの課題を設定する。この4つの課題を設定するために付加的なものをあげたり、話し手の意図をしっかりとつかませるためのワークシートを工夫する。

ワークシートには両方の立場で書いた事柄を、ペア同士が相手に伝え、また伝え合いの中から参考になることや改善点を見つける機会とするため実際にロールプレイングしてみる。その後、互いに意見・感想を伝え合いさらに充実させたロールプレイングにする。

さらに、説得力のある話し方について考えを深めることがねらいであるため、2 つのペアが交互にロールプレイをすることで友だちのロールプレイを見て、また、自分達がロールプレイをしてみての両方の立場から、それぞれの言葉がどうか感じられるかの意見を出し合い、自分達の気づかなかったことや相手への改善点などをアドバイスし合う場面を設定する。

本学習では、学校生活はもとより、広く社会生活の中で生きて役に立つ力となることが望まれる。義務教育の最終段階にあるこの時期に、場に応じた言葉を選んだり、根拠を明確に示すなどのコミュニケーション能力を磨くことが将来の社会参加に向けての力になることにも気づかせ、学校での学習が将来生きていく力になるという目的意識を持って学習に取り組ませたい。

4　単元の指導・評価計画（総時間5時間）

次	教材名及び目標	主な学習活動	関心・意欲・態度	話す力・聞く力	言語事項
一 1時間	「説得力のある話し方をしよう」 相手を納得させるための話し方のポイントがわかる。	「説得力のある話し方のポイントを考える」を読み、相手を納得させる話し方のポイントを理解する。	学習活動の見通しを持ち、説得力のある話し方の学習に意欲的に参加している。（観察・評価表）		
二 2時間	ロールプレイングの目的を理解し、説得力のある話し方について考えることができる。	ロールプレイをするための構想を練る。（個人思考）	相手の立場になって考えること、相手意識を持って説得にあたることを意識して自分の言葉を考えている。（ワークシート・観察）	自分の考えや気持ちを的確に話すのにふさわしい話題を選び、付加的な根拠を考えることができる。（ワークシート）	
三	ロールプレイ	話の中心となる事柄を	互いの話の内容か	説得力のある話し方	

2時間	ングを通して説得力のある話し方を意識して、聞いたり話したりすることができる。	考え、相手の立場を意識してロールプレイする。(ペア学習) 説得力のある話し方になるように話し合って、見直しをする。	ら、3つのポイントについて意見を交換し合っている。(観察・ワークシート)	のための 3 つのポイントを意識して話したり聞いたりしている。(ワークシート・観察)	
	説得力のある話し方の必要性について考えることができる。	友だちのロールプレイを見て、説得する側とされる側の両方の立場から「説得力のある話し方」について考える。(グループ学習) 友だちのロールプレイを見て「説得力のある話し方」についてまとめる。(グループ学習)		説得力を高める 3 つのポイントを意識して話の内容や意図に応じた説得力のある表現の仕方に注意して話したり聞き取ったりすることで、説得力のある話し方の必要性について考えることができる。(発表・ワークシート)	友だちのロールプレイを見て、「説得力のある話し方」をするための相手や目的を考えた言葉を聞き取っている。(評価表・観察

5　本時の学習

(1) 説得力のある話し方をしよう（本時　5/5)

(2) 本時のねらい

話の内容や意図に応じた説得力のある表現の仕方に注意して話したり、聞き取ったりすることで、説得力のある話し方の必要性について考えることができる。　（話す・聞く）

(3) 準備

ワークシート、評価表。

(4) 展開

過程 時間	学習活動	指導上の留意点	評価（観点・方法）
導入 10 分	①既習内容の確認をする。 ②学習のめあてを知る。 ③学習の流れを知る。 ④役割分担する。	・説得力のある話し方の３つのポイントが押さえられているかを自分で考えた話の内容で確認し、適切な表現で伝えられるようにペアで見直しをさせる。 ・グループ学習の目的や方法を提示する。	

展開 30 分	⑤2 つのペアで互いにロールプレイし合う。	前時でペア同士が意見交換したことを確認し、ロールプレイングに臨むようにさせる。	
	⑥説得する方と、説得される方の話し方について、どのような言葉や、話し方が必要かの意見を交換し評価表に記入する。	☆自分が説得される立場だったら、どのように話をされたいか、されたくないかということを考えさせる。 〇相手の置かれた状況によって、話し方や内容を工夫して考えながら話している点を見つけさせる。	相手を説得するための 3 つのポイントを意識して説得力のある話し方についての工夫をしながら話している。(話す力・聞く力：観察・ワークシート)
まとめ 10 分	⑦活動のまとめを評価表に書き込み振り返る。 ⑧グループで確認し合ったことをクラス全体に向けて発表する。	4 人の話し合いの中で、みんなに伝えたいポイント（一番大事だと思うもの）について発表するように伝える。	

☆：努力を要すると判断される状況の生徒への支援

〇：ねらいを達成したと判断される状況の生徒への支援

(5) 意欲を引き出す工夫

日常のいろいろな場面を思い起こさせ、自分の体験から説得したり、説得されたりした経験を洗い出すことで、実態に即した話し合いができると考えている。

まずペア学習で発表し合うことで、自分が考えた内容や工夫したことを、気軽に確認し合うことができる。さらに、ペアで確認し合ったことをもう一つのペアとの発表へと広げることで、互いのペアの話し方についての参考となることや、改善したらよい点などをアドバイスすることができると考えている。

本学習が将来生きてゆくための力になるという目的意識を持たせることで、意欲的な活動ができるものと考えている。

社会科

1　教科研究主題

生徒の意欲を引き出し、考える力、表現する力を伸ばす指導の工夫

2　主題設定の理由

社会科として大切にしたい学力は、社会的事実や事象を多角的、多面的にとらえ、必要な資料を取捨選択したり、自分なりの考えを持ったりすることである。そのためには基礎となる知識の定着を重視しなければならない。昨年度の基礎学力調査では、基礎的な知識、技能の定着は高かったが、歴史を大きくとらえる力や、課題を作る力などがやや弱いことがわかった。また、4 観点のうち、関心・意欲・態度が他の 3 観点に比べると、通過率が低かった。加えて普段の授業の中でも、自分の考えをうまく表現できない生徒が多く見られるという現状があった。これらのことから「自分の考えを持つことができ、それをわかりやすく人に伝えることができる生徒」「学習に意欲的に取り組む生徒」を育成することをめざし、上記の主題を設定した。

3　実践の内容

(1) ねらいを明確にした授業

1) 単元見通し学習

① 学習に見通しが持て自らが学習していることがどのようにつながっていくのかがわかることが生徒の学習意欲(授業で自ら課題を設定し、その課題を自ら解決していこうという意欲)につながると考え、学習する単元の内容や身につける力を『学びくん』を使って、単元の始めに示すようにした。

② 単元の始めにその単元で身につけてほしい知識を問題形式のプリントにして生徒に渡し、教科書を使って調べさせる活動を取り入れた。身につけるべき基礎用語を示し、学習のポイントをわかりやすく提示した。

2) 毎時間ごとの目標の明確化

① 「黒板に示す」「ワークシートに示す」「口頭で説明する」など目標提示の方法はさまざまであるが、毎時間の目標をきちんと示すことに心がけた。

② 課題を提示するときは、生徒が 1 時間の授業で、課題に対する答えが出しやすいように心がけた。例えば「日本の財政について考えよう」では曖昧なので、「日本の財政の問題点を考え、日本の財政を良くするにはどうしたらよいか考えよう」と、より生徒が何を考えればよいのかがわかるように具体的な課題を設定した。

(2)　主題にせまるための工夫

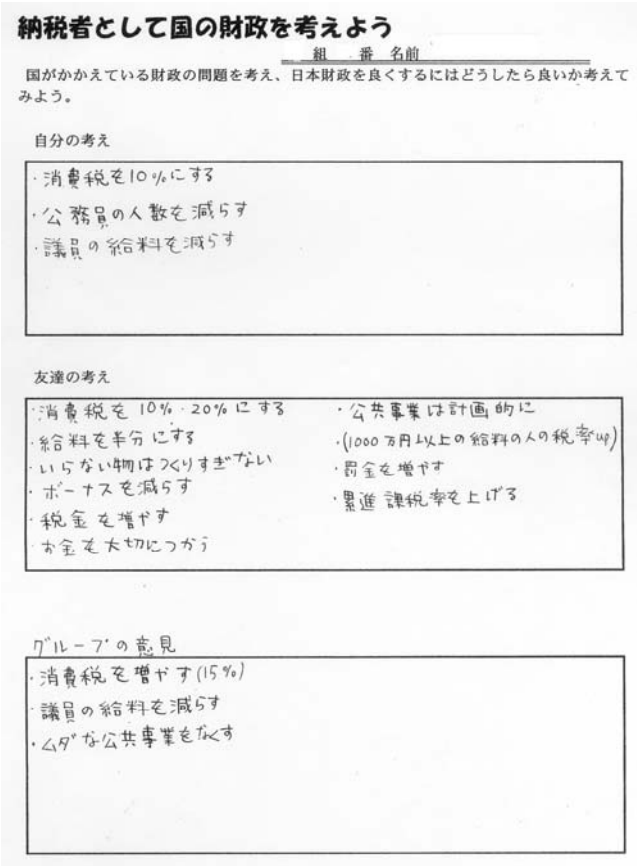
1) 学び合う場の設定

協同学習の理念に基づいた学び合いの場を多く設定することを心がけた。　グループに対し、課題を与え、まず、一人ひとりが自分の考えをノートやワークシートにまとめる時間をとる。その後グループで話し合いをし、グループで解決をする。グループの代表が発表し、全体で話し合う。この進め方が社会科で多くとっている

形である。自分の考えを書く、小集団の中で発表するという機会を多く持つことで思考力や表現力を伸ばしたいと考えたからである。

また、生徒同士が関わり合って主体的に学習することで、普段あまり発言しない生徒も意欲的に話し合ったり、活動したりする場面が見られた。

1年生では、2人ペアを作り、分からないところをお互いに教え合えるよう学習形態を工夫した。友だちの発表をしっかり聞く、わからない友だちに対して教えるなど、クラス全体で前向きに学習に取り組める雰囲気づくりに努めている。


納税者として国の財政を考えよう

組　番　名前

国がかかえている財政の問題を考え、日本財政を良くするにはどうしたら良いか考えてみよう。

自分の考え

・消費税を10%にする
・公務員の人数を減らす
・議員の給料を減らす

友達の考え

・消費税を10%・20%にする
・給料を半分にする
・いらない物はつくりすぎない
・ボーナスを減らす
・税金を増やす
・お金を大切につかう
・公共事業は計画的に
・(1000万円以上の給料の人の税率up)
・罰金を増やす
・累進課税率を上げる

グループの意見

・消費税を増やす(15%)
・議員の給料を減らす
・ムダな公共事業をなくす

<u>グループに与えた課題の例</u>

1 年　歴史年表の作成（クラス全体の課題）

2 年　「中国の一人っ子政策に賛成か反対か討論しよう」

「日本の食料自給率が低いのはなぜだろう」

「明治政府の諸政策を調べよう

3 年「消費者被害にあったら君ならどうしますか」

「自分の企業を紹介し合おう」

「日本の財政を良くするにはどうしたらよいか考えよう」

2）調べ学習

自分で課題を見つけ調べる、わかりやすくまとめわかりやすく発表する、を目標に取り組んでいる。

1 年：「石川県の紹介マップを作ろう。」（夏休みの宿題）：自分なりに石川の特徴をポスター形式でまとめる。

「道府県を調べよう。」：グループで役割を分担し１つの道府県を調べ、グループで発表する。

2 年：「ＥＵの国々を調べよう。」：グループで役割を分担し１つの国を調べ、グループで発表する。

「世界の国々を調べよう」（夏休み宿題）

「外国の人に日本を紹介しよう」：日本の良いところを自分で見つけ、レポート形式でまとめる。

「幕末から明治維新にかけて活躍した人を調べよう」

3 年：「自分の企業を作ろう」

3) 基礎基本の定着

① 全学年において授業の始めに前時の復習として5問程度の確認テストを実施している。2、3年生は6問目に時事問題を加え出題している。

② 歴史用語の定着については単元が終了した後、単元テストとして小テストを行い定着を図っている。

③ 基礎学力テストでは毎年、歴史分野については時代の特色をつかんだり、歴史の流れを大きくつかんだりすることが不得意という結果が出ている。 1年生の 『学びくん』に年表をつけ、学習している時代を常に意識できるように工夫している。また、各クラスごとに歴史の授業を通して、全員で年表を作成するよう工夫している。

3) 家庭学習

① 2 年生においては単元が終わるごとに自分でノートまとめに取り組ませている。まとめ方がわからない生徒は、教科書の図やワークシートを写すだけであるが、少しずつ、自分でまとめられる生徒が見られるようになってきている。

② 『学びくん』に載っている自学のポイントを使い家庭学習することを勧めている。

(3) 評価の工夫

① 単元の始めに『学びくん』を利用し、この単元でつけるべき力を示した。

② 単元の終わりに『学びくん』を使って、

・自分がどの程度、学習が理解できたのか、理解できないところはどこかということを明らかにするために自己評価活動を取り入れた。自己評価することで生徒の学習意欲も高まり、また、それを教師が見て生徒の理解の様子をつかんだり、補足すべきことをつかんだりした。

・ 授業に対する取り組み方も自己評価させた。

・ 小テストについては『学びくん』と同じプリントを毎回実施している。単元が終わっ たときに自分で小テストの点数を合計し、自分の頑張りがわかるようにしている。
生徒の自己評価には教師がコメントを添えて返している（本稿末資料参照）。この評価カードはファイルされ、自らの学習を振り返ることができるようになっている。

③ 1 年生の道府県調べや 2 年生の国調べなど、調べ学習を行う際には、相互評価を行って、お互いの良いところを認め合う場を設定している。

4. 成果

成果としては、基礎学力調査の定着度の向上があげられる。社会科の 2005 年度の基礎学力調査の結果は県の通過率を 6.9 ポイント上回っていたが、関心・意欲・態度は県の通過率とほぼ同じくらいであった。2006 年度は県の通過率を全体で 12.6 ポイント上回った。特に関心・意欲・態度は 16.3 ポイント上回り、成果がみられた。

昨年 12 月の授業アンケートの結果を見ると、「授業内容を理解できた」の項目に肯定的に答えた生徒は全学年で 78.7%であった。それが、今年 7 月の結果では 85.5%に上昇している。生徒は着実に力を伸ばし自学の芽が生まれてきたのではと感じている。

生徒同士が話し合い、友人の意見を聞いたり学び合う機会を多く取り入れたりすることで、社会的事象に関心が高まったように感じている。

毎時間の確認テストの実施が、徐々に生徒の学習意欲につながってきたように思われる。教師

が教室に行くと、すでに教科書を広げ勉強している生徒も多くなってきた。今後の基礎基本の定着に期待しているところである。

5. 課題

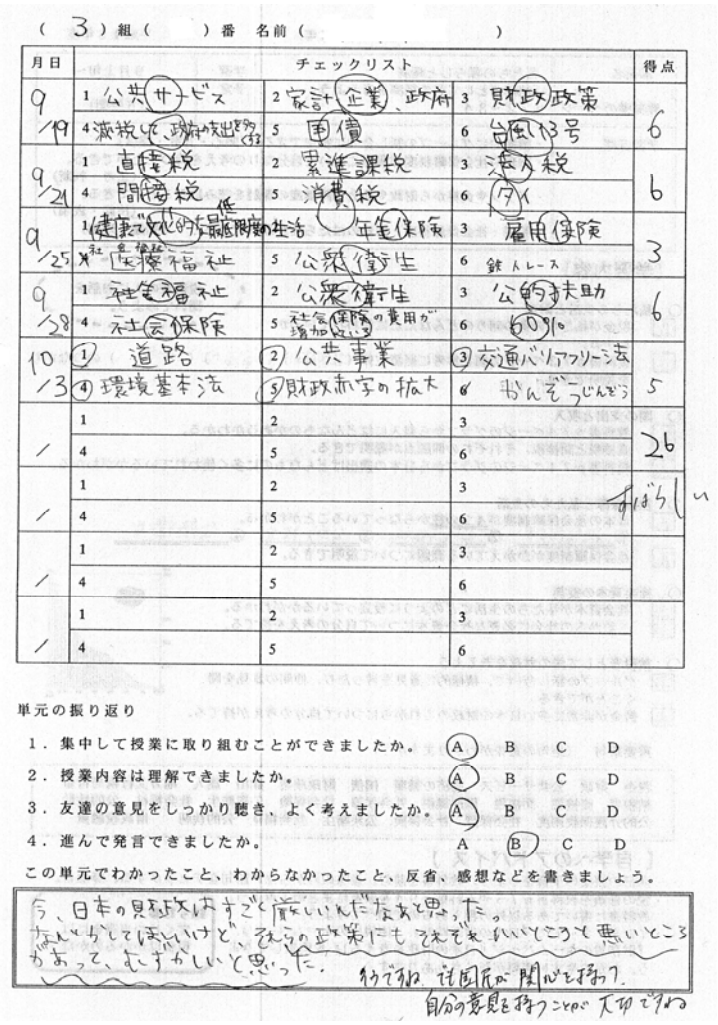
① 生徒が話し合ったり、学び合ったりしていくためには、生徒が意欲をもって取り組める課題を設定することが大切である。また、学び合いには時間が必要なので、その機会を多く作ろうとすると、授業時間の確保が問題になってくる。学び合いの時間を生み出すためには、さらに単元の授業の組み立て方を考えていく必要がある。

② 歴史分野の理解が地理分野に比べるとやや弱い結果が出ている。歴史の指導に力を入れていく必要がある。

③自分の意見を文章で書くことや表現することがまだまだ不十分である。今後も書く機会、話す機会を多く作っていく必要がある。

④ 教師側の「協同学習」に対する理解が足りないために、生徒の活動に教師が関わりすぎたり、生徒も教師に頼ってきたりする場面が多く見られる。生徒同士の学習における関わり合い、学び合いがまだまだ不十分である。授業の中で学習集団を育てなければならないと思う。

資料：単元の振り返り



（ 3 ）組（　　）番　名前（　　）

月日	チェックリスト			得点
9/19	1 公共サービス	2 家計、企業、政府	3 財政政策	6
	4 減税は、政府の支出増	5 国債	6 台風18号	
9/21	1 直接税	2 累進課税	3 法人税	6
	4 間接税	5 消費税	6 17%	
9/25	1 健康で文化的な最低限度の生活	2 年金保険	3 雇用保険	3
	4 社会福祉	5 公衆衛生	6 鉄人レース	
9/28	1 社会福祉	2 公衆衛生	3 公的扶助	6
	4 社会保険	5 社会保険の費用が増加している	6 60%	
10/3	① 道路	② 公共事業	③ 交通バリアフリー法	5
	④ 環境基本法	⑤ 財政赤字の拡大	⑥ おんぞうじんどう	
/	1	2	3	26
	4	5	6	
/	1	2	3	がんばろう
	4	5	6	
/	1	2	3	
	4	5	6	
/	1	2	3	
	4	5	6	

単元の振り返り

1．集中して授業に取り組むことができましたか。　(A)　B　C　D

2．授業内容は理解できましたか。　(A)　B　C　D

3．友達の意見をしっかり聴き、よく考えましたか。　(A)　B　C　D

4．進んで発言できましたか。　A　(B)　C　D

この単元でわかったこと、わからなかったこと、反省、感想などを書きましょう。

今、日本の財政はすごく厳しいんだなぁと思った。なんとかしてほしいけど、それらの政策にもそれぞれいいところと悪いところがあって、むずかしいと思った。
イヤですね　社会保障が関心を持つ
自分の意見を持つことが大切である

研究発表会公開授業指導案

第１学年２組　社会科学習指導案

指導者　打田　匡宏

1　単元名

武士の世のはじまり

2　単元目標

（1）御恩と奉公の関係と鎌倉幕府の成立・発展・衰退を関連させて意欲的に追究しようとしている。（興味・関心・態度）

（2）武士のおこりと、この時代における意義について、具体的な事例をもとに考えることができる。（思考・判断）

（3）モンゴル帝国の領域の地図を活用して元寇の背景をまとめることができる。（技能・表現）

（4）承久の乱の経過や御成敗式目の制定の流れを通じて、執権政治の展開による武家政治の強化の過程を理解することができる。（知識・理解）

3　指導にあたって

（1）教材観

この単元は、武士の登場から武士の台頭、武家政権の成立と執権政治や元寇など鎌倉時代における武家社会のその後の展開を扱っている。学習指導要領では、これらの社会的な事象を鎌倉幕府の成立とその細かな史実や政治機構の詳細などには深入りしないことが求められている。これまで学習してきた平安時代の摂関政治の中から武士が登場する土壌が作られ、その武士の活躍によって古代の天皇や貴族を中心とした政治体制が崩壊し、武士を中心とした中世社会に移り変わるという歴史の大きな変動期を扱った単元である。そのため、歴史の大きな流れをつかませ、時代の特色を理解させるのに適した題材と考えられる。

（2）生徒観

社会科が好きであるという生徒が、他教科と比べて少ないように感じられる。ただ、授業に取り組む姿勢は真面目であり、積極的に発言しようとする生徒も多い。2学期に入り、地理の学習から歴史の学習と学習内容が大きく変わったこともあり、新鮮な気持ちで意欲的に取り組む生徒もいる。また、歴史に関するマンガや小説などを読んでいる生徒もおり、歴史に対する興味・関心の高い生徒もいる。ただ、難しい漢字を使った歴史用語も多く、戸惑っている生徒も見られる。生徒の中には、歴史は暗記であるという意識を持っている生徒もいる。歴史の学習は歴史の流れをつかむことが大切であり、生徒が時代ごとに関連を持たせながらしっかりと理解できるよう心掛けている。また、学力的に低い生徒もおり、授業について来られない場面も少し見られるので、授業形態を2人ずつ机を合わせるなど、生徒が協力して学習に取り組めるよう工夫している。

（3）指導観

この単元に対する生徒の興味・関心を高めるために、歴史上の重要な人物については、その生き様に共感したり反発したりさせることで生徒の心を揺さぶりながら、生き生きととらえさせ

て、興味を持続させたい。また、古代から中世へと大きな変わり目であるこの単元では、武士の登場、武士の役割、武士による政権（鎌倉場府）、鎌倉文化について、指導内容を重点化し掘り下げ考えさせる場面（グループ学習）を設定していきたい。その際、写真や絵など視覚的な資料を活用しながら、生徒の興味・関心を引き出し、また、グループの話し合いが活発に行えるよう個別に支援していきたい。

4　単元（題材）の指導・評価計画（総時間 5 時間）

次	小単元名及び目標	主な学習活動	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
一	〔戦いの専門家「武士」の登場〕：平安時代中期に武士が登場したことを多面的・多角的に考えることができる。	平安時代中期に武士が登場したことをグループで考える。	自分の抱いている武士のイメージについて積極的に意見交換する。	平安時代中期の武士の登場を多面的・多角的に考えられる。		
二	〔戦いの専門家「武士」の登場〕：摂関政治から院政、平氏政権へと展開していく過程での武士の重要性を理解することができる。	源平の争乱について、地図や資料をもとに調べ、まとめる。			源平の争乱について、地図や資料をもとに調べ、まとめることができる。	摂関政治から院政、平氏政権へと展開していく過程での武士の重要性を理解できる。
三	〔武士による政治のはじまり〕：執権政治の展開による武家政治の強化の過程がわかる。	承久の乱の背景・経過・結末や執権政治の展開による武家政治の特徴をまとめる。		将軍と御家人の結びつきを、御恩と奉公の関係から考えることができる。		執権政治の展開による武家政治の強化の過程がわかる。
四	〔海をこえてせめてきた元軍〕：元寇の原因と、それが鎌倉幕府の政治に及ぼした影響を理解することができる。	モンゴル帝国の領域の地図を活用して、元寇の背景をまとめる。			モンゴル帝国の領域の地図を活用して、元寇の背景をまとめることができる。	元寇の原因とそれが鎌倉幕府の政治に及ぼした影響を理解することができる。
五	〔武士の台頭によって形成されている文化〕：鎌倉時代の文物に関心をもち、武士の文化の特徴について調べる	図や絵などの資料を活用し、武士の文化の特徴について調べる。	鎌倉時代の文物に関心をもち、武士の文化の特徴について調べようとしている。	鎌倉仏教の特徴を平安仏教の特徴と比較することにより多角的に考えることができる。		

5　本時の学習

（1）戦いの専門家「武士」の登場（本時　1／5）

(2) 本時のねらい

・自分の抱いている武士のイメージについて積極的に意見を交換する（関心・意欲・態度）。

・平安時代中期に武士が登場したことを多面的・多角的に考える（思考・判断）。

(3) 準備・資料など　ワークシート、武士・貴族の絵。

(4) 展開

過程 時間	学習活動	指導上の留意点	評価（観点、方法等）
導入 10 分	①前時の復習（確認テスト） ・貴族のイメージを確認する。 ・摂関政治と地方政治が乱れたことを確認する。	・貴族の絵を黒板に貼る。	
展開 35 分	**学習課題：平安時代中期になぜ武士が登場したのかを、貴族と武士を比較しながら考えることができる。** ②武士のイメージを自由に考え、友だちと意見を交換する。 強い／武器を持っている／馬に乗っている ③荘園が広がったことをまとめる。（板書） ・公地公民→私有地（荘園） ・平安時代中期に地方の治安が乱れた。 ④「治安が悪いとき、自分の土地を守るためにあなたならどうするか？（武士・貴族それぞれの立場に立って）」という発問をグループで考え、発表する。 ・武器を持って自衛する（武士）。 ・屋敷に柵を設ける（武士）。 ・他の武士と協力する（武士）。 ・都に居るから放っておく（貴族）。 ・武士に守ってもらう（貴族）。 ⑤具体的な事例をもとに貴族と比較しながら武士の成長をまとめる。 ・平将門の乱、奥州藤原氏　など。	・最初は自由に考えさせ、時間を見て準備した武士の絵を黒板に貼る。 ☆積極的に意見交換できるよう机間支援する。 ・グループ内の役割分担を最初に生徒に伝える。 ・どのくらいの広さの土地なのか伝える。 ☆積極的に意見交換できるよう机間支援する。	【関心・意欲・態度】自分の抱いている武士のイメージについて積極的に意見を交換することができる。(観察) 【思考・判断】平安時代中期に武士が登場したことを多面的・多角的に考えることができる。（観察）
まとめ 5 分	⑥武士と貴族を比較して、武士の特徴を理解する。	・平氏政権・鎌倉幕府の成立に繋がるよう関心を持たせる。	

☆：努力を要すると判断される状況の生徒への支援

○：ねらいを達成したと判断される状況の生徒への支援

(5) 意欲を引き出す工夫

・前時に確かな貴族のイメージを持たせることで、武士のイメージを積極的に考えさせたい。

・武士の絵を用い視覚的にとらえさせることで、武士のイメージが「全くわからない」という状況を作らないよう工夫したい。

・グループ学習で友だちと意見交換する中で、自分の考えを深めさせたい。

数学科

1　教科研究主題

意欲を持ち、深く考え解決しようとする力を育む授業をめざして

2　主題設定の理由

本校の生徒は、計算や、図形などの基本的な知識・理解など、基礎・基本については、概ね定着できているようである。基礎学力調査においても、ほぼすべての問題において、通過率が県平均を上回っていること、特に、基本事項を問う問題については、県平均を大きく上回っていることからも、基礎・基本が定着していることがうかがえる。

ただ、ある事象について、既習事項を用いて考察したり、予想したりすることは苦手としているようであり、その結果、課題を解決する力は弱い。基礎学力調査において、関数の分野や方程式の利用、図形の証明などの問題の通過率が低いことからも、課題解決力や応用力などの発展的な力が必要であるということが分かる。

そこで、数学科では、基礎・基本の定着を土台として、その上で、課題に対して、既習事項を利用し、深く考え、解決できる力を育てることを本年度の目標とした。その際、生徒の意欲化を図ることが、より課題解決につながるのではないかという仮説のもと、上記の研究主題を設定した。

3　実践の内容

(1) ねらいを明確にした授業

1) 単元見通し学習の工夫

4 月の始めに、『学びくん（1 学期版）』を発行し、各小単元の目標や、学習事項、ねらいなどを明示し、単元の始めにはその単元を見通し、単元の終わりには、チェック　　表を用いてチェックできるようにした。

9 月には、1 学期版を活用しての問題点を改良し、『学びくん（2・3 学期版）』を発行した。2・3 学期版では、学習目標のチェック項目だけではなく、具体的な問題例や、学習事項のまとめなどを掲載し、学習のねらいが具体的にイメージできるようにした。また、まとめを空欄補充の形式で掲載したことで、『学びくん』を授業で活用しやすくした。

さらに、単元の見通しをより明確にするために、単元の最初に《学びプリント》（次頁図）を配布した。《学びプリント》では、学習のねらいを実際の問題で知ることができ、単元の見通しを立てたり振り返りをしたりと、さまざまな場面で活用できるようになっている。

2) 生徒とねらいを共有する授業づくり

授業においては、必ずその時間の課題を確認してから授業を進めるようにしている。課題はねらいが明確であるものとし、課題提示の方法や、教材・教具を工夫することで、生徒の学習意欲を高め、ねらいの達成が生徒自身にも実感できるような授業を常に行っている。

《 学びプリント 》 3章 1次関数

年　組　番　名前

1 ＜関数・1次関数とは？＞
次の ア～ウ について次の問題に答えなさい。

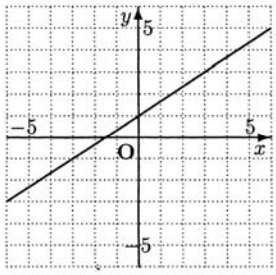
ア　y 人のクラスには男子が x 人いる。
イ　600 g の粘土を 3 人に x g ずつ分けたら残りは y g だった。
ウ　100 m を毎秒 x m のはやさで走ったら y 秒かかった。

(1) y が x の関数であるものをすべて答えなさい。
(2) y が x の 1 次関数であるものを答えなさい。またそのときの y を x の式で表しなさい。

2 ＜変化の割合とは？＞
次の問題に答えなさい。

(1) 1 次関数 $y = 2x - 3$ について x の値が -1 から 3 まで増加するときの変化の割合を求めなさい。
(2) 関数 $y = \dfrac{12}{x}$ について次の問題に答えなさい。
(i) x の値が 2 から 3 まで増加するときの変化の割合を求めなさい。
(ii) x の値が -4 から -1 まで増加するときの変化の割合を求めなさい。

3 ＜1次関数のグラフを書く＞
次の問題に答えなさい。

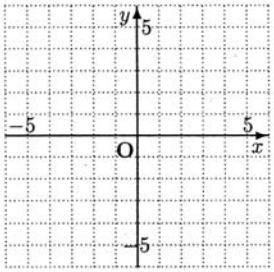


(1) 上のグラフの式を求めなさい。
(2) $y = -2x + 4$ のグラフをかきなさい。
(3) 1 次関数 $y = -2x + 4$ において x の変域が $0 \leqq x \leqq 2$ のときの y の変域を求めなさい。

4 ＜1次関数の式を求める＞
次の直線の式を求めなさい。

(1) 点 $(-2, -2)$ を通り傾きが -3 の直線。
(2) 2 点 $(0, -4)$, $(2, 6)$ を通る直線。

5 ＜方程式のグラフとは？＞
次の問題に答えなさい。

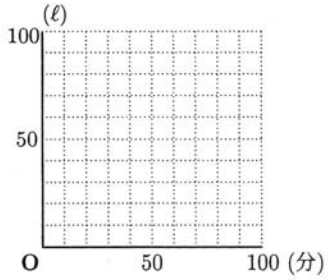


(1) 次の方程式のグラフを書きなさい。
ア　$y = x - 3$
イ　$4x + 2y = 6$
ウ　$2x + 3y = -3$

(2) 連立方程式 $\begin{cases} y = x - 3 \\ 4x + 2y = 6 \end{cases}$ を解きなさい。

(3) 前問 (1) の ア , ウ のグラフの交点の座標を求めなさい。

6 ＜グラフを利用して問題を解いてみよう＞
100ℓ の水そうがある。午前 9 時に、この水そうに毎分 $\dfrac{2}{3}$ℓ の水を入れ、水そうの中の水が 50ℓ になった時点で水を入れる速度を変えたところ、午前 10 時 40 分に水そうが一杯になった。
このとき次の問いに答えなさい。



(1) 水そうの中の水が 50ℓ になるまでの水の量と時間の関係をグラフにかきなさい。
(2) 水を入れる速度を変えたあとでは毎分 何 ℓ の水を入れていたか答えなさい。

(2) 主題にせまるための工夫

1) 少人数授業の指導形態の工夫

ここ数年、本校の数学科では、 2 クラス（C）3 教師（T）の少人数授業（単級は 1C3T）を行っている。3 コース（A、B、C）の習熟度別コースを基本としており、それぞれのコース

の内容については以下の通りである。

Ａコース（基礎）　基本の問題が確実に解けることを目標とし、復習を通して基本的な事柄をしっかり確認しながら進む。

Ｂコース（標準）　章の問題Ａに対応できる力をつけることを目標とし、演習を通して基礎基本の力を確実なものとする。

Ｃコース（発展）　章の問題Ｂに対応できる力をつけることを目標とし、基本的な内容をもとにさまざまな応用問題に取り組む。

コースの選択においては、希望調査を行い、その結果をもとに決定している。決定にあたっては、本人の希望を重視しているが、希望したコースについて、確認や助言を行うこともある。生徒に対しては、どのコースを選んでも、最終的な達成目標は同じであることや、コースによって進度は異なるが、全体の指導時数は変わらないことなどを確認し、自分に合ったコースを選択できるよう、指導を行っている。

本年度は、この３コースを基本として、それぞれの学年の実態や、学習内容に応じて各単元・小単元ごとに指導形態等を工夫した。次にそれぞれの学年における実践をまとめた。

第１学年

本校の生徒は、小学校のときにも少人数授業を経験しているが、全員が小学校での習熟の差を意識せずにスタートできるように、１章「正負の数」、２章「文字と式」は一斉授業（ＴＴ）で行った。これにより、数学が苦手な生徒も、教師の支援等を受けながら、意欲的に授業に取り組むことができた。

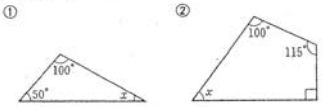
一斉授業では、一つの問題に対して、いろいろな解き方をみんなで考えるという課題に取り組んだ。そこでは、小学校で経験している集団解決の良さを生かし、

２年生数学　少人数授業希望調査

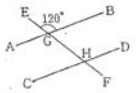
２年生のみなさん，１次関数はよく学習できましたか？
次に学習する内容は，**『平行と合同』** です。
１年の３学期に図形を勉強しましたね。例えば，紙を折ったり切ったりして線対称・点対称な図形を作り，角度や長さの関係を確かめました。２年では，角度や長さの関係からさらに図形の性質を調べていきます。
中学校数学の内容の中でも特に重要な分野です。しっかり学習して頑張っていきましょう。

そこで，各自の理解度に合わせて効果的に学習を進めていくために以下の３コースを設定します。
それぞれのコース内容を十分に検討し，自分に適したコースを各自で選択してください。
コース決定については，本人の希望を重視していきますが，必要があれば人数の調整を行います。

1　次の図で，∠x の大きさを求めなさい。



2　右の図で，２つの直線 AB，CD は平行です。直線 EF と AB，CD との交点をそれぞれ G，H とします。



① ∠EGA の大きさを求めなさい。

② ∠GHD の大きさを求めなさい。

Ａコース
１年生の平面図形がよくわかっていない。例えば，上の問題がよくわからない，図形が苦手な人はこのコースがおすすめです。復習を通して基本的なことがらを確認しながら授業を進めていきます。

Ｂコース
１年生の平面図形がだいたい理解できている。例えば，上の問題がほぼわかる人はこのコースがおすすめです。１年で学習したことを使って授業を進めていきます。授業は一般的な進度で進みます。

Ｃコース
１年生の平面図形が理解できた人たちは，ぜひこのコースで学習しましょう。標準的な内容からさまざまな問題に応用していけるように授業を進めていきます。

３コースの進め方は違いますが，みんなが目指す目標は同じです！
① 図形のいろいろな角の大きさを求めることができる。
② 平行線を利用して角の大きさを求めることができる。
③ 図形の合同の意味を理解し，三角形の合同条件から証明の進め方を理解する

少人数授業　コース希望調査

２年　　組　　番 名前

Ａ，Ｂ，Ｃのいずれか希望するコースを（　）内に記入してください。

（　　）　コースを希望

選択理由（具体的に書いて下さい）

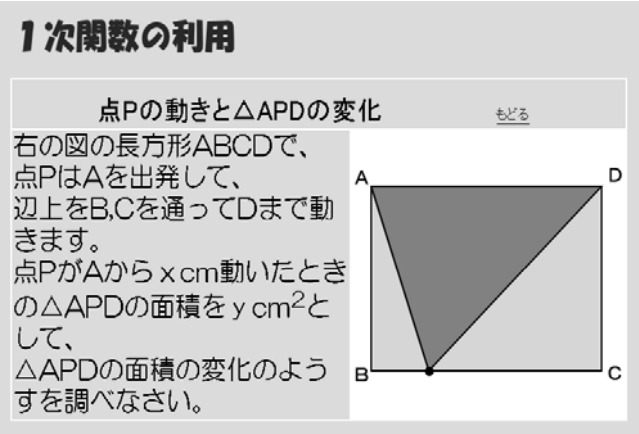
多様な考えから性質を導くなど、中学校での学習につなげることができた。また、毎時間の授業では、意欲を高めるために、教材や教具を工夫した。特に導入においては、マッチ棒や天秤など、実物や提示用資料などを作成し、生徒の興味・関心が高められるようにした。

3 章「方程式」からは、2 クラスを等質の 3 集団に分け、少人数授業を行い、その後、3 コースの習熟度別の少人数授業を行い、これまでに生じた習熟の差に対応できるようにした。

第 2 学年

この学年は、1 年次はＴＴでの一斉授業を行ってきた。少人数授業を行うのは中学校では初めてなので、年度当初は 2Ｃ3Ｔではあるが、開設するコースは 2 コース（基礎・発展）のみとし、希望の多かった基礎コースを 2 集団に分けた。次に、それぞれのコースの取り組みをまとめた。

発展コース　連立方程式の利用」では、文章問題づくりを行った。道のり・速さ・時間のうちどれか 1 つを求める文章問題を作った。作った問題をすべて黒板に掲示し、他の人が作った問題を解いて互いに感想を出し合ったりした。「１次関数の利用」では、動点の問題において、実際にパソコンの画面をプロジェクターで投影し、図形上を点が動き、三角形が変化していく様子を提示した。実際に動く様子を見ることで、問題のイメージをつかみやすかったようだ。



基礎コース　「1 次関数をもとめること」では、グループ活動を取り入れた。そのとき、誰が指名されても説明ができるようにする、という指示を与えたところ、誰が指名されても説明できるように、互いに教え合う姿が多くみられた。得意な人は分かりやすく教えることで、苦手な人はグループ内で教えてもらうことで、互いに理解が深まったようである。

第 3 学年

この学年は、1 年次より 2Ｃ3Ｔの習熟度別少人数授業を行っている。2 年次には、一部の単元で等質集団での少人数授業を行った。そこで、3 年次の当初はこれまでの希望の傾向も踏まえて、2Ｃ3Ｔではあるが、開設するコースは２コース（基礎・発展）のみとし、希望の多かった発展コースを 2 集団に分けた。

次に、それぞれのコースの取り組みをまとめた。

発展コース　既習事項の復習を授業の始めに行った。「思い出す」コーナーと名付け、1、2 年次の復習や、前時の振り返りを行った。ほぼ毎時間続けることで、「思い出す」といえば、復習をするんだなと分かるまでに定着した。また「2 次方程式」では、授業の始めに 5 分間の計算の小テストを行い、基礎の定着を図った。

基礎コース　授業の始めには、必ず復習の時間を設け、前時に学習した内容や、既習事項をしっかり確認してから、授業に入るようにしている。例えば、「多項式」では、授業の始めに展開・因数分解の 5 問プリントを行い、基礎の定着を図った。

2）家庭学習の指導の工夫

基本的には授業ごとに宿題を出すように心がけている。また、できるだけ授業の中で、授業内容に対応するワークや『学びくん』の範囲を示すようにした。『学びくん』には単元ごと

に「自学へのアドバイス」というコーナーを設けた。特に数学科では、「基礎の力をつけるには」と「チャレンジしてみよう」の２項目に分け、補充的学習、発展的学習の両方に対応できるようにした。

３年生では、日頃から「１日１問」という取り組みを行っている。毎日、問題プリントを作成して廊下に設けた「１日１問」コーナーに置いておき、希望者は各自問題プリントを持っていって解き、先生に採点してもらうというものである。問題は１、２年次の復習やそのとき授業で学習している内容を、いろいろなレベルで数種類用意した。これを続けるうちに、「１日１問」に取り組む人が少しずつ増え、基礎力の定着や、意欲化につながった。

3）基礎学力調査の結果を生かして

全体的には基本事項はできているが、数量関係領域が苦手であるようである。その対策として、ウォームアップ週間に、確率の補充学習を行った。今後も関数の単元で復を取り入れたり、1、2月に重点的に補充学習する機会を作る予定である。

（3）評価の工夫

各単元の終わりには、『学びくん』のチェック項目を利用して、自己評価を行っている。また、章の始めに配布した「学びプリント」を、生徒の章末の自己チェックや、単元テストとして活用している。これにより、どこが理解できていて、どこが不十分なのかを生徒自身が確認し、自学や家庭学習に生かせるようにしている。

定期テスト（中間・期末）後には、テスト直しと同時に「振り返りシート」を書かせ、学習の振り返りをしている。テスト勉強を振り返る場面では、テスト勉強の取り組みの中で良かったことや、反省点を書き、今後の学習に活かしている。また、自己評価をする場面では、学習内容と授業態度の２つの面について、「できた　◎」「だいたいできた　○」「あまりできなかった　△」

1年　2学期中間テスト　振り返りシート

1．得点を振り返ろう
（得点が合っているか確かめながら書こう）

見方・考え方	表現・処理	知識・理解	合計
			／100

2．テスト勉強を振り返ろう

☆テスト勉強を振り返って、良かったと思うこと、頑張ったことは？

いろんな問題を解いておいたのはよかった。とくに、1次式の計算や、テストの[1]～[3]のところは、よくスラスラめにできるようになった。

☆反省すべき点、もっとこうすれば良かったと思うことは？

問題はたくさん解いたけど、テストの[1]～[3]のところをくり返し、時間をかけて練習すればよかった。今回の失敗は、見直しの時間がなくて、あせってしまった。

☆これからの数学の学習（授業・家庭学習）をどのように取り組みたいですか？

今の失敗をバネにして、へんなボケミスをなくすようにしたい。応用問題でも、しっかりとかれるようにしたい。とにかく、スラスラ正確にしたい。

1年　　組　　勝　名前

3．自己評価をしよう

学習内容について　…「学びくん」でも確認しよう

いろいろな数量を文字を使った式で表すことができる	◎	○	△	×
文字式のきまりが分かる	◎	○	△	×
式の値を求めることができる	◎	○	△	×
文字式の計算ができる	◎	○	△	×
図形についての公式を、文字を使った式で表すことができる	◎	○	△	×
πを用いて、円の周の長さや面積を求めることができる	◎	○	△	×

授業について

授業中はまじめに取り組むことができましたか？	◎	○	△	×
発表や発言を積極的にしましたか？	◎	○	△	×
授業に必要なものは毎回忘れずに持ってきましたか？	◎	○	△	×
宿題や提出物は忘れずにしっかりと取り組めましたか？	◎	○	△	×

「できなかった　×」の４段階で自己評価している。自己評価の結果を評価にも活かし、今後の授業においての指導改善にもつなげている。

少人数授業では、机間支援をこまめに行い、丸つけや声かけを積極的に行った。少人数の良さを生かし、できるだけすべての生徒とやりとりをすることで、生徒の意欲化を図った。

4　成果

少人数授業やＴＴによる指導形態の工夫により、基礎力や表現力が増加した。また、生徒は自分の習熟度に合った授業に参加できるために、少しずつではあるが学習意欲が高まり、教え合いの場面が見られるようになった。教師は、単元ごとにいろいろなコースを担当し、指導にあたったため、生徒をより多面的に把握することができた。

5　今後の課題

単元ごとの時数調整やクラスごとに丁寧な指導を行ったため、進度に遅れが生じた。また、学習形態を単元・小単元や学年の実態に応じて工夫してきたが、それぞれの単元でどのような学習形態が適切であるかをこれまでの成果をもとに検討していく必要がある。習熟度別少人数授業では、同じコースでも、クラスによって集団に差があった。コース編成の工夫や、それぞれの集団に応じた指導をしていくことが必要である。

研究発表会公開授業指導案

第２学年３組　数学科指導案

指導者　宇野　孝博　・　北井　修平　・　西　　美香

【A コース 10 名】　【B コース 14 名】　【C コース 12 名】

1　単元名

平行と合同

2　単元の目標

(1) 数学への関心・意欲・態度

・図形の性質を、ある事柄を根拠に説明しようとする。

・観察、操作や実験を通して平行線や角の性質を見いだし、それを確かめようとする。

・多角形の内角の和や外角の和に関心をもち、それを三角形の内角の性質をもとにして調べようとする。

・筋道を立てて考えることに関心を持ち、証明しようとする。

・三角形のどの辺や角に着目すると２つの三角形が合同になるかを考えようとする。

(2) 数学的な見方や考え方

・図形の性質を予想したり、考察したりすることができる。

・三角形の内角の和が 180°であることを証明することができる。

・2 つの三角形が合同になる条件を調べ、合同条件を見いだすことができる。

・根拠となる事柄を明らかにしながら、図形の性質を証明することができる。

(3) 数学への表現・処理

・多角形の角や平行線と角の性質を利用して、角の大きさを求めることができる。
・2 つの図形が合同であることを記号を使って表すことができる。
・仮定、結論を区別し、それを式などで表すことができる。

(4) 数量、図形などについての知識・理解

・平行線の性質や多角形の角の性質を理解する。
・多角形の角や平行線と角に関する用語の意味を理解する。
・証明することや、仮定、結論の意味を理解する。
・三角形の合同条件や、基本的な図形の性質を理解する。

3 指導にあたって

(1) 教材観

「三角形の内角の和が 180°である」ということをはじめ、この単元で扱う図形の知識には小学校で既習のものもある。それらを踏まえた上で、この単元では、既知の知識をもとに、図形の性質を証明したり、補助線を引いて、未知の部分の角の大きさを求めたりするなどの新しい思考を身につけていくこととなる。例えば、「三角形の内角の和」をもとにして「多角形の内角の和」を導き、これをもとにして「多角形の外角の和」を導く場面では、物事を筋道立てて考える態度を養い、少しずつ図形の学習体系を作ることに意識を向けることが重要である。

この単元の学習を通じて、物事を推論する力を身につけ、物事を論理的に考える力を養いたい。

(2) 生徒観

全体学習や生活に関する調査の結果によると、2 年生は「数学の勉強が好きだ」と答えた生徒が約 70%、「数学の授業がよく分かる」と答えた生徒が約 80%いた。また、7 月に行った授業アンケートでは、2 年 3 組は「授業に楽しく取り組めた」生徒が約 65%、「自ら進んで学習に取り組む場面があった」生徒が約 77%いた。全体的に数学が好きで、意欲的に授業に取り組んでいる生徒が多いようである。その反面「先生にアドバイスしてもらえる場面がなかった」と感じている生徒が約 35%もおり、教師の支援が必要な生徒もいるようである。また、全体的な傾向として、説明することや、物事を論理的に考えることは苦手としているようである。

そこで、物事を筋道立てて考えることの必要性を意識させ、図形の論証に積極的に取り組む姿勢を育てていきたい。

Aコース（基礎）：男子 5 人、女子 5 人の 10 名で、既習事項が定着しておらず教師の支援が必要な生徒が多いが、中には課題に対して意欲的に取り組む生徒もいる。生徒の理解度を常に確認しながらそれぞれの生徒に合った支援を行い、基礎基本の定着を図りたい。

Bコース（標準）：男子 9 人、女子 5 人の 14 名のコースで、活発に意見を言うなど意欲的な生徒もいるが、数学に対する関心は決して高くない。基本問題を確実にすることで、苦手意識を払拭し、「できた」という成就感を持たせることで意欲化を図りたい。

Ｃコース（発展）：男子５人、女子７人の 12 名のコースで、全体的におとなしく、発言の少ないコースであるが、課題に対して意欲的な所もある。自ら問題を作ってみたりという創造的な部分もみられる。また計算処理能力は高い。いろいろな課題や問題にとりくむ中で、発言の機会を作るとともに、数学の有用性を感得できるよう努めたい。

（3）指導観

全学年、2C3T（単級は 1C3T）の形態で少人数授業を行っている。コースについては 3 コース（A、B、C）の習熟度コースを基本としており、生徒の希望により自分に合ったコースを選択させるようにしている。各コースの内容・目標については次の通りである。

Ａコース（基礎）　基本の問題が確実に解けることを目標とし、復習を通して基本的な事柄をしっかり確認しながら進む。

Ｂコース（標準）　章の問題Ａに対応できる力をつけることを目標とし、演習を通して、基礎基本の力を確実なものとする。

Ｃコース（発展）　章の問題Ｂに対応できる力をつけることを目標とし、基本的な内容をもとにさまざまな応用問題に取り組む。

Ａコースでは、既習事項や前時の復習を授業で取りあげることで、基礎基本の定着を図るとともに、教材・教具を工夫することで、生徒の課題に対する興味・関心を高め、意欲的に学習に取り組めるようにしたい。

Ｂコースでは、基本的な問題を中心に取り組み、数学的な表現・処理能力を育むとともに、生徒が「分かった」「できた」という達成感を味わえるようにしたい。

Ｃコースでは、コンピュータを用いた学習や、発展的な課題も取り入れながら、数学に対する関心・意欲を高めるとともに、いろいろな課題を通して、論理的に考える力を育てていきたい。

4　単元の指導・評価計画（総時間 16 時間）

次	小単元名及び目標	主な学習活動	関心・意欲・態度	見方・考え方	表現・処理	知識・理解
一 7 時間	〔多角形の内角と外角〕（3 時間） 多角形の内角の和や外角の和の性質を理解し、それを利用して、角の大きさを求めることができる	・多角形の内角の和の求め方を調べる。	・多角形の内角の和を求める方法を考えようとする。	・多角形の内角の和の性質を、三角形の内角の和が 180°であることをもとにして見いだすことができる。	・多角形の内角の和や外角の和の性質を利用して図形のいろいろな角の大きさを求めたりその方法を説明したりできる。	・多角形の表し方や内角・外角の意味を理解する。
	〔平行線と角〕（4 時間） 平行線の性質を理解し、それを利用して、図形の性質を調べた	・対頂角や平行線と角の意味と性質を知る。	・対頂角や平行線と角の関係について観察・操作・実験で調べ			・対頂角・同位角・錯角の意味と性質を理解する。

	り、角の大きさを求めるこ とができる。		ようとする。			
		・三角形の内角の和が 180°であることを証明する。（A、C） ・外角と内角の関係を利用していろいろな角度を求める。（B）		・平行線の性質を用いて、三角形の内角の和についての証明を考えることができる。（C）	・外角と内角の関係を利用して角度を求めることができる。（B）	・三角形の内角の和が 180°だという証明を理解する。（A） ・三角形の外角と内角の大きさの関係を理解する。（B）
		・角についての性質を利用していろいろな角の大きさを求める。			・角についての性質を利用していろいろな角の大きさを求めることができる。	
二 9 時間	〔合同な図形〕(1 時間) 合同な図形の意味や性質を理解する。	・２つの図形が合同であることの意味を知る	・合同な図形に関心をもち、図形の性質を考察しようとする。	・合同な図形について、その性質を見いだすことができる。	・2 つの図形が合同であることを記号を使って表わせる。	・合同な図形の性質を理解している。
	〔三角形の合同条件〕(4 時間) 三角形の合同条件を見いだし、簡単な場合にそれを用いることができる。	・三角形の合同条件を理解する。	・三角形が１通りに決まる場合を調べ、それをもとに三角形の合同条件を考察しようとする。	・２つの三角形が合同になる条件を調べ、合同条件を見いだすことができる。	・三角形の合同条件を使って合同な三角形を見いだしたり、それを記号を使って表わせる。	・三角形の合同条件を理解している。
	〔証明のすすめ方〕(4 時間) 仮定から結論を導く証明のすすめ方について理解する。	・仮定と結論の意味を知る。 ・証明の進め方について知る。	・筋道を立てて考えることに関心を持ち、証明しようとする。	・根拠となる事柄を明らかにして図形の性質を証明することができる。	・仮定と結論を区別し、それを式などで表すことができる。	・仮定、結論の意味の理解。 ・証明の進め方の理解。

5　本時の学習

Ａコース（基礎）（10 名）

（1）小単元名　平行線と角　（本時　6／7）

（2）本時のねらい

三角形の内角の和が 180°であることの証明を理解する。

（3）準備・資料など

ワークシート、黒板提示用資料。

(4) 展開

過程 時間	学習活動	指導上の留意点	評価（観点、方法等）
導入 10 分	①前時までに学習した角の性質について復習する。 ②三角形の内角が 180°であることを確認する。	・重要事項はフラッシュカードで黒板に掲示しておく。 ・小学校で習った方法（角の大きさを測る、角を並べかえる）を確認させる。	
展開 30 分	**学習課題：三角形の内角の和が 180°であるということを説明してみよう。** ③ワークシートを利用して考える。 ④小グループを作り確認する。 ⑤全体に発表する。	・等しい大きさの角には同じ印をつけることや、なぜ等しいのか理由を考えるよう注意する。 ☆同位角や錯角の関係を探すよう促す。 ○グループ内の他の生徒に教えてあげるよう促す。 ・図を用いて、全員に分かるよう説明するよう促す。	【知識・理解】 三角形の内角の和が 180°であることの証明を理解する。［観察、ワークシート］
まとめ 10 分	⑥説明したことを、言葉や式を用いて表現する。	・教師主導で行い、言葉や式での表現が理解できることに留意する。	

☆：努力を要すると判断される状況の生徒への支援

○：ねらいを達成したと判断される状況の生徒への支援

(5) 意欲を引き出す工夫

・既習の基本事項の確認と復習を授業の前半に行うことで、「分かった」「できた」という充実感を持たせる。

・グループ活動を取り入れ、教え合いの場面を取り入れることで、理解を深めるきっかけとした。

Ｂコース(標準)（14 名）

(1) 小単元名 平行線と角 （本時 6／7）

(2) 本時のねらい

・三角形の外角と内角の大きさの関係を理解する。

・外角と内角の関係を利用して角度を求めることができる。

(3) 準備・資料など

ワークシート 1（5 種類）、ワークシート 2 、黒板掲示用資料。

(4) 展開

過程 時間	学習活動	指導上の留意点	評価(観点、方法)

導入 15 分	①既習事項の確認。 ② 三角形の内角の和を利用して外角を求める。（ワークシート 1） ③ 三角形の外角と内角の関係を考える。	・外角、三角形の内角の和、補助線について確認。 ・各グループに 5 種類のワークシートを分け、分担を決めさせる。 ・ワークシート 1 の解答と合わせて段階的に発問を行う。	
展開 30 分	④外角と隣り合わない 2 つの内角の和が等しいことの証明を理解する。 ⑤ 外角と内角の関係をまとめる。 **学習課題：外角と内角の関係を利用していろいろな角度を求めてみよう。** ⑥内角と外角の関係を利用して角度を求める問題を解く。（ワークシート２）	・黒板掲示用資料を用いて誘導を行い、黒板で証明を行う。 ・実験、推測による結果が事実であるということをしっかりと押さえる。 〇解けた問題についてグループ内で解説を行うよう促す。 ☆解けなかった問題は解けた生徒の解説を聞いて考えるよう促す。	【知識・理解】 三角形の外角と内角の大きさの関係を理解する。〔観察〕 【表現・処理】外角と内角の関係を利用して角度を求められる。〔観察、ワークシート〕
まとめ 5 分	⑦結論を確認する。	・外角と内角の関係をもう 1 度しっかりと押さえておく。	

☆：努力を要すると判断される状況の生徒への支援。

〇：ねらいを達成した判断される状況の生徒への支援。

(5) 意欲を引き出す工夫

・ワークシート 1 を 5 種類用意することで生徒全員に自ら課題を選択させる。

・基本的な問題を確実にすることで「できた」という成就感を持たせる。

・ 問題演習をグループ形態で行うことで教え合いの場面を作る。

・

Ｃコース（発展）（12 名）

(1) 小単元名　平行線と角　（本時　6／7）

(2) 本時のねらい

平行線の性質を用いて、三角形の内角の和についての証明を考えることができる。

(3) 準備・資料など

ワークシート、黒板掲示用資料。

(4) 展開

過程 時間	学習活動	指導上の留意点	評価（観点、方法）
導入	①前時の「三角形の内角の和が	☆黒板掲示用資料を用いて、補助線の引き方や平	

10 分	180°である」ことが証明できるか振り返る。	行線の同位角、錯角についての既習事項を確認する。	
展開 35 分	**学習課題：三角形の内角の和が180°であることの証明をいろいろな方法でしてみよう。** ②他の証明方法がないかを個人で考える。 ③グループで確認する。 ④全体に発表する。	・補助線の引き方に着目して考えるようヒントを出す。その一例として、頂点を通る補助線をひいて説明できるか考えさせる。 ・別の方法がないか、時間をとってじっくり考えさせる。 ☆　いろいろな位置に補助線を引いてみるようアドバイスする。 ☆補助線は１本である必要はないことに気づかせる。 ○ グループの全員がわかるように説明するよう促す。	【見方・考え方】 平行線の性質を用いて、三角形の内角の和についての証明を考えることができる。［観察、ﾜｰｸｼｰﾄ］
まとめ 5 分	⑤本時のまとめをする。	・補助線の有用性や１つの課題について、さまざまな考え方で解決できることの意義を確認、宿題としてｐ92 問 5 を与える。	

☆：努力を要すると判断される状況の生徒への支援

○：ねらいを達成したと判断される状況の生徒への支援

(5) 意欲を引き出す工夫

・前時で三角形の内角、外角の性質を知り、いろいろな角度をスムーズに求められるように問題演習をしておくことで、自信を持って既習事項から証明に臨めるようにした。

・グループ学習を通して、お互いの考えを交流する時間をとり、考え方のヒントとした。

理　科

1 研究主題　予想や仮説を立て、実験・観察を行うことによって、学ぶ意欲を高める授業づくり

2 主題設定の理由

理科では、学習内容に対する知識・理解を深めると同時に、科学的に物事を考える力を身につけることが重要な要素である。科学的な物事の考え方とは、どういうことをさすのだろうか。我々は、科学的な思考力を「実験を行う際、自ら予想を立て、見通しを持って実験を進める力」「実験結果から規則性や自分なりの発見を見いだす力」であると考えた。残念ながら、昨年度２月に行われた学力調査を分析すると、本校生徒は「予想や仮説を立てること」が苦手である、「結果から規則性を見つけること」が苦手である、という面が見えてきた。これは、授業において、自ら予想や仮説を立てる習慣や、結果から自らの考えを持ち引き出す習慣ができていなかったためであると考えられる。

そこで今年度は、「自ら考え、予想や仮説を立て、見通しを持って実験観察に取り組むことができる生徒」「結果をもとに科学的な考え方や表現ができる生徒」「考えを共有したり班やクラスで協力し、お互いを高め合うことができる生徒」の育成をめざして授業改善を進めようと考えた。授業改善の取り組みを積極的に進めることで、「科学に興味を持ち、意欲的に実験や観察に取り組むことができる生徒」の育成へとつながることを期待し、このように主題を設定した。

3 実践の内容

(1) ねらいを明確にした授業

生徒が予想や仮説をたてるにあたり、その目的意識を高めることが大切であると考える。そのためにも、学習課題を解決するための観察・実験であることを生徒一人ひとりが意識する必要がある。そこで、単元の流れの中から本時の目標をとらえ、課題意識を高めるために、単元の最初に『学びくん』を利用し、そこでの学習内容と目的を意識させる時間を設けた。また、各授業の始めには、本時のテーマを提示し、課題を明確にした。そして、学習課題に対する自分自身の予想や仮説を立てることにより実験の見通しを持たせ、それをノートやプリントに表記させることで生徒自らの思考の表現ができるよう試みた。

(2) 主題にせまるための工夫

1) 実験において、予想・仮説を立てる

県や市の学力調査の結果から、本校生徒は、実験時の予想や仮説を立てることが苦手であることが明らかになった。これは、生徒側に課題というより教師側の授業の組み立て方に課題があると思われる。実験時において「予想や仮説を立てる」という科学の手法としてはあたりまえのことを、おろそかにしていたことが原因であると考えられる。そこで、実験において、論理的にとらえていくための予想や仮説を立てる部分に重点を置いた授業プランを考えることにした。予想や仮説の立て方は、次のような方法で実施した。

① 実験の目的や内容を確認した上で、自分の力で予想や仮説を立てさせる。
② 班内で予想や仮説について検証していくことを目的に話し合う。
③ 学級全体の場で個人の考えを発表させる。

特に意識したのは、「既習や生活経験等を生かして自分の考えを持つこと」「予想や仮説を自分の言葉でノートやプリントに記入する」ということである。一人ひとりが予想や仮説をしっかり立てることで、実験の目的がより明確化される。また、見通しを持って実験に臨むことができるので、準備や操作もスムーズに行えるようになる。

さらに、生徒自らの予想や仮説を検証する観察・実験の結果を楽しみに待つことができるので、探究心を育て授業に対する知的な意欲を高めることができる。

自分なりの予想や仮説を立てた後、班や学級全体の場で話し合うことで、課題の共有化を図ることができ、考えの広がりや深まりが期待できる。そして、一人ひとりの考え方を大切にすることが、学級全体の実験に対する意欲的な雰囲気づくりにもつながると考えられる。

1）実験レポートの充実

現 3 年生は、1 年生の頃から実験レポートづくりに取り組んでいる。現 1、2 年生も、今年度から取り組んでいる。科学的思考力の向上、自分の考えを論理的にまとめるための表現力の向上をねらって取り組んでいる。

レポート作成においては、先に述べたとおり、自分の力で予想や仮説を立てることができるよう工夫した。また、実験結果をまとめる際には、結果からわかることを自分の言葉で表現させるための工夫をした。とかく生徒は、ノートやレポートに間違ったことを書くことを嫌う傾向にある。教科書に載っているような模範的な答えを書きたがる。これでは、知識理解は高まるかもしれないが、科学的な思考力や表現力は高まらない。自分の頭で考えたことを自分の言葉で表現し、自らの考えを再構成･再構築していくことの大切さを特に強調した。

また、考えをまとめる際には、班内での意見交換を大切にした。いろいろな考え方に触れることで、自分の思考力が高まることが期待できる。また、理科が苦手な生徒にとっては、友だちの思考や表現方法を参考にすることができる。また、協力してレポートを完成させることで、達成感を味わうこともできる。班内での話し合いについては、以下の項で述べる。

3）班や学級での課題や考えの共有

理科の授業では、日常的に班単位で実験や観察を行っている。予想や結果をまとめる段階で、班内や学級全体での意見交換をよく行う。しかし、科学的思考が苦手な生徒にとっては、自分の考えを持たず、他人の考えを聞くだけということが多く見られる。理科が得意な生徒だけで話し合いが進められてしまう。このままでは、学級全体の授業に対する意欲化や学力の向上につながらないと考え、班内での意見交換において、以下に示すようなルールにしたがい、話し合いを進めることとした。

まず最初に、自分の意見を持つことで初めて他人の意見にも興味がわいてくると考え、「予想

や仮説を立てる段階」「結果からわかることを考察する段階」において、とにかく自分の考えを持つことを強調した。自分の考えを持った上で班内での意見交換を行わせた。

また、意見交換の際には、科学的な思考や表現でどこが良いかを指摘しながら、お互いを誉めるよう指導した。自分の考えも大切であると同時に、他の人の考えも尊重し、互いの考えを検証したり、補ったりするという点を強調することで、お互いを認め合えるように意識した。一人ひとりが尊重され認められる雰囲気があれば、学級全体の学習の意欲化につながると考えられる。

4）理科デジタルコンテンツの利用

意欲を高めるたり科学的思考力を高めるために、授業の内容に応じてＪＳＴの「理科ねっとわーく」を積極的に利用した。動画や 3D映像を見ることで、授業の流れに変化をつけることができ、実感を伴った理解が可能となり、学習意欲を継続することができる。また、豊富な図やグラフを利用し、解釈していく学習の経験を通して、科学的な思考力を高めるための手段としても使うことができる。

(3)評価の工夫

毎時間の課題に対する理解の評価においては、授業の最後に本時の課題を復唱し、課題に対する答えを生徒自身の言葉で発表するという方法をとっている。キーワードの確認や説明を生徒自身が行うことで、授業の振り返りや理解できていないポイントを明確にできると考えた。その後、本時の課題に対する理解度を挙手で自己評価し、客観的に授業を振り返る機会を設けている。また、『学びくん』は、単元の要点を生徒が記入し、復習やまとめに利用できるようにしている。特に、キーワードや要点の文章表現は定期テストなどにも活用し、表現力や基礎基本の定着につなげている。

また、レポートにおいては、「自分の考え」を記入してある部分で評価キーワード等を設定し積極的に評価している。自分の考えを自分の言葉で表現することの大切さが伝わるような評価を心がけている。

4 成果

（1）ねらいの明確化について

各単元の最初にその単元で学習する内容のポイントを『学びくん』を使って説明し、毎時の最初にはその日の学習内容を明確にすることで、授業の目的は 8 割以上の生徒が理解を示している。また、目的をはっきりさせることで押さえるポイントが明確になり、内容を理解しやすくなっていると考えられる。また、教師と生徒との学習に対する目的の共有化により、より質の高い学習の達成が可能となってきた。

（2）予想や仮説を立てることについて

今年度の基礎学力調査によれば、科学的思考の観点に関わるすべての問題において、本校生徒の通過率が県全体の通過率を上回っている。実験を始める前段階の予想や仮説に時

間をかけることで、科学的思考力や科学現象を論理的に理解する能力が高まったためであると考えられる。

また、現 3 年生の 2 年生時の授業アンケートでは、授業に楽しく取り組めている生徒が 86.8%であったが、今年度の調査では 93.8%へと上昇している。現 2 年生においても、同じ内容のアンケートにおいて、昨年度の 46.3%から 74.3%へと大幅に上昇している。自分の予想や仮説をもって授業や実験に臨むことで、学習内容への関心が高まり、興味を持って楽しく授業に取り組むことができるようになったと考えられる。

(3) レポートづくりや課題・考えの共有について

レポートづくりを継続することで、自分の考えを文章で表現する力が高まった。その際個人思考を大切にすることで、学習課題を自分自身の課題とすることができた。また、課題を学級全体として共有することができた。班や学級の意見交換において、お互いの意見を尊重し合う雰囲気を大切にすることが、学級全体の学習に対する意欲化につながった。

以上のような取り組みを継続することで、先に説明したように、楽しく授業に取り組む生徒の割合が上昇した。その結果、基礎学力調査において、県全体の通過率が 2005 年度の 63.0%から 2006 年度の 60.0%へと減少しているのに対し、本校では、66.5%から 70.8%に上昇した。

5 今後の課題

(1) ねらいの明確化と学力の定着について

1 年生では、学習内容の把握や目的の理解に対して、内容の理解と学力の定着を実感している生徒が少ない。自分で要点を記入して『学びくん』を完成させ、授業の復習や単元のまとめなどに活用することで、知識の定着や「わかった」という実感につなげていきたい。

2、3 年生における授業アンケートによれば、各時間の授業のねらいを理解している生徒が、3 年生で 71.1%、2 年生で 63.3%と、楽しく授業に取り組めている生徒の割合に比べると決して高い数字とはいえない。『学びくん』を今以上に利用し、授業のねらいを明確化することで、さらなる学力向上につなげていきたい。

(2) 授業の進め方や学習意欲について

予想をたて実験することで意欲化を図り、さらには班での意見交換を工夫し、授業への参加率を上げるよう努力しているが、残念ながら未だに個人差があり、思考・発言の活発な生徒とそうでない生徒との差を感じる。思考や発言が苦手な生徒が充実して授業に取り組めるように、討議の工夫やアドバイスの方法をさらに考慮していきたい。

研究発表会公開授業指導案

第２学年２組　理科学習指導案

指導者　　亀田憲一郎

１　単元名

大気中の水

２　単元目標

（1）関心・意欲・態度

身の回りの諸現象の中から、空気中の水蒸気の存在を確かめようとする。

（2）科学的思考

大気中の水蒸気がどのようにして霧や雲等へと変化するのかを考えたり、既習である飽和水蒸気量、露点をもとに実際の空気中の湿度を調べる方法を考えたりすることができる。

（3）技能・表現

水の状態変化や露点の測定の実験を、正しく行うことができる。

（4）知識・理解

霧や雲のでき方を気温や湿度の変化と関連づけて理解することができる。

３　指導にあたって

（1）教材観

天気の変化は、毎日の生活に直接結びついてる現象であり、天気予報を見て関心を持っている生徒も多い。しかし、気象の学習となると、気象要素などのデータ量の多さや用語の理解の難しさなどもあって、興味が薄れることが多い。最近の天気予報では、単に天気の予報だけでなく、天気図や気象衛星の画像、アメダスの観測資料など多くの情報を示しながら予報の根拠などの解説もなされるようになってきている。したがって、気象の知識が日常生活における常識として要求されてきているといえる。そこで、この単元では、天気の変化に関する基礎的な内容を十分に理解させるとともに、気象の変化に興味を示して積極的に天気予報などの情報を利用しようとする態度を養うことを目的としている。

小学校５年生での「天気の変化」では、「天気は西から東へと変化する」「天気によって１日の気温の変化の仕方に違いがある」などの学習内容を考慮しながら、本単元では、空気中の水蒸気の存在について、飽和水蒸気量や露点等の要因と結びつけ、正しい気象の知識を身につけ、いろいろな気象災害にも正しく対応できるような資質・能力を養うことも可能な内容となっている。

（2）生徒観

昨年度の5月の学習意識調査によれば、現在の2年生においては「理科の授業に楽しく取り組めている」生徒の割合が 53.8%であった。昨年度から指導と評価の一体化をめざ　　した授業改善を続け、生徒が意欲的に取り組める授業展開を心がけた結果、同調査の割合が 69.5%に上昇した。この結果から、多くの生徒が興味を持って楽しく授業に取り組んでいる様子がうかがえる。ただし「授業がよくわかる」と答えた生徒の割合は、昨年も今年も70%程度で変化していない。この要因として、実験・観察における考察する科学的思考力の不足が考えられる。そのため、内容の理解が高まらないのではないかと思われる。

また、2年2組は活発に発言する生徒も多いが、自ら課題を解決することに消極的な生徒もいる。これには、学習課題が達成したという実感が持てていないことが考えられる。

(3) 指導観

科学的な思考力を高める手だてとして、既習事項を生かして論理立てて課題を解決することがあげられる。本単元では、既習である「露点」や「飽和水蒸気量」の知識を生かし、「湿度」「霧や雲のでき方」を論理的に考察し、理解できるかがポイントとなる。一つひとつの内容の理解を着実に行うことや、ワークシートを工夫することで、既知の学習内容から新しい学習課題の解決が図れるよう取り組んでいきたい。また、実感を伴った理解へと導くために、課題に対する意見交換を活発にしたりレポート作成に力を入れていきたいと考えている。

さらに、学級全体の学習意欲が高まるようグループによる学習を積極的に取り入れたい。グループ内で意見交流することで、自分の考えにはない新しい発見や驚きが見つけられることを期待できる。そして、グループ間での思考内容を比較することで学習内容に対する意欲が高まればと考えている。このように、協同的な作業を取り入れ、生徒全員が実感を伴った理解と達成感のある充実した授業になるよう工夫していきたい。

実際には、目に見えない水蒸気を扱う単元であるので、理科デジタルコンテンツを使い、視覚に訴える工夫を積極的に行うとともに、水蒸気を取り扱う実験を行い、それをモデル化してわかりやすく説明し、生徒の理解が深まるよう場の設定をしていきたい。

4　指導計画と評価計画（総時数 5時間）

次	小単元名及び目標	主な学習活動	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
一	地表をめぐる水：地球上の水が状態を変えながら循環していることを認識する。	地球上の水の循環。	地球上の水について、どこにどんな形で存在しているか考えようとする。		温度変化による水滴と水蒸気の状態変化を実験で調べられる。	
二	霧や雲はどのようにしてできるのか：霧や雲のでき方を	霧や雲ができるようす。		大気中の水蒸気がどのようにして霧や雲になるかを考		霧や雲の発生する状態を理解する。

	理解する。			えられる。		
三	なぜ冷たいコップに水滴がつくのか：露点の測定の実験を通して、空気中の水蒸気や湿度について考える。	露点を調べる。	身の回りの諸現象から空気中の水蒸気の存在を確かめようとする。		露点を正しく測定することができる。	
四		飽和水蒸気量と温度。		気温が下がると、空気中の水蒸気が水滴になることを指摘できる。		空気中の水蒸気には限界があることを理解する。
五 本時		露点と湿度。		露点や飽和水蒸気量の既習から、実際の湿度を調べる方法を考えることができる。		湿度を、空気中の水蒸気量や飽和水蒸気量、露点と関連づけて理解する。

5　本時の学習

(1) 教材名　　なぜ冷たいコップに水滴がつくのか　(5／5)

(2) 本時のねらい

・露点や飽和水蒸気量の既習から、実際の湿度を調べる方法を考えることができる（科学的な見方・考え方）

・湿度を、空気中の水蒸気量や飽和水蒸気量、露点と関連づけて理解する。（知識・理解）

(3) 準備・資料など

ワークシート、ピクチャーカード、実験器具。

(4) 本時の展開

過程 時間	学習活動	指導上の留意点	評価（観点、方法等）
導入 ５分	①小単元の学習の流れを確認する。（学習の流れの確認） ②気温と飽和水蒸気量の関係を確認する。（前時の復習）	グラフを提示し、説明する。	
展開 35 分	**学習課題：露点や飽和水蒸気量を基に空気の湿りぐあいを調べる方法を考え、実際に求めてみよう。** ③どのような空気が湿っていて、どのよう	日常生活における実体験を思い起こさ	

	な空気が乾燥しているといえるか考える。 自分の考えをワークシートに記入する。 ④全体に発表する ・空気が湿っていると洗濯物が乾きにくい ・乾燥していると、髪がぱさつく ⑤湿度について理解する。 湿度の計算方法を知る。 例題を解きながら、湿度の意味を理解する。 ⑥「実際の湿度を求めてみよう」 湿度を求める方法を考える。 自分の考えをワークシートに記入 ↓ グループで意見交換し、まとめたことをワークシートに記入する。 ・気温を調べることで、飽和水蒸気量がわかる。 ・露点を調べることで、水蒸気量がわかる。 ・上の２つがわかれば、湿度が計算できる。 ⑥考えがまとまった班は、前時の実験結果を元に、実際に湿度を計算する。 ⑦各班の意見を発表する	せ、自由な発想で考えさせる。 発表させることにより、空気の湿りぐあいについて十分に実感が持てるようにする。 湿度の意味を説明する。 計算方法を提示する。 計算の例をあげる。 まず一人ひとりの考えをワークシートに記入させ個々の考えを持ってグループ内で意見交換させる。 ☆湿度を求めるには、飽和水蒸気量と水蒸気量を知る必要があることを再確認する。 水蒸気量を知るには、露点を調べればよいことに気付かせる。 表やグラフの利用を助言する。 〇班内での話し合いをリードするよう助言する。 幾つかの班を指名し、班内でまとまった意見を、全体に発表させる。 説明の仕方や表現の工夫などを口頭で評価する。	【科学的思考】 露点や飽和水蒸気をもとに、実際の湿度を調べる方法を考えることができる。 〔ワークシート：観察〕
まとめ 10 分	⑧実際の湿度の調べ方を再確認する。 気温→飽和水蒸気量 露点→水蒸気量 湿度の計算 ⑨実験結果から、実際の湿度を計算する。 **単元の学習内容の確認** **湿度＝（その空気１立方ｍが含んでいる水蒸気量）÷（その温度の飽和水蒸気量）×100** **「その空気の含んでいた水蒸気量」は「露点」が分かると調べられる。** **現在の気温の飽和水蒸気量と露点が分かると求められる。など。** ⑩霧や雲ができる過程をもとに、湿度を空気中の水蒸気量や露点、飽和水蒸気量とを関係づけて理解する。	わかりやすい説明を利用し、再度全体の場で確認する。 ワークシートに記入させる。 これまでの学習内容を総合して考え、理解することができたか確認する。 ☆理解が十分でない場合は『学びくん』を利用し、家庭学習へとつなげる。 〇家庭での湿度を求めてみるなど意欲化を図る。	【知識・理解】 湿度を、空気中の水蒸気量や飽和水蒸気量、露点と関連づけて理解する。 〔ワークシート

☆：努力を要すると判断される状況の生徒への支援

〇：ねらいを達成したと判断される状況の生徒への支援

(5) 意欲を引き出す工夫

・既習をもとに実際の湿度を求める実習を取り入れたプロセスを取ることで、湿度についての興味を持たせる。

・学習課題を明確に意識づけし、目的を持たせ、達成感を持つことができるようにする。

・グループ内で協力して実験を進めたり意見交換したりすることで、課題を共有させる。

音楽科

1. 教科研究主題

主体的に学ぶ力、考える力、表現する力を伸ばす指導の工夫

2. 主題設定の理由

音楽科においては、生徒が表現及び鑑賞の様々な活動を通して豊かな音楽体験を積み重ね、音楽の良さ、美しさに深く触れ、音楽活動の喜びを味わい、心豊かに生きていくための資質や能力を確実に身につけていくことが求められている。これらのことは、自らの感性を働かせ、様々な音楽に主体的、創造的にかかわることでこそ実現していくものである。音楽科で育てたい「豊かな感性」は簡単に磨かれるものではなく、また中学校3年間という短い期間で、その成長を推し量ることは難しい。しかしだからこそ、題材計画を充実し、教材を十分に考慮し選択していくことはもちろん、生徒が自ら学習活動にかかわるための手立てを考え実践していくことが必要と考え、上記の主題「主体的に学ぶ力、考える力、表現する力を伸ばす指導の工夫」を設定した。

3. 実践の内容

(1) ねらいを明確にした授業

題材の目標を理解し、毎時間の授業でどういう力をつけるのかを教師のみならず生徒も共有することをめざし、授業の始めに「本時のねらい」を板書したり、昨年より導入した授業の内容、ポイントを示した冊子『学びくん』を使って題材の始めに示すようにした。これにより生徒がより主体的に学習にかかわれると考えたからである。また特に器楽や合唱の楽曲を仕上げていく際には具体的な達成目標を明示し、学習の意欲化を図った。

(2) 主題にせまるための手だて

1) 主体的に学ぶ力、考える力、表現力を伸ばす工夫

① 主体的に学ぶ力を育成するために、合唱コンクール導入の授業で、自己評価やグループ学習を取り入れた。本校では合唱コンクールの取り組み過程においては生徒の意識も高く自己評価を用いることはとても有効であった。それによって生徒個人の次時への課題、目標をはっきりすることができ、教師が行う個々へのアプローチもより具体的に行うことができた。また協同学習の理念に基づいた話し合いの場を設定するには、合唱でのパート練習が効果的であると考えた。パートごとにパートリーダーを選出し、各パートを技術的な表現だけでなく、パートや学級の雰囲気を盛り上げることも含めて取り組んだ。

② 1年生の「二重奏の響きを味わう」ところではグループ学習、相互評価を取り入れ、アルトリコーダーを使って、「かっこう」「聖者の行進」など平易な曲を取り上げた。生徒の活動としては跳躍も少なく、演奏しやすいので、自ら旋律の流れや強弱、速さを工夫することができ、個々の考えた演奏を比較的簡単に発表することができた。またグループ発表を通して、お互いを聴き合い、相互評価することもスムーズにできた。

③ 鑑賞教材においては体験的学習を取り入れた。「春」では弦楽器を準備し、一人ひとりが音を出したり、チェンバロの音を電子楽器で出し、ピアノとの音色の違いを考えたりした。また「魔王」ではコンピュータを使って伴奏し、実際に「語り手」「父」「子」「魔王」に分かれて歌ってみた。このように鑑賞教材に「聴く」という受身的なものだけでなく「演奏する」という能動的な活動を工夫し取り入れることによって、より鑑賞能力がつき、興味関心が強くなり、自ら取り組む生徒がより多くなった。

④ 選択音楽の授業において、創作活動の一つとして「効果音作り」を試みた。グループ分けをし、無声の映像（音楽やせりふを比較的入れやすい教材、ディズニーアニメなど）に効果音やせりふを考えてつけていくものである。この題材はＤＶＤを製作する授業を参考にしたのだが、人数が多く、制作期間の問題もあって、映像を流しながら生でせりふや音をいれる方法を取った。タイミングを合わせることがとても難しいが、グループの中で音楽を担当する人、楽器を担当する人、せりふをいう人などしっかり役割分担ができ、生徒達が主体的に音楽に関わる姿が見られ、意欲的に表現活動に取り組んでいた。

⑤ 器楽の教材として「ボイスパーカッション」「ボディーパーカッション」に取り組んでみた。4～6 つのパートが交互、もしくはアンサンブルして演奏するため、一定の緊張感とチームワークが必要となる。「ボイスパーカッション」は「野菜の気持ち」という教材を使って 1 年の導入に使用したが、野菜の名前が次々と出てくる楽しさもあり大いに盛り上がった。また初めてのグループ活動でもあり、メンバーもランダムに決めたのだが、自然とリーダーができ協力し合って発表できた。また言葉を入れ替えたりタイミングを変えたりとグループ独自の取り組みが多く見られた。また「ボディパーカッション」では、最終的にできたものにラテンやサンバの音楽を入れることでさらに興味が高まり、またリズムに乗った表現を自分達で工夫しようとしていた。

2）音楽科における家庭学習

合唱コンクールに向けての活動では、各パートの音をＣＤに入力し、各個人に配布することにした。そのことで学校でのパート別練習のみならず、家庭での自学が可能になり、気軽に練習することができるようになった。また『学びくん』にも自学のポイントの欄を設け、生徒が曲に対して興味関心を深め、広げていけるように工夫した。

（3）評価について

評価においては、いわゆる「上手］「下手」という技術面の評価ではなく、音楽的感性や、

いかに主体的にかかわろうとしたかという関心･意欲を十分評価していくことが特に音楽科では必要であると考えられる。そのためグループ活動や自己評価、また相互評価を積極的に取り入れ、またビデオなどの視覚機器により、自分達の演奏を客観的に見つめ、評価し、次に生かしていく力を養っていくことに重点を置いてきた。

4. 成果

上記にも述べたように、各時間の授業における目標、ねらいの共有化を図ることにより、特に今まで音楽科ではともすれば曖昧であった「今日の授業はこういうことをするのだ」ということや「こういうことができればいいんだ」ということが教師も生徒もより具体的に共有できるようになった。またねらいを明確にすることにより、「どういう事がわかったのか」という評価や次時の目標や課題が自然と見えてくるようになった。

また合唱コンクールではＣＤを渡し、自学として取り組むことで課題曲、自由曲の歌詞の内容、強弱、表現記号の意味、理由など、楽曲のもつ音楽性に興味を持ち主体的に調べる生徒が増え、総合学習のテーマにもつながってきた。

パート練習では、最初はリーダーもなかなか建設的な意見ができにくい雰囲気もあったが生徒の大きな目標や毎時間の課題を明確にし、全員が同じめあてを共有できるよう工夫することでより豊かな表現を作りあげるきっかけとなった。

5. 課題

グループ活動では自分達の課題を見つけ、それを解決し、目標が達成できるよう支え合いや関わり合いを重要視し取り組んできた。しかし、グループの練習の中での個人差があり、どうかかわっていけば相互の向上が図れるかが課題である。また集団として相互向上を意識させる行動が徐々に増えてはきているものの、全体の力としてはまだまだである。

また、指導の中で、生徒の直感的イメージや感覚的表現を見逃さず、その音楽から何かしら喜びや良さを見出せるようにしたい。そしてその良さや喜びを授業の糧として、また生徒同士が関わり合いの中から共に分かち合い、向上していける態度を養っていきたい。

主体的に関わっていくには一人ひとりがしっかり意識し活動して初めてうまくいくものである。そのために、個々に注目し、評価を通して意欲や技能が伸びるような支援を工夫していかなければならない。「主体的な音楽活動」とひと言でいってもそれを生かすための支援、評価方法は本当に難しい。生徒自身の意欲、関心を引き出すためにはまず何よりも教師自身が意欲を持って教材を工夫、開発し取り組んでいかなければならない。

研究発表会公開授業指導案

第１学年１組　音楽科指導案

指導者　広瀬　真樹

1　題材名

表現の豊かさを感じ取ろう―魔王

2　題材目標

・楽曲の雰囲気や曲想の変化、歌い方の違いに関心を持ち、意欲的に鑑賞、表現活動に取り組んでいる（音楽への関心・意欲・態度）。

・　楽曲の雰囲気や曲想の変化の特徴を感じとって、表現を工夫しようとしている。（音楽的な感受や表現の工夫）。

・楽曲の雰囲気や曲想の変化を意識し、楽曲を聴き取っている（鑑賞の能力）。

3　指導にあたって

(1)教材観

本題材では、詩の情景と音楽が結びついた歌曲に興味関心を持ち、音楽から詩の情景を感じるとともに、音楽表現の工夫を味わうことをねらいとしている。学習指導要領、第１学年の目標に「多様な音楽に興味・関心を持ち、幅広く鑑賞する能力を育てる」や鑑賞の内容に「声や楽器の音色、リズム、旋律、和声を含む音と音との関わり合い、形式などの働きとそれらによって生み出される楽曲の雰囲気や曲想と関わらせて聴くことをねらいとしている。そのためには、音楽の構成要素と楽曲のもつ雰囲気と曲想のかかわりを意識して聴き取らせたり、聞き分けさせたりすることが必要となってくる。鑑賞教材「魔王」は「語り手」「父」「子」「魔王」という４つの登場人物の対話形式となっているため、「旋律の雰囲気」「歌い方の違い」「伴奏の変化」や人物の気持ちの変化を表す「音高と強弱の変化」を感じることが比較的容易な情景描写や物語風の楽曲である。

(2) 生徒観

本校では意欲を高めるための手立てを思考していくことを本年度のねらいとして　　おり、音楽科でも「主体的に学ぶ力、考える力、表現する力を伸ばす指導の工夫をテーマに、意欲的に学びに向かうため、グループ活動、体験的学習などを設定し意欲化を図ってきた。

本学級の生徒はこれまでにヴィヴァルディー作曲「春」の鑑賞を行っている。　　「春」では、音楽によって表現された情景を味わいながら、鑑賞する学習を行った。強弱や早さ、そして音の高さや楽器の音色の違い、といった音楽表現によって生み出される情景を想像しながら味わって聴くことができた生徒も多くいた。しかし、これまでに詩と音楽が結びついた歌曲に触れたことのない生徒が大半であり、詩と音楽のかかわり、音楽表現の工夫については十分に学習していない。ここでは音楽と情景とのかかわりに加え、音楽表現の豊かさを感じ取る能力をつけさせたい。

(3) 指導観

この題材の学習にあたっては音楽から情景をイメージできるようにし、楽曲の雰囲気や曲想の変化を感じ取ってもらいたい。また詩の内容を理解し、情景をイメージして４つの役ごとの特徴を示す音楽表現の工夫や物語の展開に伴う表現の変化に気づくことができるように場を設定したい。

この教材では多岐にわたる内容について解説的な授業になりがちであるが、ここでは表現活

動を鑑賞に取り入れることで、一歩進んだ姿勢を養うことができると考え、実際に歌ってみる「歌唱」を試みた。また第１回の視聴での感想がどう変容していったのかも、調べ、評価することも重要である。

本校の研究主題は「確かな学力を育む指導の研究」であるが、音楽科における「学力」とは「音楽の諸要素を知覚、感受する能力」である。このことを念頭において授業を進めていきたい。

4 指導計画と評価計画

総時数　３時間　　本時（2／3）

次	題材及び目標	主な学習活動	関心・意欲・態度	感受性や表現の工夫	技能	鑑賞能力
一	詩と音楽が一体になった美しさ、劇的効果を味わうことができる。	「魔王」の詩の内容を理解し、場面を想像しながら聞く（第１回視聴）	歌い方によって感情が引き出されることに関心を持ち自分のイメージを広げようとしている。	詩と音楽が一体となっている歌曲の表現効果を感じ取っている。		
二	歌曲の特徴をとらえ、工夫して表現することができる。	歌曲「魔王」を自分達で役割を決めて歌唱する。		楽曲の雰囲気や曲想の変化をとらえ、その表現に近づけようと工夫して歌唱している。		
三	歌曲の良さを感じ、味わうことができる。	楽曲の雰囲気、曲想の変化、歌い方の違いを理解し、聞く。（第２回視聴）	歌い方の違い、表現の工夫に対して興味関心を高めている。			表現の要素や伴奏により生み出される楽曲の雰囲気や曲想の変化を意識して聴き取っている。

5 本時の学習

（1）教材名　鑑賞「魔王」

（2）本時のねらい

楽曲の雰囲気や曲想の変化を感じ取り、歌唱で表現する。

（3）準備・資料など

役別ＣＤ 、ＣＤラジカセ 、フラッシュカード 、プリント。

（4）本時の展開

過程 時間	学習活動	指導上の留意点	評価（観点、方法等）

導入 10 分	・登場人物別に役作りの話し合いの結果を発表する。 ・本時のねらいを知る。 **曲の雰囲気や曲想の変化を感じ取り、歌唱で表現しよう。**	・話し合いの結果を前もってまとめておき、表を使って分かりやすく提示する。 ・全体に向かって発表するように注意する。	
展開 30 分	・役ごとのグループでパート練習を行う。（ＣＤラジカセを使用） ・グループ別に発表する。 ・相互評価をする。	・各パートをまわって支援する。 ☆音が取れない場合は横にいっていっしょに歌う。 〇登場人物の気持ちを考えてそれぞれの役に合う歌い方を工夫するようアドバイスする。 ・楽曲の雰囲気に近づけるように注意する。 ・気がついた点を発表させる。	【音楽的な感受や表現の工夫】 楽曲の雰囲気や気持ちの変化を表現しようとしている。〔観察〕
ま　とめ 10 分	・4 つのグループを合わせて歌唱する ･活動のまとめを評価表に書き込み振り返りをする。 ・次は 2 回目の鑑賞を行い学習のまとめを行うことを伝える。	･本時のねらいを再度確認してから合わせる。 ☆練習時にうまくいかなかったところに、歌唱の支援をする。	

☆：努力を要すると判断される状況の生徒への支援
〇：ねらいを達成したと判断される状況の生徒への支援

(5) 表現を工夫するための方策

役割ごとに相談する時間を確保することで、表現を工夫できる。

歌唱を練習前に見せることで、より表現を工夫することができる。

美術科

1. 研究主題

意欲をより高める授業の工夫・改善―美術科における協同学習の工夫

2. 主題設定の理由

これまで全学年通して、ものを描いたり造ったりすることが不得手、苦手という生徒が案外多かった。しかし、その多くは「しっかり描けるようになりたい」「頑張って勉強したい」という意欲を持っていることも実態アンケートから分かった。美術科の授業時間数が少ない現状から、じっくり描くことや制作に時間をかけることが困難になっている。下書きは描けるが色塗りが苦手という生徒も多く、絵を描くことへの興味も薄れている。また、絵画やデザインで構想を練ったり、アイデアを出したりするような場面ではなかなか前に進まないという生徒も多く、意欲が今一つ高まらないという実態もあった。

このような現状の改善を図るためには、基本的な描画技法を習得し、絵が描けることの喜びを知り、また、発想や構想を促す授業を工夫する必要があると考えた。そのために、題材を吟味し、興味が湧き、制作意欲を維持できるものにし、意欲を高める授業の改善を図るために協同学習の理念を取り入れた仕掛けや工夫を考えた。今生徒達が持っている意欲や前向きな姿勢を大切にし、それを少しでも伸ばすためにこの主題を設定した。

3. 実践の内容

(1) ねらいを明確にした授業

ねらいが明確な授業を進めていけば生徒は意欲的に授業に参加し、授業理解も深まると考え、学習ハンドブック『学びくん』を作成し、「題材の見通し」と「評価での振り返り」において活用を図った。各題材の導入で身につけてほしい力を学習目標や学習内容を話す中で確認させ、時間数と学習過程を把握させるようにした。

『学びくん』の制作にあたり留意した点をあげると、

① 年間の学習内容：題材の設定においては各学年を見通し、各領域・各題材の連続性、関連性を配慮、1～3 年の年間計画を作成する。

② 評価について：1 年と 2、3 年で観点評価の内容をそれぞれの段階に合ったものにし、評価の方法については大事にしてほしいこととして具体的に示す。

③ 自学へのアドバイス：子ども達の生活の中に生きる美術という視点で、この題材の学習が日常の生活とどう関わっていくのかに重点を置く。

その他、授業の導入段階で実習例を参考に提示したり、また、その時間の中心になる課題を、板書を工夫して示すなど毎時間の授業のめあてを明確に示すようにした。

(2) 主題にせまるための工夫

授業の中に主体的な学習の場や学び合いの場を設定し、「協同学習」の理念を生かした場面や仕掛けを工夫する。共に学び合うことを意識して授業を進め、場面の形やグループ学習等の学習

形態にあまりこだわらず、クラスの仲間が一緒に高まろうとする意識に重点を置き取り組ませた。

① 発想や構想を練る場面では、互いの発想や助言などを出し合わせるようにする。
② 互いの仕事ぶりがわかる 4 人がけの机を十分に生かし、絵の具の塗り方、用具の使い方、技法の工夫など互い参考にしたり、教え合ったりすることを大切にする。
③ 鑑賞の題材や各題材の振り返り段階においては、友だちの仕事ぶりや発想・表現の工夫など、そのよさを見つけてあげ、全員が互いの感じ方を知り、互いの仕事ぶりを認め合う。

(3) 評価の工夫

美術科では、作品内容と制作過程が深く関連しており、毎時間制作目標を立てさせ、達成度を毎時間確認した。その達成度が制作意欲に関わり、充実した作品が揃うことに結びついた。授業では課題説明の際に生徒の反応を観察し、興味があるかを判断して、表情にも表れている生徒には声かけなどをして意欲を高めようとした。制作途中では個人個人の進行状況を確認し、1 時限の到達状況を評価した。制作後は完成作品を自他共に鑑賞し合い、話し合いなどを行い発表するなど協同して学習する場面づくりを意識し、自分や仲間の成長を感じる評価を工夫した。

4. 成果

『学びくん』で学習の見通しを持たせ、毎時間のねらいを明確にすることにより、1 題材にかかる時間が短くなり、生徒達の学習活動の集中力も以前より増し、計画通り進むようになった。また一方、毎時間の取り組みとして、時間目標を立てさせ、その時間に自分なりの到達状況を知らせる取り組みをした。すると時間目標に向かって打ち込んでいく生徒の姿が教師の目に映るようになり、観察の中で制作意欲を感じ取ることができた。

鑑賞などについても、友だちの作品のよさに気付くと同時に自分の作品にもしっかり向き合わせた。自分の作品に関して説明する場合、マイナス部分の内容は多く言えるのが以前であったが、自分の作品の価値を高めるにはどう説明することが必要なのかと考えさせることで、自分の作品についてのプラスの部分を多く発見できるようになっていった。

また、協同学習を意識した場の設定や自己評価及び相互評価の工夫は自分達の学習活動を見直すきっかけともなり、成就感や満足感を味わう生徒も増えてきており、自信にも繋がっているように思われる。それから私自身にとっても学習ハンドブックの「自学へのアドバイス」を作成するにあたり、各題材の学習と生徒の日常生活とのかかわりという視点で、美術の学習を見直すきっかけになったことは大きな成果であった。

5. 今後の課題

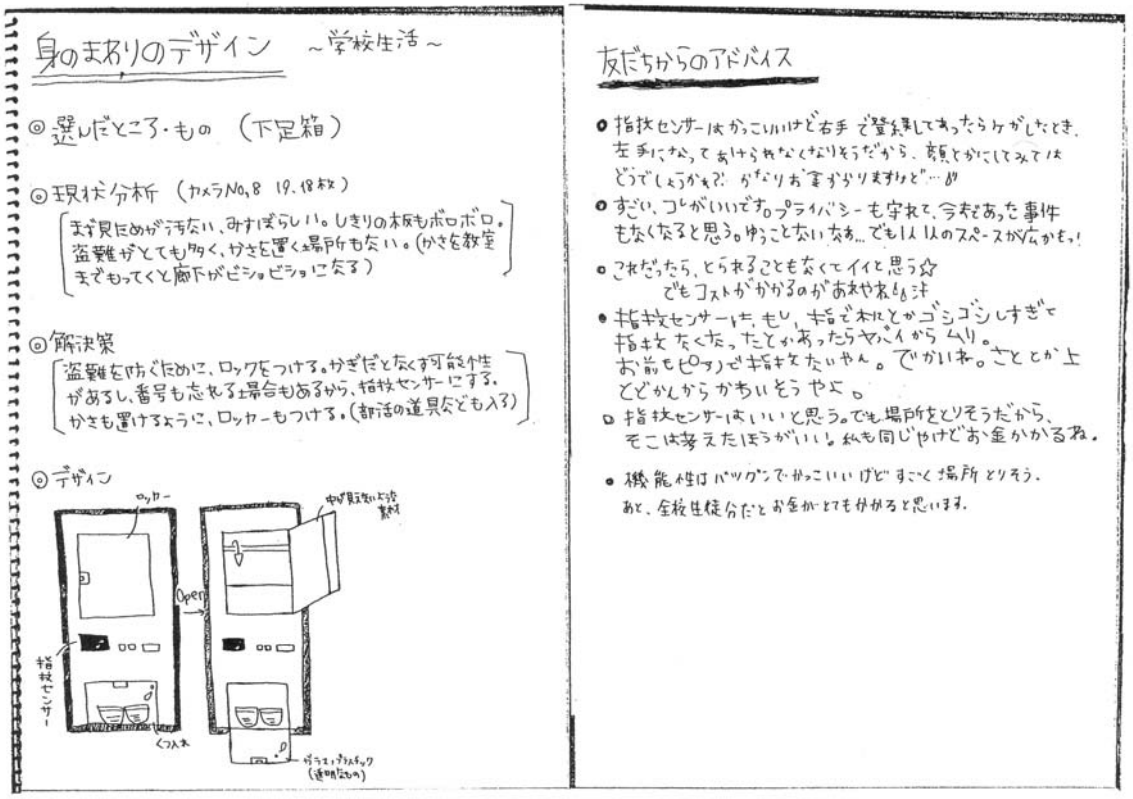
授業のアンケート結果から、学年や題材により授業内容の理解や意欲にまだ差がみられる。

生徒達がどこで立ち止まってしまうのか、よく振り返って見る中で、生徒達の意欲に根づいた題材の設定及び年間学習内容の見直しがさらに必要である。そして、今始めた「協同学習」の理念を生かした授業を推し進めて行き、学び合いの場の設定や仕掛けづくりをそれぞれの題材において研究していくことが今後の課題である。

また、意欲化を図るという点から、授業と並行して美術の学習環境の整備にも目を向ける必要がある。生徒の作品、美しい作品の鑑賞に随時親しむことができる校内における作品展示を工夫

していきたい。今後、生徒と生徒が向き合い、充実感があり、そして学ぶ楽しさのある、そんな授業をめざして研究実践をしていきたいと考えている。

資料　発想や助言を出し合う



研究発表会公開授業指導案

第３学年１組　美術科指導案

指導者　浅田　收一

1　題材名

身のまわりのデザインー学校生活の中で

2　題材の目標

（1）関心・意欲・態度

身近な環境に目を向け、問題点を探り、解決に向けての新たな提案について考え、よりよく改善しようとすることができる。

（2）発想や構想の能力

快適な学校生活に向け、身近な空間をよりよくする改善案を発想し、構想できる。

（3）創造的な技能

自分の提案を発表するための効果的な方法を考えて構図や描き方を工夫し、相手に分かりやすくイラストレーションで表すことができる。

（4）鑑賞の能力

友だちの提案内容について、発想や構想の工夫を感じ取り理解することができる。

3　指導にあたって

（1）教材観

生徒達にとって一日の大半を過ごす学校は、大切な学習の場であると同時に、友だちや教師と苦楽を共にするかけがえのない生活の場でもある。授業を始め、様々な活動の時間が流れる学校空間を快適で過ごしやすいものにする工夫は、日常生活と結びついた大切な課題の一つである。身近な生活用品や施設設備などに目をやり、使いやすさ、安全性、造形的な美しさなどの観点から、改善できる点やイメージアップできるところを調べる。そして、まわりの友だちとも意見交換をし、自分以外の人の助言も取り入れながらアイデアを練り、その場に合ったデザインを提案していく。この題材を扱うに際し、本校が校舎改築の時期にあたっていることを配慮し、この機を生かすよう年間計画の中に設定した。最後には、自分の提案を他の人に伝える形にまとめ発表する。この題材は身近な実生活と深くかかわっており、この機会に学習の展開をよく考え、興味関心をしっかり持たせ、発想・構想、プレゼンテーション等の能力の向上を図りたい。

（2）生徒観

アイデアを練ったり、ものごとを発想したりするという点は不得手という傾向はあるが、美術を頑張る意欲は感じられる。この意欲を大事にしたい。生徒達は、校長から「よいものはぜひ取り入れてみたい」ということを聞き、俄然意欲が高まったようである。自分がイメージしたものを形に表すことをやや苦手とする生徒が多い中で、これまで美術科で学習してきたレタリングやイラストレーション、総合的な学習で学んだ情報収集や発表等を生かし、総合的なプレゼンテーションの力を少しでも身につけてくれればと考えている。

（3）指導観

生徒達の生活に密着したこの題材において、まず、自分自身と向き合い、個人レベルの学習活動をしっかりさせたい。そして、生徒みんなが使う施設空間だけに、自分以外の友だちの声を聞き入れるようにもっていきたい。友だちとも話し合い、助言や意見交換をする中で互いの提案を理解し合い、生徒と生徒が向き合うという学習場面も大切にしていきたい。また、経済性や実現性は大事ではあるが、場合によっては実現にはやや無理のあるものであっても生徒の願いや夢として受けとめていきたい。

4　題材の指導・評価計画（総時間 9 時間）

次・ 配時	主な学習活動 各次の目標	美術への関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
一 0.5	**単元の説明・見通し** この単元の学習を理解し、見通しを持つ。	快適な生活に向け身近な環境のデザインに興味を持つ。			
二 1.5	**改善箇所の決定** 候補になるところを探し、一つに決める。	改善し、提案するところを調べようとしている。			
三 1.0	**現状の把握** 改善箇所の記録と分析をする		現状をしっかり観察し、問題点を分析できる。		
四 1.0	**私のデザイン(提案)** 改良・改善に向けてデザインをする。 友だちとの意見交換をする。		友だちの声も聞き、よりよくする改善案を発想できる。	自分のアイデアを伝えるために分かりやすい構図を工夫して描くことができる。	
五 4.0	**発表資料の制作** 他の人に伝える説明図(イラスト)などを描く。	分かりやすく伝える発表資料を制作しようとしている。	発想を分かりやすくイラストレーションで表せるよう構想を練ることができる。	イメージをもとに、色や形を工夫しながら彩色することができる。	
六 1.0	**発表及び鑑賞** 互いの発表を通して自他の提案の発想やよさを理解する。	自分の提案が他の人に伝わるように発表しようとしている。			友達の発想や構想の工夫を感じ取り提案を理解できる。

5　本時の学習

(1) 制作の発表（本時　9／9）

(2)　本時のねらい

自他の発表を通して互いの提案の発想や構想のよさを感じ取り、理解することができる。

(3)　準備・資料

発表資料、『学びくん』(生徒)、感想記入シート(教師)。

(4)　展開

過程 時間	学習活動	指導上の留意点	評価（観点、方法等）

導入 5分	①本時の学習について説明を聞き内容を理解する。 **友だちの提案のよさを感じ取ろう**		
展開 40分	① 各グループに分かれて一人ずつ自分の提案を発表する(6グループ、一人3分以内) ② 友だちの発表を聞き、メモを取る。 ③ 各グループで代表提案を選ぶ。 ④ 各グループ、代表提案者が発表する。 ⑤ それぞれの代表提案者の発表を聞き、感想を書く。	・各グループ司会者を確認させる・自分が選んだ箇所の理由や改善しアピールしたい点をはっきりさせる。 ・発想、考え方、アイデアなどよいところを意識してメモを取らせる。 ☆メモが取りにくい生徒には観点項目を参考にさせる。 ・各自のメモした感想を基に意見交換し、司会者を中心に進めさせる。 ○ グループによっては話し合いの様子、選出のいきさつも司会者に話してもらう。	【美術の関心･意欲･態度】自分の提案が他の人に伝わるように発表しようとしている。［観 察］ 【鑑賞の能力】友だちの発想や構想の工夫を感じ取り提案を理解することができる。［感想シート・観 察］
まとめ 5分	①『学びくん』で本題材の学習内容をふり返る。	・ふり返りの前に1～2人の生徒の感想を発表させる。	

☆：努力を要すると判断される状況の生徒への支援

○：ねらいを達成したと判断される状況の生徒への支援

(5) 意欲を引き出す工夫

・友だちの提案のよさを見つけるために、話し合いの場を設定する。

・感想シート（次頁）を活用する。

3年美術科　身のまわりのデザイン

友だちの提案のよさを感じ取ろう

[　　] グループ

3年　　組　氏名

	感　想 いいなぁと感じたところを　メモしよう	代表者
友だちの名前	感想の視点　・発想、夢、アイディア、着眼点は。 ・実用性、費用、機能性は。 ・発表資料は。発表の仕方は。 ・その他(全体的な感想)	◎ ○ △ 印を

他のグループの提案発表

グループ名	感　想　よかったところ
① 下足箱	
② 手洗い 水道	
③ 体育館	
④ 教室関係	
⑤ 中庭 廊下・階段	
⑥ その他の 場所	

保健体育科

1　教科研究主題

自主的なグループ学習の展開によって意欲を引き出し、「確かな学力」として定着する体育指導のあり方

2　主題設定の理由

体育の授業に取り組む本校生徒の様子やスポーツテストの結果等から見えてくる現状は、運動を好きな生徒と、運動に対して消極的な生徒の二極化傾向であった。特に、後者の消極的な生徒の意欲を高めることは、生涯にわたって運動に親しみ、実生活の中に運動を取り込もうとする生徒の育成において、非常に重要な課題であると考えられた。また、思いの外「体育が好き」という生徒の割合が少ないという現状もあった。

そこで、すべての生徒が生涯にわたってスポーツライフを楽しめるようにするには、互いの個性を認め合い、小さな達成感をも共感し合うことのできる協同学習がふさわしいと考え、これまで授業の展開を工夫してきた。スタイルの定着をめざす指導により、グループや個人の状態に合った練習計画や課題の設定を自ら考え、工夫・改善していく力はかなり身に付いてきた。また、互いの個性に気づき、その存在価値を認め合うことで運動好きな者も消極的な者も、共に意欲の向上につなげていけるようになってきている。

本年度は、課題解決に向けた学習スタイルの定着という基礎にのっとり、主運動の活動場面の充実をめざすことで、さらに生徒の意欲を引き出し、体育科の学習が好きで積極的に取り組みたいと思う生徒を増やし、「確かな学力」として身に付くものにしていこうと、主題の設定を行った。

3　本年度の取り組み

(1) ねらいを明確にした授業

年度当初のオリエンテーションで『学びくん』から年間計画を、また体育的活動を取り入れたライフスタイルの重要性、評価の 4 観点や授業の流れについて説明し、全体の見通しを持った上で意欲的に取り組めるようにした。また、昨年度までの取り組みの中で充分に身につけてきた好ましい点についてその成果を讃え、本年度の学習がその成果にのっとり、より充実したものとして展開されていく段階にあることもつけ加え説明した。

各単元の最初のオリエンテーションで、学習のねらいと流れの確認や自己評価、グループ編成など、具体的な学習についての説明や確認、準備を行った。

毎時間の始めに、グループのカード(次頁上参照)で本時のねらいと練習計画を、そして個人カード(次頁下、次々頁上)で個人の目標を教師がチェックし、学習活動をスタートすることにより、本時のねらいと目標を生徒が明確に確認できるようにした。

また、スポーツテストや長距離走などの取り組みにおいては、2、3 年生において、昨年度の自己記録や反省を振り返らせ、意欲をもって取り組むための手だての一つとした。

バレー

バンビちゃん（バレー） グループ学習計画表　　班長　　副班長　　班員

2年 3組　2班

単元計画

第何時	学習内容
1	→ オリエンテーション
2	→ ルール、パス、ポジション決め
3	→ パス、スパイクのリズム練習
4	→ パス、サーブ
5	→ サーブ、スパイクの練習
6	→ スパイクの練習
7	→ サーブカット練習
8	→ 今までの復習
9	→ ルールの復習
10	→ 練習試合
11	→ 〃
12	→ 〃
	〈トレーニング〉 3腕立て 10回×1セット 1ストレッチ 4腹筋 10回×1セット 2走る 4周

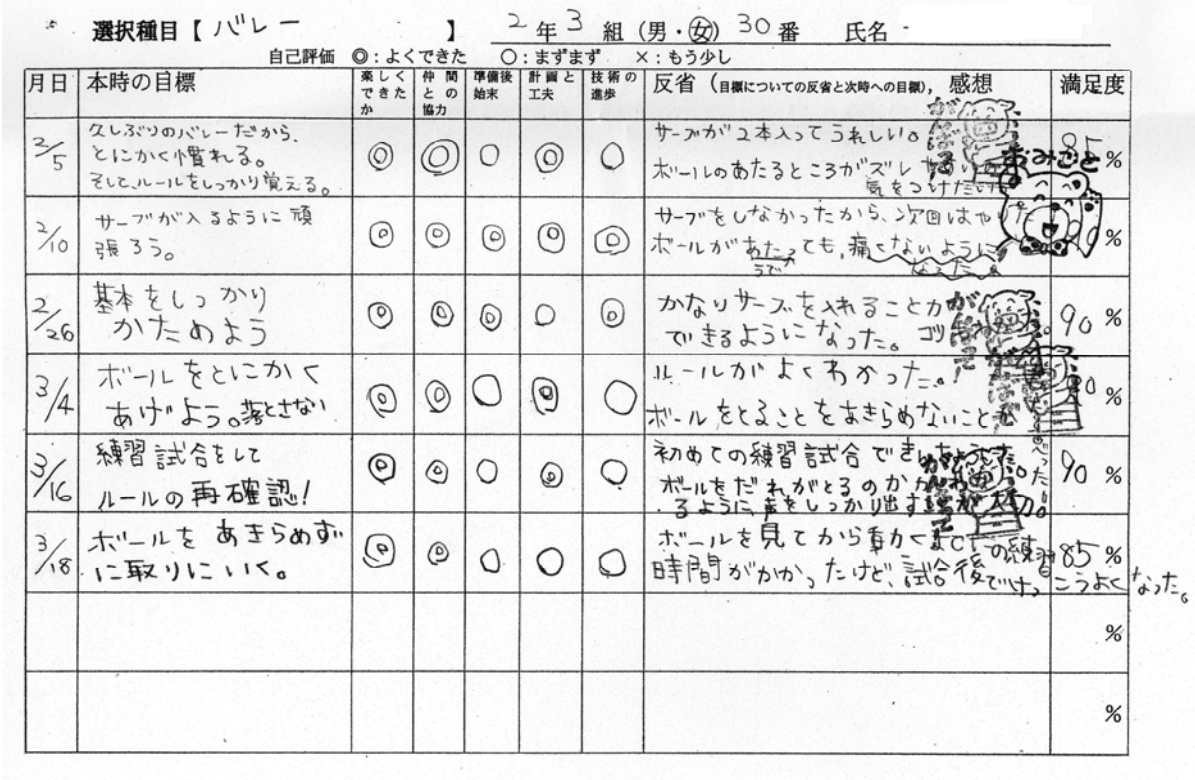
2月5日 3,4限		2月 日 3,4限		月 日 限	
本時の目標	少しでもバレーになれよう!	本時の目標	サーブが入るようがんばろう	本時の目標	バレーになれよう
配時	練習内容	配時	練習内容	配時	練習内容
15分	ストレッチ,トレーニング	15分	ストレッチ.トレーニング	15分	ストレッチ,トレーニング
40分	パス(できたらラリーに挑戦)	30分	パス	10分	パス
10分	ルール覚え	5分	スパイクのリズム練習	10分	円じん
5分	反省	10分	スパイク	15分	サーブ
		15分	サーブ	15分	リズム練習
		20分	パス,ラリーング パス	10分	スパイク
		5分	反省	15分	ポジション決め
				5分	反省

みました

選択種目［フレッシュテニス］　3年4組（男・女）21番 氏名

項目 月日	本時の目標	楽しくできたか	安全への心配り	仲間と協力	計画と工夫	技術の進歩	反省（次時にやってみたいこと）	今日のヒット	授業の充実度
9/26	ニーティングをしよう	◎	◎	○	◎	○	主任長になったがしかし責任感がないのでがんばろうと思う	なし	30%
9/30	ボールとふれあおう!	◎	◎	◎	△	○	楽しかった♡ 基本を大切に素振りをしっかりやろう。ラリーがんばれ		80%
10/7	ラケットとふれあおう!	◎	◎	◎	◎	○	試合みたいなことをしたらすごいのが出てきた。練習を工夫して上手になってこう。がんばれ		98%
10/16	ラケットとふれあい一生懸命がんばる!	◎	◎	◎	○	◎	とっても一生懸命できた! 技もしっかりしたぞっ。	みる	93%
11/11	コンビネーションをがんばる。	◎	◎	◎	◎	◎	頑張ってきてなかの2チームいいようだね。	試合	98%
11/25	ラリーをつなげよう!!	◎	○	◎	○	◎	ラリーが四人でつなげた! スパイクがうまくなった。	スマッシュ	98%
12/9	サーブをコートの中に入れる。	◎	◎	◎	◎	◎	何回もコート上の中に入ってうまくなってきています。	GOOD	98%
12/16	ラケットの面を正しくする。	◎	◎	◎	○	◎	アウトせず、早いボールを打てた。	スマッシュ	90%

自己評価　◎…よくできた　○…まずまず　△…もう少し



選択種目【バレー】 2年3組（男・女）30番 氏名

自己評価 ◎：よくできた ○：まずまず ×：もう少し

月日	本時の目標	楽しくできたか	仲間との協力	準備後始末	計画と工夫	技術の進歩	反省（目標についての反省と次時への目標），感想	満足度
3/5	久しぶりのバレーだから、とにかく慣れる。そしてルールをしっかり覚える。	◎	◎	○	◎	○	サーブが2本入ってうれしい。ボールのあたるところがズレ（気をつけたい）	85 %
2/10	サーブが入るように頑張ろう。	◎	◎	◎	◎	◎	サーブをしなかったから、次回はやりたい。ボールがあたってもいたくないようにしたい。	%
2/26	基本をしっかりかためよう	◎	◎	◎	○	◎	かなりサーブを入れることができるようになった。ゴッ	90 %
3/4	ボールをとにかくあげよう。落とさない	◎	◎	○	◎	○	ルールがよくわかった。ボールをとることをあきらめないこと	90 %
3/16	練習試合をしてルールの再確認！	◎	◎	○	◎	○	初めての練習試合できてよかった。ボールをだれがとるのかわかった。るように声をしっかり出すこと	90 %
3/18	ボールをあきらめずに取りにいく。	◎	◎	○	○	○	ボールを見てから動くまでの時間がかかったけど、試合後ではこうよくなった。	85 %
								%
								%

(2) 主題にせまるための工夫

1) 授業形態とカリキュラムの工夫

1時間の授業では、計画・実行・振り返りを行うと、運動時間が少なくなるので、運動にじっくりと取り組める2時間続きの授業形態をとることが効果的であると判断し、全学年年間を通して2時間続きの授業を実施することとした。

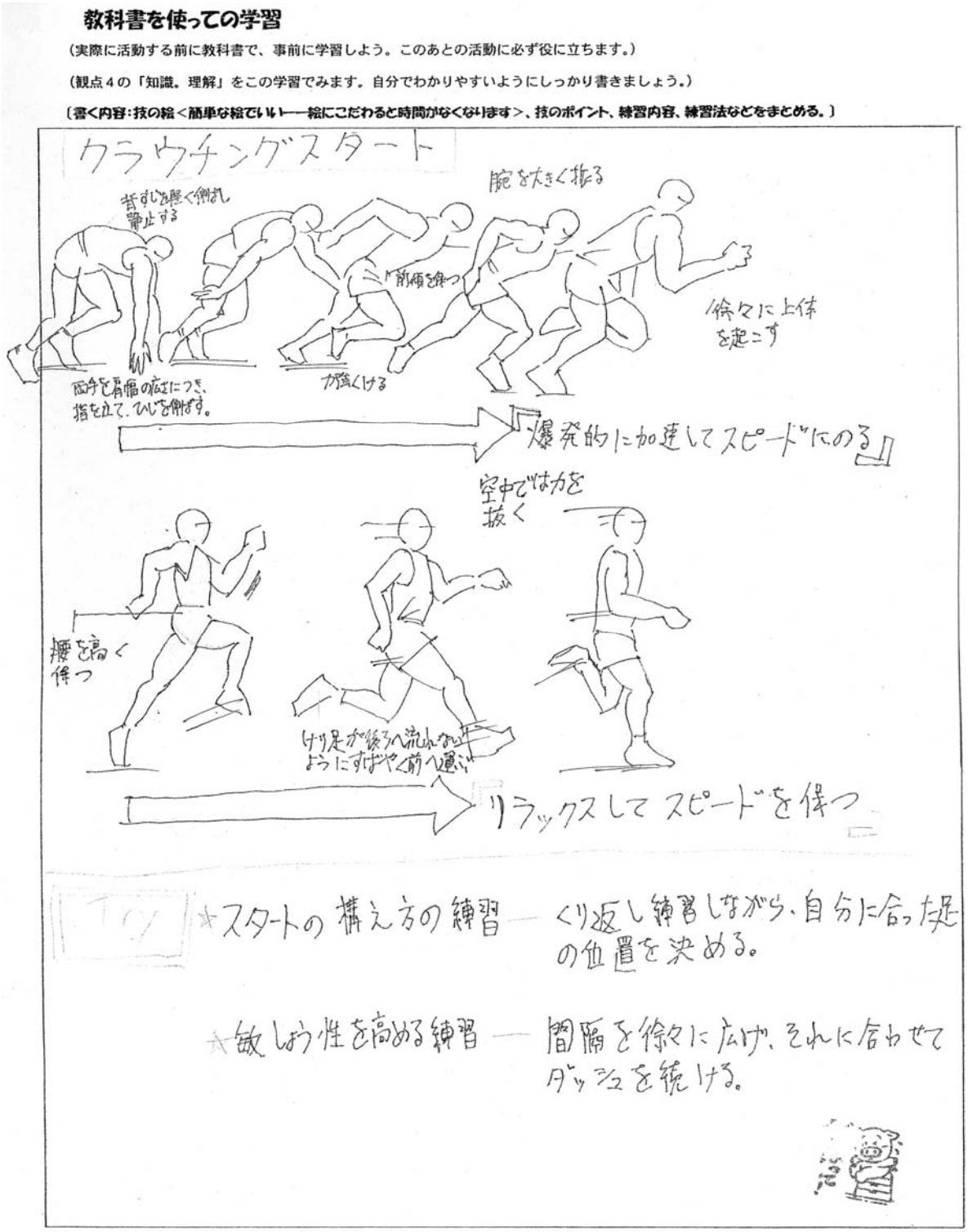
また、1年生では、学習を進める上での基礎・基本の習得と、2年時以降の本格的な選択制授業に向けた学習（グループ学習や練習計画の作成なども含め）を行うことを目的とし、一斉授業の形態で授業を実施し、2、3年生では、2クラス合同（一部1クラスだけ）で、種目選択が行いやすい授業形態で実施した。

2) 調べ学習の実施

個人カードの裏面に、調べ学習の内容を記載できるようにすると同時に、練習計画への位置づけを義務づけ、自分の調べたことを積極的に学習に活用できるようにした。

3) 直接指導の取り組み

生徒は、単元計画に基づく自主的グループ学習を進めていくが、その過程をすべて受け入れ、指導、アドバイス、評価活動にあたるのではなく、適当な 1～2 時間を技術的な指導や作戦面についての講義、あるいは前半の練習・トレーニングのあり方について指導・提案し、その後の活動において徹底させるような形で、直接指導にあたる場面設定を行うよう心がけた。学習者に何を学習させたいのかを教師が明確にできる場であるからである。また、その中で、ミニハードルやラダーの活用、ミニトランポリンの利用方法や場の工夫などといったものは、その後の取り組みに幅をもたせ、さらなる創意工夫を生み出すきっかけとなっている。



(3) 評価について

評価の基準を各単元のオリエンテーションの時に生徒に明示し、説明した。技能面においては、到達目標が分かりやすくなるように別に明示している（原稿末に評価基準の３事例―陸上競技、走り幅跳び、跳び箱・器械運動―を図示）。個人カードの調べ学習やグループ練習計画の工夫も、体育学習に臨む意欲の現れであると受けとめ、積極的に評価し、各自の個性を尊重するように務めている。また、生徒は、この個人カードによって毎時間ごとの取り組みについて振り返り、自

己評価を行っているが、これに赤ペンを加え、次時の意欲の向上につなげるよう務めている。『学びくん』にも学習を振り返る観点を明記し自己の取り組み姿勢や技能の習熟度を確認できるようにしてあるので、その活用を勧めている。行動観点による評価は教師間で確認しながら行っている。

4　成果

1 学期末に行った授業アンケートの結果からもうかがい知ることができるように、体育学習の進め方についての理解が深まり、積極的に活動に参加する生徒の割合が大幅に増えた。昨年度は、形式を身につけさせるため、多少の時間を書く作業に割いてきたが、そのことが本年度に入って定着し、実を結ぼうとしているからではないかと考えられる。

また、スポーツテストの集計結果においても、多くの種目の中に全国平均を超える値を残すことができた。補強運動として位置づけ、継続的に行ってきたトレーニングの成果や、様々な活動に目標を持って取り組み、達成できたときの喜びや努力を互いに認め合える集団に成長してきたからであろうと思われる。例えば、長距離走の取り組みにおいては、自分の走った記録を、体育館に掲示してある 5 段階に分けた記録表に全員が記入している。「あいつには負けたくない」という思いで励みとする者もいるように、全員が一生懸命に取り組んでいるからこそできることであり、心から誉め讃えてやりたい。

運動会においても、「さすが 3 年生！」と感じる 1、2 年生が多く、一生懸命な姿に心打たれ、一年後、二年後には、今の 3 年生に負けない力を自分自身につけてやるぞと、自然と目標を意識できている。

5　今後の課題

自主的グループ学習の形態を続けていこうと思うが、定着に至るには話し合いや作業といった時間を必要とする場面が多くあることを生徒に納得させ、その定着によって、より「確かな学力・技能の獲得」として自分自身に返ってくることを正確に伝えてやらなければならないと思う。一つの課題を解決していくには、みんながそこに向かっていく必要があり、試行錯誤・創意工夫を出し合うことが「互いに高め合う」という意味であることにも気づかせたい。

グループ内に部活動での経験者など、リーダーの存在があるかないかによって取り組む内容に差が出る傾向も見受けられた。その差を埋めるための教師の関わりや直接指導のもち方、授業形態の工夫が今後の課題となっている。

評価基準表事例１

走り幅跳び種目　＜評価規準（技能）の詳細＞　年　組　氏名

（できたら○を）

		A○	A	チェック印	B	チェック印
技能判断	男女	すべてができる	・そり跳びの空中フォームがとれる。 ・はさみとびがロイター板をつかってできる。 ・踏切板に合わせて踏み切ることができる。 上の２つができる。	印 印 印 印	・ももを意識的にあげて助走ができる。 ・踏切の２，３歩前のリズムがとれる。 ・ももを引き上げて上体を上昇させることができる。 ・着地のＶ姿勢がとれる。 上の２つができる。	印 印 印 印 印

走り幅跳び評価規準その１（目標記録計算方法から）

早見表(50m 走の記録からの幅跳び目標記録の算出の早見表)

例：2年男、50m、8秒00の生徒が350cm跳べば、評価基準が[B]で、393～434cmとべば、[A]

2年男子			2年女子			3年男子			3年女子		
50m	算出	幅跳びの記録	50m	算出	幅跳びの記録	50m	算出	幅跳びの記録	50m	算出	幅跳びの記録
～724	→	～435	～824	→	～340	～699	→	～460	～799	→	～355
～776	→	～393	～876	→	～303	～751	→	～415	～851	→	～321
～850	→	～333	～950	→	～252	～825	→	～351	～925	→	～274
～925	→	～273	～1025	→	～200	～900	→	～286	～1000	→	～226
926～	→	272～	1026～	→	199～	901～	→	285～	1001～	→	225～

●この陸上の最後の授業で下の□を記入しよう

君の５０ｍ走記録→ベストの幅跳びの記録→評価基準の判断

秒 → ｃｍ → A○，A，B，C、C×

走り幅跳び評価規準その２（実測）

			A○	A	B	C	C×
記録判断	２年	男	～435	434～393	394～333	332～273	272～
		女	～340	339～303	302～252	251～200	199～
	３年	男	～460	459～415	414～351	350～286	285～
		女	～355	354～321	320～274	273～226	225～

自分の測定記録							ベスト記録
	ｃｍ	ｃｍ	ｃｍ	ｃｍ	ｃｍ	ｃｍ	
	ｃｍ	ｃｍ	ｃｍ	ｃｍ	ｃｍ	ｃｍ	ｃｍ
	ｃｍ	ｃｍ	ｃｍ	ｃｍ	ｃｍ	ｃｍ	ｃｍ

●この陸上の最後の授業で下の□を記入しよう

伸び記録（最高の測定記録　ｃｍ－最初の測定記録　ｃｍ＝伸びの記録　ｃｍ）

評価基準表事例２

跳び箱種目　＜評価規準（技能）の詳細＞　年　組　氏名

		AO	A（できた技に○		B（できた技に○		C	C×
①切り返し系	男	右の３つができる 印	水平開脚跳び縦６段以上 かかえ込みとび縦６段以上 屈伸とび横６段以上 斜め開脚とび縦８段以上 上の２つができる	印 印 印 印 印	斜め開脚とび縦６段以上 かかえ込みとび横６段以上 上の２つができる	印 印 印		
	女	右の３つができる 印	斜め開脚とび縦５段以上 水平開脚跳び４段以上 かかえ込みとび５段以上 屈伸とび４段以上 上の２つができる	印 印 印 印 印	斜め開脚とび横４段以上 かかえ込みとび横４段以上 上の２つができる	印 印 印		
②回転系	男	すべてができる	頭はねとび 前方倒立回転とび 側方倒立回転とび 上の２つができる	印 印 印 印	台上前転７段以上 上ができる	印 印		
	女	右の２つができる	台上前転５段以上 頭はねとび 前方倒立回転とび 上の１つができる	印 印 印 印	台上前転３段以上 上ができる	印 印		
最終判断	①と②ができる。 印		①と②がすべてできる。	印 印	①と②がすべてできる。	印	なにかできる 印	ほとんどできない

中間発表会

①②から１つずつ技を選んで、行う。ＡＢＣの区別をつける。）

例①（Ｂ斜め開脚とび縦６段）　②（Ａ頭はねとび）

君の技を２つ書きましょう。

①（　　）　②（　　）

友達の評価はどれでしたか。（当てはまるところに○を）

①の技について　【優（つなぎがスムーズで、一つ一つの技が大きく、しっかりできていた。）】
【良（スムーズで、一つの技ができていた。）】　【可（なんとかできていた。）】

②の技について　【優（つなぎがスムーズで、一つ一つの技が大きく、しっかりできていた。）】
【良（スムーズで、一つの技ができていた。）】　【可（なんとかできていた。）】

最終発表会

①（　　）　②（　　）

友達の評価はどれでしたか。（当てはまるところに○を）

①の技について　【　優　良　可　】

②の技について　【　優　良　可　】

評価基準表事例 3

器械運動・陸上競技評価規準

	A	B	C
観点1 意欲 関心 態度	右のすべてが満たされている。	・ 服装に不備がない。 ・ ランニング、体操、補強などがしっかりしている。 ・ 活動に進んで、しかも協力して取り組んでいる。 ・ 準備、後始末がしっかりできている。 上の3つ以上が満たされている	服装に不備がある。 右が2つ以下
観点2 思考 判断	右のすべてが満たされている。	・ カードの記入がしっかりしている。（課題は技能面で具体的な表現になっており、反省も同じく具体的な技能面の表現が記載されている。） ・ 技能の内容をよく考えて練習に取り組んでいる。 ・ 練習方法や練習場所を工夫したり、よく考えてやっている。 上の2つ以上が満たされている	カードがいい加減になっている。 右の条件が1つ以下。
観点3 技能		※別紙参照	
観点4 知識 理解	右のすべてが満たされている。	・ 技能のポイントが理解できている。 ・ 技能の名前を知っている。 ・ 練習方法が理解できている。 上の2つ以上が満たされている	右のことがはっきりしていない。

研究発表会公開授業指導案

第 2 学年 1 組　保健体育科指導案

指導者　任田　和弘・山本　哲夫

1　単元名

球技（バレーボール・バスケットボール）　選択制授業形態

2　単元目標

(1) 関心・意欲・態度

互いに協力して、ゲームする楽しさや喜びを味わおうとする。

(2) 思考・判断

ゲームの勝敗を分析したり、ゲームを通してチームや自分の課題を明らかにし、その課題の解決の仕方を考えている。

(3) 技能

チームや自分の能力に応じた課題の練習やゲームを通して、集団的技能や個人的技能を高めることができる。

(4) 知識・理解

合理的な練習の仕方、練習計画の立て方、試合の運営やルールなどを理解している。

3　指導にあたって

（1）教材観

昼休みの体育館の光景からもわかるように、球技は、生徒達にとって身近で、興味・関心の高い教材である。そのため、比較的容易に生徒の意欲を引き出すことができ、積極的な課題解決に向けた学習展開を促すことが可能であると思われる。個人的技能の向上をめざすとともに、共通の目標に向かって作戦やフォーメーションを工夫することで、チームとしての達成感や喜びを味わうことができる。励まし合う仲間、認め合う仲間が存在することに気づき、さらなる向上をめざすことが集団的スポーツへの参加の意義であり、好ましい社会性を身につけさせていく上で重要な課題であるととらえている。

（2）生徒観

校内で唯一、単級で授業を進めている学級である。（前期・後期で単級学級は入れ替えている）そのため、全体的な人数は少ない。

・バレーボール　　男子　8 名、女子 12 名、　計 20 名

・バスケットボール　　男子 10 名、女子　5 名、　計 15 名

バレーボールでは、男子に部員が 2 名、女子に 1 名入っているが、バスケットボールは、女子部員が 1 名のみである。しかし、選択の理由を見ると、「うまくなりたい」「走りまわりたい」「楽しみたい」と積極的で、できるだけ多くのことを学びとりたいと意欲的な取り組みの様子が見られる。ただ、考えが幼く、個人的な技能の向上にだけ目が向けられたり、ゲームができればいいという傾向の者もいるので、協力しないと達成できないような目標設定を仕掛け、チームスポーツならではの面白さや喜びを味わわせてやりたい。

（3）指導観

集団的スポーツにおいて、いざゲームという段階になると、リーダーは一人の力だけでは勝てないこと、面白くないことに気づく。また、そのスポーツ独特の特性や意義に近づけないことも考えるようになる。そんな気づきの中から、どうしたらレベルアップにつながるのか、何を目標として進んでいったらよいのかを判断させ、技能面の向上のみならずコミュニケーションのあり方をも探っていかせたいと思っている。そんな経験の積み重ねの中から、真のリーダーとしての資質が備わるよう指導していきたい。また、一生懸命な姿勢に感動し、その輪が広がっていくことで、よりすばらしい集団が形成され、今後いかなる課題にも立ち向かっていくことのできる仲間の存在を意識し、互いに成長できることを改めて知らせてやりたい。人と人を結ぶ温かい心の通う授業とすることが「確かな学力」に結びつくものと考える。

4　単元の指導･評価計画（総時数 13 時間）

次	学習内容・学習活動 小単元の目標	関心・意欲・態度	思考・判断	運動の技能	知識・理解
一 2 時間	○オリエンテーション。 ・学習のねらいの確認／学習の進め方と方法の理解／調べ学	・真剣に話を聞き、理解しようとしている。			・ねらい、学習の進め方を理解している。

	習の実施／グループ作り、役割分担／単元計画。 **学習のねらいと進め方を知る。**	・調べ学習に熱心に取り組んでいる。			・評価の観点、意味を理解している。
二 2時間	・ボール慣れの運動と種目の特性を理解した動きづくり・基礎、基本の確認。 **ボールに慣れ、基本技能の習得をめざす。**	種目の特性に応じた基本的なスキルを身につけようとしている。			
三 8時間 本時 5/8	○課題解決に向けた練習と段階に応じたゲームの実践。 GAME A（2時間） ・試しのゲーム／簡易ルール。 GAME B（3時間） ・チームのねらいに応じたゲーム展開／攻撃や守備を意識したゲーム展開。 GAME C（3時間） ・意図的な攻撃・ポジショニングや作戦のあるゲーム展開。 **課題解決に向けた学習を展開している。**	・自己の課題解決に向けて、仲間と協力し熱心に取り組んでいる。 ・自他の安全に気を配り、積極的に取り組んでいる。 ・審判の判定や勝敗に対して公正な態度をとろうとしている。	・自己の課題やチームの課題に気づき、その解決のための手段や練習方法を見つけようとしている。 ・学習カードをもとに学習の成果を振り返り、次時の取り組みに役立てている。	・ゲームに生かすことのできる基本的技能を習得している。 ・各段階的ゲームにおいて、状況に応じたプレーができる。	・練習の方法について理解している。 ・技能を向上させるためのポイントを理解している。（調べ学習の活用） ・ルールやゲームの進め方、審判方法について理解している。
四 (2)	○基本技能のチェックテスト。 ○学習のまとめ。 **学習の成果を振り返り、次のステップに生かそうとしている。**	・ベストを尽くし、テストに臨んでいる。	・仲間と共にこれまでの学習の成果を分析し、まとめとしての自己評価を行っている。	・基本技能を習得し、技能の向上が見られる。	・技能のポイントの理解 ・課題解決のための練習のあり方の理解。

5　**本時の学習**（第三次第5時）

（1）題材名　球技（バレーボール・バスケットボール）

（2）本時のねらい

前時のゲームの反省に基づく課題をはっきりと見つけ、解決に向けた練習方法を工夫・実践し、技能の向上とチームワークの形成をめざす。

（3）準備・資料など

各種目に必要なコートの準備、ボール、デジタルタイマー、ビブス、学習カード（個人・グループ）

（4）本時の展開

過程 時間	学習活動	指導上の留意点	評価（観点・方法等）
導入 15 分	・ランニング。 ・体操、ストレッチ。 ・基礎技能の個人練習。 ①集合・挨拶。 ・本時の課題、学習の進め方を確認する。	・前時の反省の中から、特に課題とすべきものを取り上げるように助言する。	
展開 25 分	**【中心課題】課題解決に向けた練習方法を工夫・実践し、チーム力の向上をめざそう！** ② 個人およびチームの課題を解決するための練習方法を考える。 ③ 課題解決に向けた練習に取り組む。	・積極的に話し合いに参加するよう促す。 ・練習の本質を忘れない取り組みをさせる。 ・リーダーや仲間のアドバイスを大切にしながら、ポイントを指示し、支援していく。 〇上手くできない者への指導・援助の活動にあたらせる。 ・基礎的な技能が充分に定着するようドリル練習に取り組ませる。 ☆技能のポイントを確認させ、できるようになるよう支援する。	
まとめ 10 分	・後片付けを行う。 ④学習カードの記入。 自己評価と反省・感想。 ・次時の予告。 ・挨拶。	・ポイントを押さえた練習に取り組めたかどうかを振り返らせる。 ・次時への意欲化を図り、ねらいを明確に伝える。	・課題解決のための練習方法を考え出している。（思考・判断） ・課題の解決に向け、一生懸命練習に取り組んでいる。（関心・意欲・態度）

（5）意欲を引き出す工夫

直接指導の弛緩を使い、定着化を図った基礎技能のドリル練習は、どんな初心者にでも簡単に取り組むことができ、しかも、充分に効果をあげている。授業の展開の中心では、チームの目標・課題に対する練習展開となるため、なかなか個人練習に取り組む方法や時間がなくなってしまう。しかしながら、個人のレベルアップを図ることは必要不可欠な条件で、これを少しでもクリアできる方法として今回位置づけことで、技術の向上につながり、意欲を引き出す手だてとなっていると強く確信している。

また、信頼し合える仲間づくりという観点から授業に入っていくことで、違った視点が持てたり、互いにコミュニケーションのあり方を工夫する様子には、温かいものが感じられるようになってきた。場面が変わっても、互いを尊重し合う姿勢を大事にしていってくれるよう、継続して指導にあたっていきたい。

技術家庭科

1　教科研究主題

学ぶ意欲を育てる「豊かな体験」のあり方

2　主題設定の理由

環境問題や少子高齢化への対応など今日的な課題を抱える中で、技術・家庭科としては「豊かな生活を創造する能力と実践的な態度」を育てることを目標としている。「豊かな生活」とは、「自分のみならず社会全体が安全で健康に過ごすために適切な行動をとる生活」のことであるととらえ、その実現に向けて気持ちが前向きであると共に、実践に移せる力を備えることが大切であると考えた。

しかし、「豊かな生活」を創造し実践するためには、授業での学ぶ意欲がないと実践につながらない。そこで、授業の中で学ぶ意欲を育てるために、豊かな体験を通して生徒の興味関心を高め、さらに豊かな生活実現に向けての意欲へと発展させたいと考え、この主題を設定した。

3　実践の内容

(1) ねらいを明確にした授業

1) 技術分野

・ 1 時間の授業を受けたことで、何がどうできるようになったら達成できたことになるのかを、授業の始めに生徒に明確に伝えた。できるだけ具体的な事項で伝えるように心がけ、授業中いつでもめあてを確認できるよう板書や掲示を行った。

・ワークシートでは本時のねらいを最初に生徒自身が記入してから、授業を進めた。

2) 家庭分野

・授業の始めに本時のねらいを必ず明示して授業を進めるようにした。黒板にも必ず明示するように心がけた。

・ワークシートも本時のねらいがわかるように工夫した。特に 1 年生の授業では半年という長い期間食物の学習に取り組むので、半年の見通しも持てるようにした。

(2) 主題にせまるための工夫

1) 協同学習

① 技術分野　全学年で協同学習の考え方を取り入れ授業を展開した。

1 年生：「コンピュータの利用」に関する授業は一人 1 台のコンピュータを操作するので、個人活動が多くなり、コンピュータが得意な生徒と苦手な生徒の差が授業が進むほど広がる傾向にあった。そこで 4、5 人のグループを編成し、「グループ全員ができるまでたとえ自分ができていても次の課題へいかない」「わからないことはまずグループ内で解決」という基本ルールを定め、みんなで高め合っていく雰囲気を大切にして授業を行った。

2 年生：「ものづくり」の授業では、正しい工具の使い方、正確な作業を徹底するためにペアによる相互評価を行った。相互評価票を使い、定められたチェック項目を確認し合い、アドバイ

スを与えた。意図的に男女のペアを作った（異質集団の編成）。

3 年生：「エネルギー変換とその利用」では問題解決型の授業を展開し、グループで話し合う機会を設けた。その際、グループの中での役割分担を明確にし、全員必ず話し合いに参加するようにした。生徒へ「班の誰があてられても、説明できるように準備しなさい」と指示し、理解が遅い生徒へグループ内で教え合う仕掛けを行った。

② 家庭分野　全学年を通して協同学習に取り組み、特に 1 年生の学習では多く取り入れた。

1 年生：食物学習を通しての授業なので、一人で学習を進めることより、ペアやグループで進めていく授業を多く取り入れた。例えば、食品あてクイズでは自分で資料を使いながらクイズに挑戦していった後で、発展学習としてクイズを作り、それをグループで発表し合う授業を行った。このような学習では、生徒は意欲的に参加したり、もっと作ってみようとしたりしていた。また、自分でオリジナル野菜料理を計画する際に、友だちのアドバイスを参考にする授業も行った。

2 年生：衣生活の実習を中心に協同学習を取り入れた。実習は 4 人グループで行い、そのグループで教え合いながら作業を進めていった。

3 年生：保育学習では、2 人または 4 人グループで取り組むことが多かった。これは幼児の成長や観察などの授業を中心に行った。

2） 家庭での実践と結びつけた取り組み

学習した内容を実生活に生かすことができなければ学習した内容が定着しないと考え、なるべく家庭でも実践できるように工夫した。たとえば、『学びくん』に「家庭での実践」という項目を設け、「やってみよう」「調べてみよう」「聞いてみよう」の三つを家庭で実践できるようにした。技術・家庭科ではこれを家庭学習ととらえることにした。

また、家庭分野の食物では包丁名人カードを持たせ、家庭で意欲的に数多くの実践ができるようにした。

技術分野の機器の仕組みと保守点検では、安全点検カードを持たせ、家庭での安全点検を実施させ、家族へ点検報告を行いコメントをもらった。

3)学ぶ意欲が高まる体験

技術・家庭科の学習では、単に知識理解だけでは実際の生活に生かせない。そこで、体験を授業の中に多く取り入れるようにした。体験とは必ずしも実験や実習などといった大きなものを指すのではなく、簡単に授業でできるものでなければなかなか授業に取り入れることはできない。そこで、なるべく簡単にできる体験を取り入れるようにした。このことで、授業での興味関心が高まり、学ぶ意欲が高まると考えた。

① 技術分野

1 年生：生活の中のコンピュータ探し、コンピュータ被害体験（ロールプレイング）。

2 年生：材料特性クイズ＆実験、人間工学体験、ねじ作り体験、生産者責任実習。

3 年生：エネルギー変換実験、回路設計（問題解決型学習）、実験で用いた部品をもとにした製作品の製作。

②家庭分野

1 年生：食生活チェック、食品概量の把握、ビタミン・たんぱく質検出実験など。

2 年生：衣生活チェック、繊維の性質実験、表示調べ、通風実験、住空間チェックなど。

3 年生：私の好きだったもの調べ、母子手帳からの調査、体のつり合い実験、幼児の観察など。

4　成果

1）協同学習の考え方を取り入れたことで学ぶ意欲が高まり、次の成果が得られた。

① 技術分野

1 年生　：コンピュータを使った学習では、従来あった技能面での力の差が大きいといった問題が改善した。コンピュータの操作が苦手で一人での学習では、意欲が低下していた生徒も、友だちからの教えてもらうことで意欲的に活動するようになった。

2 年生：ペアでの学習は以前から実施していたが、本年度は、新たに男女混合でのペアを作り活動を行った。ものづくりが好きで意欲がある男子に引き上げられる形で、女子の意欲が向上した例が多く見られた。

3 年生：電気やエネルギーといった目に見えないものを扱った内容で意欲の低下が懸念されたが、グループで実験や実習に取り組んだ結果意欲の低下を押さえることができた。

②家庭分野

1 年生：食物学習を通して授業を進めてきた。その関係でグループで学習を進めることが多かった。グループの形態は 2 人、4 人と様々であったが、「オリジナル野菜料理にチャレンジしよう」という単元でのアンケートからは、「オリジナル野菜料理の計画では、友だちのアドバイスが参考になりましたか」という質問に 98%が参考になったと答え、「友だちのアドバイスを参考に計画を見直しましたか」という質問には 100%の生徒が見直したと答えている。このことから協同で進める授業では個々へのアドバイスが多くみられ、アドバイスを参考に自分の計画を進めていった生徒が多かったものと思われる。食物の学習ではこのような友だちのアドバイスを活用した授業が効果的であったと考えている。

2 年生：衣生活の実習の際に男女混合 4 人グループで取り組んだ。このグループ編成は 8 時間の実習の間ずっと同じメンバーのため、友だちとのコミュニケーションを多くとらないと作業が進まないこともあって、各グループなるべくコミュニケーションをとるよう努力していた。

3 年生：保育の学習では、母子手帳を 2 人で調査したり、幼児の体のつり合いを 2 人で計ったり、幼児にとっての家庭環境をグループで話し合ったりしたが、話し合いが盛り上がり時間内で終わらないほどだったクラスもあり、意欲的に考えられる場面となった。

2）意欲を高める体験を多く取り入れた授業を行った結果、終業後の生徒の感想の中には「実際にやってみると」「意外に」「思っていたより」といった語句が多く、始めの体験への驚きや感動が多くあったと感じられた。

技術科の感想　エネルギー消費量が多いとか少ないとかは言葉では分かりにくいけど、豆電球と発光ダイオードを使って実験してみると、その差がハンドルの重さとして実感できて分かりやすかった。早く作ってみたい。(3 年生)

家庭科の感想　食品あてクイズを作ってみて、おもしろいクイズがたくさんあったのでとっても楽しかった。わたしのクイズはすぐにあてられてしまったけど、なかなかわからない問題を作った人もいてすごいなあと思った。(1 年生)

3）家庭での実践と結びつけた取り組み

家で実践することができるように、『学びくん』の「家庭での実践」の中で、家の人に聞いたり、食事の準備や実践を行ったり、調べてみたりする項目を設けたおかげで、「実践してみよう」

という気持ちが高まった。

技術科では、機器の仕組みと保守点検で安全点検カードを持たせ、授業で学習したことを生かし、コンセントの配線やトラッキング現象への対策など、家族への具体的な提言ができた。また、エネルギー変換とその利用ではエネルギーを有効に活用する視点を持ち、電気製品を購入する際に消費電力の違いを注意して商品を選ぶ生徒が大幅に増えた。

家庭科では包丁名人カードを持たせたことで、家での包丁使用率が急激に上がり、家庭で包丁を持ったことがない生徒はいなくなった。意欲が大幅に上がり、調理することがあたり前のようになることで授業への自信にもつながった。頑張っている生徒は 50 回以上の実践を行っていた。

5. 今後の課題

『学びくん』では「家庭での実践」という項目を活用させたいと考え、授業で学習したことを家庭生活に生かせるように工夫した。しかし「家庭での実践」の項目では活用できたが、授業での活用をもっと工夫すべきだと思った。例えば、授業開始の時に必ず使用するとか単元の始めに『学びくん』を使って見通すなど、全学年で徹底することが必要だったと思う。

また、工夫・創造する力を評価する授業は限られているので、ワークシートの感想で評価する以外での評価を考えていきたい。

研究発表会公開授業指導案

第 3 学年 1 組　技術・家庭科学習指導案

指導者　　加藤　丈司

1　題材名

ダイナモ・コンデンサ・ライトの製作

2　題材の目標

(1) 関心・意欲・態度

ダイナモ・コンデンサ・ライトの製作を通じて、エネルギーの変換と利用について関心をもち、エネルギーを有効活用していこうとする。

(2) 工夫・創造

エネルギー変換実験やダイナモ・コンデンサ・ライトの製作などの体験活動を通じて、課題をみつけ、その解決をめざして工夫する力を身につける。

(3) 生活の技能

目的の回路を構成して実験を行う技能や、ダイナモ・コンデンサ・ライトを配線、組み立て完成させる技能を身につける。

(4) 知識・理解

ダイナモ・コンデンサ・ライトの基本的な回路や、各部品の働きを理解するとともに、エネルギー変換の仕組みや効率について理解する。

3　指導にあたって

（1）教材観

子ども達はあたりまえのように電気を始めとした様々なエネルギーを消費し、快適な生活を送っている。近年、エネルギーの大量消費による地球温暖化問題や災害による大停電なども起こっているが、子ども達はエネルギーの重要さを生活の中で実感できていない。

そこで、本題材ではエネルギーの有効利用のために、日常生活でどのようにすればいいか考え、実践する態度の育成をねらいとしている。いろいろな実験での体験を通して、電気エネルギーの発生に理解を深め、発光ダイオードなどの電子部品に興味・関心が高まり、身につけた力を生活の中で実践できるように指導していきたい。

（2）生徒観

本校は「いしかわ学校版　環境ＩＳＯ」に認定され、学校ぐるみで環境へ配慮する取り組みを実施しており、環境への意識は高い。事前アンケートでは「酸性雨」「地球温暖化」「クリーンエネルギー」の３つの環境問題に関するキーワードを具体的に説明させたところ、約７割の生徒がすべて説明することができた。一方、「生活の中で環境に配慮した行動を心がけているか」という問いに対しては、肯定的な回答をした生徒は６割にとどまった。また、電気製品を購入する際、「価格」「デザイン」「消費電力」「性能」の４つのポイントをどのように優先順位をつけるか質問したところ、「消費電力」の優先順位を最下位とした生徒が４割もいた。以上の結果から、本題材の学習では、理科等の学習を通じて身につけた力をさらに高め、より実践的な態度を育む必要がある。

（3）指導観

題材の目標を実現するために、次の３つを中心に進めることにした。

① 問題解決的な学習の導入：製作に必要な実際の回路を考える活動の中で、課題を発見し、その解決をめざして工夫する活動を取り入れた。

② 実践的・体験学習の工夫：単なる製作活動にとどまらず、ダイナモ・コンデンサ・ライトの製作に必要な各部品の働きや回路の構成を調べる体験活動を取り入れた。

③ 学習形態の工夫　：協同学習の理論を取り入れ、クラス全員が課題を理解するのが最終目標であることを、生徒に強く意識させ、教え合い、学び合いの活動を積極的に取り入れた。授業展開の中でグループ学習、ペア学習を多く導入した。

4　題材の指導・評価計画（総時間 17 時間）

次	小題材名及び目標	主な学習活動	関心・意欲・態度	工夫・創造	生活の技能	知識・理解
一 5 時間	〔エネルギーについて理解を深	・エネルギーがどのように使わ	・自然界のエネルギーやエネル	・エネルギーの重要性に気		

	めよう〕 生活の中でエネルギーが果たす役割を考える。	れているのかを調べる	ギーの生活への係わりについて、進んで発表しようとする。	づき、生活を改善策を提案できる。		
	エネルギー変換のしくみとその実用性について考える。	・エネルギーとその変換の意味について調べる。	・生活の中でのエネルギーの利用方法を考え出そうとしている。			・電気エネルギーを他のエネルギーに変換する目的を理解し、分類できる。
	ギヤ比について知る。	・ハンドル付きギアボックスとプロペラ付きモータで、発電量の比較実験をする。	・電気エネルギーの変換実験に関心を持ち、実験に取り組んでいる。		・実験器具を適切に取り扱い正確に発電量の測定ができる。	
	太陽電池発電の特徴について知る。	・ハンドル付きギアボックスと太陽電池で発電量を比較する。	・エネルギーの変換実験に関心を持ち、実験に取り組んでいる。	・太陽光発電実用化にむけての課題を考えることができる。		
	電気を光や音、動力に変換する仕組みについて知る。	・電球、発光ダイオード、ブザー、モータによるエネルギー変換実験をする。	・エネルギーの変換実験に関心を持ち、実験に取り組んでいる。		・実験器具を適切に取り扱い、正確に配線し、エネルギーを変換できる。	・エネルギーの変換の仕組みを、実験を通じて理解できる。
二 4時間	〔ダイナモ・コンデンサ・ライトのしくみを知ろう〕 発光ダイオードの特性を実験により理解する。	・電球とＬＥＤの違いについて極性や消費電力の違いを中心に実験で調べる。	・実験で、発光ダイオードの特徴を進んで調べようとしている。			・発光ダイオードの特徴を理解し、説明することができる。
	大容量コンデンサの特性について実験を通して理解する。	・大容量コンデンサの特徴を、蓄電池との比較実験で調べる。	・大容量コンデンサの特徴を進んで調べようとする。			・充電電池の特徴を理解し、説明できる。
	逆流防止ダイオ	・逆流防止ダイ	・ダイナモコン	・基本回路実		

	ードの特性について実験を通し理解する。 （本時）	オードの働きとその役割について実験により調べる。	デンサライトの回路実験に取り組み、結果を進んでまとめようとしている。	験での課題をみつけその解決をめざして回路を考え工夫している。		
	ダイナモコンデンサライトの基本回路について理解する	・ダイナモコンデンサライトの基本回路を構成し点灯実験をする。	・どこにスイッチを組み込めばよいか調べようとしている。			・ダイナモコンデンサライトの基本回路を理解し、説明できる。
三 6時間	〔ダイナモ・コンデンサ・ライトを製作しよう〕 ・はんだごてや工具を用いて安全に正確な配線作業ができる。 ・工具や工作機械を使い正確に作業を行うことがきる。	回路と部品を確認する。 ・ダイナモコンデンサライトの各部品をはんだを用いて配線する。 ・ケースの加工とケースへの部品の組み込みを行う。	・安全に留意し意欲的に製作に取り組んでいる	・製作品が目的の動きをしない時にその原因を追究し製作品の検討および修正をしている。	・工具や工作機械を適切に取り扱い、安全に留意し、正確に回路の配線やケースへの組み込みなどの作業ができる。	
四 2時間	〔エネルギーの有効を考えよう〕 ・これからの生活とエネルギー変換について考えを深める。	・エネルギー利用に関連する問題点や課題を調べそれについての意見を持つ。 ・単元を振り返り自己評価する。	・省エネルギーの必要性とその工夫について考えを深めようとしている。 ・地球温暖化について知ろうとしている。	・他の人の発表を聞き、自分の考えの改善につなげて考えることができる。		・エネルギーの有効利用や地球温暖化への自分の考えを説明できる

5　本時の学習

(1) 小題材名　　「ダイナモ・コンデンサ・ライトの仕組みを知ろう」（本時 3／4）

(2) 本時のねらい

ダイナモ・コンデンサ・ライトの回路を考える活動を通して課題をみつけ、その解決をめざして意欲的に、回路を工夫することができる。

(3) 準備・資料など

実験器具（ダイナモ、大容量コンデンサ、発光ダイオード、逆流防止ダイオード、導線）、実体配線装置、プロジェクタ、パソコン。

(4) 展開

過程 時間	学習活動	指導上の留意点	評価（観点、方法等）
導 入 5 分	・前時を振り返る。	・前時の実験を VTR を用いて確認させる。	
展 開 40 分	・課題をつかむ。 〈今日の課題〉**ダイナモ・コンデンサ・ライトに必要な回路を考え出そう。** 〈個人思考〉 ・ワークシートに自分の考えを記入する。 〈実験〉 ・グループでダイナモ、大容量コンデンサ、発光ダイオードを接続して、発光ダイオードの点灯のようすを観察する。 〈課題の発見〉 ・発電をやめハンドルから手をはなすと、発光ダイオードが消え、ハンドルが勝手に回ってしまうことに気づく。 ・大容量コンデンサに蓄えられた電気がダイナモへ逆流していることを知る。 〈発問〉どうしたら問題を解決できるか。 〈個人思考〉 ・ワークシートへ自分の考えを記入する。 〈グループで話し合い〉 〈実験〉 ・グループで考えた方法を実際に実験で確かめてみる。 （発表） ・問題を解決できたグループは発表する。 （実験） ・実際に用いられている回路を確認し回路を作成してみる。	・アニメーションで、電流の流れを視覚的に理解させる。 ①発電した電気をコンデンサにためる。 ②コンデンサにためた電気を使って発光ダイオードを光らせる。 ③①②を1つの回路で実現する。 ・順をおって課題をつかませるようにする。 ☆各部品の極性について注意するように伝える。 ☆うまく接続できないグループへ個別に助言する。 ・回路ができあがってもすぐに実験を始めさせず、すべてのｸﾞﾙｰﾌﾟが準備完了後一斉に実験させる。 ・実体配線装置を用い、実験結果をおさえる。 ・アニメーションで、電流の流れを視覚的に理解させる。 ・始めに考えた回路はあと一歩のところまでできていることを伝え、並列つなぎの配線は変えさせないようにする。 ○1つ解決策を考えられたら他の方法も考えさせる。 ・必要であれば、新たな部品を用いても良いことを伝える ・実験で確認させる。 ・問題を解決したグループに発表させる。 ・実際に、製作品の回路を提示し確認させる	【関心・意欲・態度】 ダイナモコンデンサライトの基本回路実験に意欲的に取り組み結果をまとめようとしている。 〔ワークシート、観察〕 【工夫・創造】 ダ基本回路実験における課題をみつけ、その解決をめざして回路を考え、工夫している。 〔ワークシート、観察〕
ま と め 5分	本時のまとめをする。 ・自己評価をし次時の予告を聞く。		

☆：努力を要すると判断される状況の生徒への支援

○：ねらいを達成したと判断される状況の生徒への支援

(5) 意欲を引き出す工夫

・グループ活動では役割分担させ、全員が実験活動にも参加できるようにした。

・「うまくいきそうな回路がうまくいかない」という失敗を体験させ、生徒の「なぜだろう」、「不思議だ」という気持ちを引き出し、問題解決の意欲へつなげた。

・自己評価活動を取り入れ、自己の学習の高まりを確認し、次の学習の意欲につながる手だてとした。

研究発表会公開授業指導案

第１学年４組　技術・家庭科学習指導案

指導者　　久坂　早苗

1　題材名

オリジナル料理で野菜を食べよう

2　題材の目標

(1) 関心・意欲・態度

野菜の摂取量や調理について関心を持って実験や調理実習に取り組み、食生活をよりよくしようとする。

(2) 工夫・創造

野菜の摂取量や調理について課題をみつけ、その解決をめざして工夫する。

(3) 生活の技能

野菜を適切に選択し、調理用具を安全で衛生的に取扱い、野菜の調理ができる。

(4) 知識・理解

野菜の選択と調理上の性質、調理の要点、調理用具や調理用熱源の安全で衛生的な取り扱いを理解する。

3　指導にあたって

(1) 教材観

本題材では、中学生が一日に必要な野菜の量を把握し、自分の野菜のとり方の課題を見つけ、その解決に向けて野菜が摂れる料理を自ら考え工夫し、調理することで食生活をよりよくしようとする態度を身につけることをねらいとしている。

現在の中学生は、自分の食生活を考えたり振り返ってみたりすることはほとんどなく、おとなに頼り切っているのが現状である。また、食事は好き嫌いが多く、好きなものだけ多く食べると言った傾向もみられる。そんな子ども達に、毎日の食事の中で野菜を必要な量とることの大切さを学ばせることは大変重要なことである。特に中学生の時期には、その基礎となる知識や能力を

身につけ、日常生活に生かそうとする意欲や態度を育成することが大切である。実生活と密着した学習を進めるためにも、野菜をたくさん食べる食事を自ら整えることができようにすることをめざしてこの題材を進めていきたい。

(2) 生徒観

アンケートからこのクラスには野菜嫌いの生徒が 42%いることがわかった。しかし、給食などで野菜を残したり全く食べないというのはいけないとは感じているようである。また、家庭で調理を行ったり食事を整えたりする生徒は大変少ない。自分の食事について考えなければいけないと思っている生徒もいるが、まだそこまで考えられない現状である。

生徒は野菜のとり方では「一日 5 皿（5 A DAY）」ということを今までに学習したり、調理上の性質について調べたりして量の感覚を実感している。この授業では、生徒がこれらの学習で学んだことを生かしてさらに自分の課題を解決できるようにしたい。

(3) 指導観

題材の目標を実現するために、次の 3 つを中心に進めることにした。

① 問題解決的な学習の導入：自分の野菜の摂り方の課題を考え、それを解決するための学習を取り入れた。

② 実践的・体験学習の工夫：自分の野菜の摂り方の課題を見つけたり、野菜をたくさん摂る調理方法や料理の工夫について　考え、オリジナル野菜料理の調理計画をたてたりするために、次のような体験を取り入れた。

・料理と結びつけて 1 皿（70～80 グラム）の野菜の概量を実物で把握したり、1 日に必要な野菜の概量を把握したりする体験。

・野菜を加熱するとかさが減り、食べやすくなることを実感する体験。

・小学校での既習の知識や技能を応用した調理の体験。

③ 学習形態の工夫：オリジナル野菜料理の調理計画では生徒が関心をもって取り組み、他の人の意見やアドバイスを生かせるようにするために、グループの話し合いとペアの話し合いを組み合わせて進めていく。

4　題材の指導・評価計画（総時数　7 時間）

次 (時)	小題材名および目標	主な学習活動	生活や技術への関心・意欲・態度	生活を工夫し、創造する能力	生活の技能	生活や技術についての知識・理解
一 1 時間	〔1 日にどのくらい野菜を食べたらよいのだろう〕 ○1 日に必要な野菜の概	・中学生の 1 日の食事例に使われている野菜の量を食品群別摂取量のめやすと比較する ・1 皿（1 料理）に 70～80 g の野菜が使わ	・1 日に必要な野菜の量に関心をもって、食事例の野菜の量を調べ、自分の食事と関わらせ			・1 日に必要な野菜の概量が分かる。（ワークシート・自己評価）

	量を実物の食品で　計量し、実際に食べる量として把握することができる。	れ､1 日に 5 皿必要なことを確認する。 ･1 日の食事例にある野菜料理をグループで 1 皿ずつ実物の野菜を用い計量する。 ・自分の食事と関わらせて考える	て考えようとしている。(行動観察・ワーク　シート)			
二 1 時間	〔野菜の調理上の性質を知ろう〕 ○野菜の調理上の性質を理解し、自分の食事とかかわらせて野菜の摂り方を考えられる。	・野菜の調理上の性質について実験により調べる。 ・実験結果から気づいたことをまとめ、発表する。 ・野菜の調理上の性質を確認する。 ・自分の食事と関わらせて野菜の摂り方を考える。	・野菜の調理上の性質に関心を持ち調理実験に取り組み、自分の食事と関わらせて野菜の摂り方を考えようとする。（行動観察・ワークシート）			・野菜の調理の性質について説明できる。(ペーパーテスト・ワークシート)
三 5 時間	〔オリジナル野菜料理にチャレンジしよう〕 ○調理用具や熱源の安全で衛生的な扱い方を理解する。	・ビデオ（調理室の使い方）を視聴し、調理用具や熱源の安全で衛生的な使い方についてまとめる。 ・薩摩汁の作り方と野菜の選び方を確認する。 ･2 人 1 組で包丁の使い方を確認する。 ・グループで薩摩汁を作る。			・調理用具を安全に取り扱い、基本的な調理操作（洗う、切る）ができる。（行動観察・相互評価）	・調理用具や調理用熱源を安全で衛生的に取り扱える。（ペーパーテスト） ・野菜の鮮度を見分ける観点を理解する。(ペーパーテスト)
	○オリジナル野菜調理とその手順を工夫し、調理の計画を立てることができる。	・野菜の摂り方について、各自の課題を確認する。 ・小学校の学習を踏まえ、野菜がたくさん摂れる調理をグループで紹介し合う。		・野菜の摂り方について課題をみつけ、その解決をめざし野菜の調理とその手	・野菜の調理の計画を立てることがでる。(ワークシート)	

		・調理に必要な手順や時間を考え、調理計画を立てる。		順を考え工夫。（ワークシート）		
	○野菜を適切に選び、調理用具を安全で衛生的に取扱い、オリジナル野菜調理を作ることができる。	・各自が調理に用いる野菜の選び方の観点を発表する。 ・調理をする。（2人1組で実践交流） ・調理 ・試食 ・後片付け・反省 ・野菜の調理の要点をまとめる。	・調理用具の安全で衛生的な扱いに関心を持ち、調理実習で実践しようとする。（行動観察） ・食生活をよりよくするために野菜を摂取しようとする。（行動観察・自己評価）		・調理に応じて適切に野菜を選択できる。（調理実習計画表） ・基本的な調理操作で野菜の調理ができる。（行動観察・相互評価）	・野菜の生食や加熱調理の要点が分かる。（ペーパーテスト）

5　本時の学習

（1）小題材名

「オリジナル野菜料理にチャレンジしよう」（本時　3／5）

（2）本時のねらい

オリジナル野菜料理の計画を工夫し、調理の計画を立てることができる。

（3）準備・資料など

ワークシート、料理カード、実物の野菜、付箋、フラッシュカード

（4）展開

過程 時間	学　習　活　動	指導上の留意点	評価（観点・方法）
導入 5分	①前時の学習を振り返り、野菜の摂り方について各自の課題を発表する。 ②本時の学習内容を知る。 「オリジナル野菜料理の計画を立てよう」	・個々の気づきを認め、励ますようにする。 ・前時の学習（野菜の調理上の性質）を生かして野菜がたくさん摂れる調理を工夫することに意欲をもたせる。	
展　開 40分	③ 各自が考えたオリジナル野菜料理（材料、調理方法）をグループで紹介し合う。	・発表の仕方を事例で示し、材料や調理方法に関心が持てるようにする。 ・前時の学習からみつけた各自のテー	

	④ 野菜の摂り方のテーマや調理にこめた思いや工夫をグループで発表する。 ⑤ 気付いたことを付箋に記入し、発表者に渡す。 ・材料（緑黄色野菜、その他の野菜） ・調理方法（ゆでる、煮る、炒める） ・色どり ・時間（25 分以内） ⑥友だちの感想やアドバイスを生かして自分の計画を見直す。 ⑦野菜の調理の計画を立てる。 ・材料の分量を記入する。 ・調理の手順を記入する。 ⑧2 人 1 組で調理計画を確認。 ・材料・分量 ・調理の手順 ・調理用具等の準備 ⑨見直した調理計画を発表。	マを確認し、支援の必要な生徒にはテーマ設定の例を示しておく。 ・個々の生徒の気づきを認めたり、話し合いの進まないところには計画を見直すポイントを再度確かめさせる。 ☆どのような野菜を用いたらよいのかわからない生徒には、野菜の写真や料理カードで調べるように促す。 ・調理の手順や必要な時間を中心に考えさせるようにする。 ☆分量については、実物の野菜で確認できるようにする。 ・確認するポイントを示す。 〇ペアの人の計画を確認し、遅れているところを手伝うよう助言する。 ・見直しにより工夫された生徒の計画を紹介し、個々の生徒の工夫を認める。	【工夫・創造】 野菜の摂り方について課題をみつけ、その解決をめざして野菜の調理とその手順を考え、工夫している。〔行動観察、ワークシート〕 【技能】 野菜の調理の計画を立てることができる。〔ワークシート〕
ま　とめ 5 分	⑩本時の学習を振り返る。 ⑪自己評価をする。 ⑩次時の予告を聞く。	・計画した野菜の調理を次時に作ることに意欲を持たせるようにする。 ・個々の気づきを認める。 ・自己評価をする上での 4 段階のおおよその目安を知らせる。	

☆：努力を要すると判断される状況の生徒への支援

〇：ねらいを達成したと判断される状況の生徒への支援

(5) 意欲を引き出す工夫

・目的意識を持たせるために自分の課題をはっきりさせる。

・グループとペアを組み合わせた協同学習を設定する。その際、発表時に、アドバイスしたことが見直しに生かされていることを認めてあげるようにする。

・達成感を自覚する場として、自己評価を工夫したい。その評価が次の実習への意欲につながるようにしたい。

英語科

1. 教科研究主題

意欲的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する活動の工夫

2. 主題設定の理由

学習指導要領における英語科の目標の１つである「外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する」ためには、文のしくみの理解や語彙の知識などの文法的な基礎力をつける必要があると考える。それは、「この場面でこんなこともいえるぞ」「ここではこんな表現がつかえるぞ」という語彙や表現の知識の蓄積があって、それが自信になってコミュニケーションへの意欲が生まれると考えるからである。また、逆にコミュニケーションへの意欲が出てくると、「こういうときはどう言えばよいか」「このことを表す単語は何か」と意欲的に学習し、基礎的な力も付いてくると考える。そこで、文のしくみを身につけさせながら、自分のことや自分の身の回りのこと、さらには、自分の思い・気持ちを表現させる活動を工夫することで、意欲的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することとした。

3 年生の 5 月の基礎学力テストではほとんどの項目で県平均を上回り、基礎的な力はついていることが分かった。しかし、「初歩的な英語を用いて自分の思いや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように書く」という問題は、通過率が県平均を上回ってはいるものの 35.5%と低かった。また、いくつかの文法的知識・理解が不十分なために通過率の低い問題もあった。そうした面からも文法のしくみを確認して身につけさせながら、自分の思いや気持ちを書くという自己表現の活動を積極的に取り入れることは必要であると考えた。

3. 実践の内容

(1) ねらいを明確にした授業

授業そのものに意欲的に取り組ませる手段として、ねらいを明確にして、生徒にその時間で何ができるようになればよいかという目標を持たせる必要がある。そこで、授業の初めにその日の目標を板書したり、プリントに書いて確認している。新文型の導入時には、ときには英文を先に聞かせて、どんなことを学ぶか考えさせてから始める場合もある。単元によっては導入時に、何について書いてあるか大まかな概要をつかませて、見通しを持たせている。

(2) 主題にせまるための工夫

意欲的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するための活動として 3 つのことを考えた。まず、文法的知識を総合的に運用し、文脈の中で伝えたい情報を理解できることをめざし、聞き取りの力をつける活動を考えた。また、英語によるＱ＆Ａの活動を日常的に取り入れることで、自分達のことを表現し合うことに慣れることをめざした。つぎに、文のしくみを身につけて、自己表現が意欲的にできるような活動を工夫することを考えた。

1) 聞き取りの力をつけるための活動

まず、教師が英語を使う場面を多くし、生徒に英語を聞くことに慣れさせることにし

た。また、新しいセクションで大まかな内容を英語で聞かせたあとに、リスニングポイントを示して、ナチュラルスピードで英語を聞かせ、できるだけ聞き取らせるようにした。 1 文 1 文を聞いて理解するのではなく、文脈も取らせるためである。1 年生は、短い文なので、速いスピードだがだんだん慣れて聞き取れるようになってきた。3 年生は、テーマも難しく文も長く聞き取りも難しいが、リスニングポイントがヒントになるように工夫し取り組ませている。

1 年生の Unit 5 (1) のハンバーガーショップでの会話をした後に、ちょうどＡＬＴとの授業があったので、聞き取りの工夫をしてみた。

＊まず、ファーストフードでの会話で別の表現を教えてもらった。
　アイスクリームを注文する cup or cone と聞かれること。
　フライドポテトを注文するときは　1 つだったら some French fries
　　2 つだったら two French fries
　持ち帰りの場合 to take out　や to take away の表現もあること。
　注文するときに　Can(May) I have ～?　ということ。
＊つぎに、4 人グループになって ALT の店で注文する品を決め、セリフを分担するように指示した。
　① ハンバーガーやフライドポテト、飲み物類を注文する
　② Large or small やFor here or to go (take ourt / take away) に対応する。
　③ anything else？（他には？）と聞かれたら、アイスクリームを注文する。
　④ 値段を言われたら、日本語で言ってから Here you are. とお金を差し出す。
＊グループで買い物に行き、ALT と会話をするように指示した。

ＡＬＴ は、売り切れだと言ったり、①から③を順不同に言ったりするので、生徒は一生懸命聞いて対応していた。また、値段が聞き取れず、もう一度というので、Pardon? と聞き返すようにさせた。その他の生徒には会話をしているグループの注文した物と値段をメモさせので、他のグループの会話も課題を持って聞くことができた。

2) BERA　BERA CONVERSATION の導入

基本文型を定着させるための方法として、昨年は 2 単元ごとに基本文型や単語を復習するために“BERA BERA SHEET”を使って、音読練習、暗誦、を行い、その後、小テストを行っていたが、今年はそれを発展させて、Ｑ＆Ａの形の対話“BERA BERA CONVERSATION”にして、日常的に使えるような形にした。1 年生では、教科書の登場人物になって答えを言うことに慣れてから、自分の答えを言うように工夫してみた。

（参考資料 1：本稿末に掲載）質問によって、You are Ms. Green. や You are yourself. 等、誰になるかを指定して答えさせると繰り返し練習しても飽きずにすることができた。教師対生徒ばかりではなく、生徒対生徒で warm-up にさせることですべての生徒が新文型を使った対話をする機会を設けることができた。

3) 意欲的に自己表現活動に取り組ませる工夫

新文型を使った自己表現活動に取り組ませるときに、新文型を紹介してドリル練習をするときから自己表現につながるような文型練習をさせることにした。後から使えるような動詞を含めたり、状況を提示したりして練習し、自分ですぐに思いつかない生徒の手助けになるようにした。（参考資料 2：本稿末参照）

さらに、新文型を使って自分のことや自分の考えを述べるときに、自分で文を作った

後に、グループで発表し、その中からなるほどと思ったり、おもしろいと思ったものを選び、クラスのみんなにも発表することにした（参考資料３：本稿末参照）。その中から自分でいいと思ったものをメモさせることにした。自分のことをうまく表すことのできなかった生徒も友だちに作品を書くことで、どう表現すればよいかを学ぶことができると考えたのである。

自己表現したものを発表し合うことで、友だちの個性やその人の考えを知ったり、友だちの作品に感心したりすることで、クラスの友だちのことをより理解できるようになるし、いいものを共有することでお互いに高め合うこともできるのではないかと考えたからである。つまり、自己表現活動で協同学習をめざしたのである。

こうした活動をしてみると、こちらが想像していたより多様な文がでてきて少しずつだが、自己表現を楽しめる雰囲気がでてきた。3 年生 Program5(1)の ask(tell) 人 to ～の文型でお母さんによく言われることを書かせた例を下にあげる。

Mother always tells me to take care of the turtle.
Mother always tells me to eat vegetables.
Mother always tells me not to watch TV for more than an hour.
Mother sometimes tells me to go back home early.
Mother always tells me to study English hard.
My grandmother tells me not to use money so much.
My brother tells me to get out of his room.
My grandfather often tells me to eat more.

4) 家庭学習について

1 学期の『学びくん』の内容は、前年度のうちに作成されたものであり、今年度は英語担当の教員が変わったことで、実際に生徒に活用させていくという点では難しいところもあった。そこで、2 学期の『学びくん』を作成するにあたって、生徒の 1 学期の学習の取り組み状況を考慮し、また、担当教員の授業スタイルに合うように項目や内容を変更することにした。生徒にも予習・復習に積極的に活用するように呼びかけている。単元の学習が始まる前に、『学びくん』でその単元ですることや目標とすることを読んで来ること、また、単元が終わった後や定期テスト前に『学びくん』の学習項目の理解度をチェックさせ、復習に役立てることにした。

日常の家庭学習で単語練習や本文練習を課題にすることに加え、1 年生では、夏休みに音読・暗記を家の人に聞いてもらいコメントを書いてもらう課題を出した。

家の人の都合がつかない場合は、親戚・先輩・先生でもいいとしておいたが、大部分の生徒は家の人に聞いてもらっていたようである。誰かに聞いてもらうことで、よりよく読もうという気持ちが出て、励みになったのではないだろうか。

(3) 評価の工夫

自己表現をさせてクラス全体に発表するときに、グループで 1 つ代表者を選ぶということは、友だちから評価されるということである。4～5 人のグループを作るので、気楽に発表できるが友だちに聞かせるのでよりよいものを考えようとするようになった。また、1 年生に自己紹介をさせたり、3 年生にグループで Program4 の物語の群読をさせたときには、色々な評価項

目をもうけて相互評価をさせながら聞かせた。友だちに評価されるという面と、聞く側にも課題があるので考えながら聞くことができた。英作文を書かせたときに、上手に書けた作文を集めて通信にしてみんなに紹介することも評価の一つである。良いものはこんなものだという見本にもなり、さらに良い文を作る工夫をしようという意欲につながると思われる。

4　成果

今年の1年生は、4月当初から英語の学習に難色を示す生徒が例年になく多く、英語は苦手だからとか、難しいからという反応があった。5 月当初に実施したアンケートでも、英語が好き 71.8%、英語の授業がよく分かる 78.2%であった。アルファベットと簡単なあいさつぐらいしかしていないので、1年生のこの時期では、楽しいという反応がもっと多いと思っていたので、意外に感じた。理科が好き 78.2%、よく分かる 83.6%や数学が好き 80.9%、よく分かる 95.4%と比べると英語の学習に抵抗を感じている生徒が多いことが分かる。小学校の先生にお聞きしたときも、「表現が苦手なので分かるような気がします」とのことだった。

ところが、1学期7月に実施したアンケートでは、楽しく取り組めた 74.6%、理解できた 86.5%と少し前向きに回答した生徒が多くなった。クラスによっては、楽しく取り組めた 85.7%、理解できた 92.9%と、意欲的に学習し、分かったという達成感を持った生徒が少しずつだが増えてきている。

10 月初めにＡＬＴの先生が見えて、自己紹介とその True or False ゲーム、そして、ハンバーガーショップに買い物に行く活動をした。ちょうど稚松小学校で英語活動をしていただいた先生であったので、新鮮味がないかと思ったが、1クラスだけ授業後に感想を書いてもらったところ、「小学校のときもこういうふうなお話をきいたことはあったけれど、あんまりよく意味が分からなかった。でも、今日聞いたことがある言葉が出てきて、聞いていて楽しかった」「速くて分かりにくかったけど、落ち着いて聞いたら分かったのでよかった」「クィバーさんの自己紹介はとてもよく分かった！！すごく今日の授業は楽しかった」などとあり、「分かって楽しかった」のような肯定的意見が 83%（その他、「あまり聞き取れなかったけど楽しかった」「簡単なのは分かったけれど、難しいのは分からなかった」「よく分からなかった」）で、ほとんどの生徒が4月からの学習の成果を実感することができた。

自己表現の活動の際に、グループで面白いものを選んで発表してもらっている過程で、友だちの文を聞いて、家の人に言われていることを思い出したのか、「時々言われるときは何と言えばよいのか」や「今までに言われたことがない」ときはどう言えばよいのかと、質問が出てきた。新文型の練習というより、そういう状況を表すにはどうしたらよいかというように、より実践的に作文することができたように思う。また、今までに言われたことがないときは、“Mother has never told me to ～. ” が使えることを説明したが、現在完了が実感としてとらえられたのではないだろうか。つまり、文型から文を作るのではなく、こんな場合どの文型を使えば表現できるかの発想ができるということだ。

さらには、授業が終わったあとに、黒板に思いついた英文を書いて楽しんでいる生徒までいて、このように自己表現の活動を工夫することが意欲的にコミュニケーション活動をしようとする態度を作る契機になることが確かめられた。

1年生は、家庭学習として教科書の単語練習や本文練習を課題としたが、教科書をそのまま写すだけなのに、最初は間違いだらけの単語や文を書く生徒も多く、視写に慣れていない状態は驚

くほどだった。また、覚えるまで練習することに慣れていない生徒もいて、時間もかかるようであった。しかし、だんだん慣れてきて、2学期には間違いも少なくなってきたし、短時間で書けるようになってきた。

5　今後の課題

1年生では、少しずつだが楽しい、分かると思う生徒が増えているが、自己紹介をさせると I like English. と好きな教科に英語を選ぶ生徒は1クラスに2人くらいである。また、英語が好きではない理由として、覚えなくてならないからという生徒もいる。繰り返しの練習をあまり好まない生徒に、どのようにしたら意欲的に単語を覚えて新文型を使った文が書けるようになるか、さらに活動の工夫をしなければならない。

“BERA BERA CONVERCATION” は、10分を目標に授業に取り入れているが、小テストをしたり、定期テスト前で次に進みたいときなどできないときもある。また、逆に、時間を区切って要領よくやらないと教科書が進まないということになるので、意識して1時間のプランの中に入れて進めないと難しい。また、学年が上がって文の構造が複雑になるにつれて、日本語から覚えて英語を言うことがなかなかできない生徒が増えるので、できるだけ覚えやすい文例や使い慣れた単語を使用するようにしたい。

自己表現をグループで発表させて選ばせ、クラスでいいものを発表させる活動は、友だちの工夫した発表を聞いて自分ももっと作ってみようという意欲を高めるが、全体で同じ課題に取り組ませることになる。同時に習熟度の高い生徒にさらに複雑な文を作らせたり英作が苦手で敬遠していた生徒に自分でも作れるという思いをさせる協同学習の活動の工夫が必要ある。

また、自己表現につながる新文型のドリル練習や自己表現活動のグループ活動の工夫は、始めたばかりで不十分なので、よりよい表現を促すような活動、より深い内容の自己表現ができるような活動になるようにさらなる研究が必要である。

家庭学習については、教科書の単語や文を練習する決まった内容の他に、自分達の考えや思いを書く自己表現の課題も出したいが、チェックする時間の確保も含め、今後検討していきたい。

参考資料１

Bera Bera Conversation

~ part 1 ~

1 A: Have you finished (your today's homework) yet?
B: Yes. I've already finished (today's homework).
No. I have't finished (today's homework) yet.

2 A: Have you ever used (a cellphone)?
B: Yes. I've used it before.
No. I've never used it.

3 A: How long have you (played volleyball)?
B: I've (played volleyball) for 2 years.

4 A: Have you ever been to (the U.K.)?
B: Yes. I've been there before.
No. I've never been there.

5 A: I think it's interesting (to watch TV).
How about you?
B: I think so. (Reading books) is interesting too.
I don't think so. I think (playing video games) is interesting.

1A：あなたは今日の宿題を終えてしまいましたか。
1B：はい。私はもう（今日の宿題を）終えてしまいました。
いいえ。私はまだ（今日の宿題を）終えていません。

2A：あなたは今までに携帯電話を使ったことがありますか。
2B：はい。以前使ったことがあります。
いいえ。使ったことがありません。

3A：あなたはどれくらいバレーボールをしていますか。
3B：2年間やっています。

4A；イギリスへ行ったことがありますか。
4B：はい。以前そこへ行ったことがあります。
B：いいえ。そこへ行ったことがありません。

5A：TVを見ることはおもしろいです。
あなたはどうですか。
5B：そう思います。読書もおもしろいです。
そう思いません。私はゲームをすることがおもしろいです。

参考資料２

●文型練習

(1)

Ken / clean his room

(2)

Kumi / cook lunch

(3)

Tom / open the window

(4)友達にふだん頼むことを英文で表してみよう！

(1) _____

(2) _____

(3) _____

(4) _____

参考資料３

Program 5(1)　表現活動

①あなたがいつも家の人から「～するように」、「～しないように」と言われていることを英語で表してみよう。

②書いた英文をグループで発表しよう。

③グループ内で発表した中でおもしろいものや多かったものをひとつ選んでクラスで発表しよう。

④友だちの発表したものでよかったものを書いてみよう。

《～するように》と言うとき

ex.　My mother (always) *tells* me *to* <u>use</u> chopstics well.

《～しないように》と言うとき

_____

《あなたの英文》

_____

_____

_____

《友だちが言われていること》

ex.　Katsuo's sister *tells* him *to* <u>do</u> his homework before he goes out.

_____

_____

_____

研究発表会公開授業指導案

第１学年３組　英語科学習指導案

指導者　　竹川　淳子

１　単元名

Unit 7 カナダの学校　(New Horizon English Course 1)

2　単元の目標

(1) コミュニケーションへの関心・意欲・態度

・世界の各都市の人物になって、言う言葉を色々考えようとしている。

・学校生活について自分達に合うように工夫して表現しようとしている。

(2) 表現の能力

・現在の時刻や天気についてたずねたり、それに答えたりできる。

・学校生活についてたずねたり、それに答えたりできる。

(3) 理解の能力

・ビルについての情報が聞き取れる。

・各地の時刻と天気が聞き取れる。

・カナダの中学生の学校生活について聞き取れる。

(4) 言語や文化の知識・理解

・Who...? の文と応答の形を理解し、正しく運用することができる。

・What time ...? の文と応答の形を理解し、正しく運用することができる。

・カナダの中学生の学校生活について知る。

3　指導にあたって

(1) 教材観

カナダの中学生ビルとのテレビ会議を通してカナダの学校生活について情報を得るという設定の単元である。最初にグリーン先生の弟のビルが紹介されて、次に日本とカナダの時刻や天気について情報交換し、さらに慎と絵美の質問に答えてビルがカナダの中学生の学校生活について語るという流れで、生徒はテレビ会議の疑似体験をすることができる。現在の時刻や天気について、別のところにいる人にたずねるのは自然な流れであり、時差についても実感することができるだろう。また、ビルの答えを参考にすると、自分達の学校生活について英語で紹介することが容易であり、身近な話題なので、生徒には表現してみようという意欲を持たせることができると思われる。Who...?については、Who's this boy (girl)? の質問に He (She) で答えるという形で、すでに前の単元で使っているので、ここでは正しく使えるかの確認をすることにする。

(2) 生徒観

今年の1年生は英語に関して4月当初から「苦手です」という生徒が何人もいて、5月段階のアンケートではアルファベットと簡単な自己紹介やあいさつくらいしかしていないにもかかわらず、英語が好き 71.8%、よく分かる 78.2%であった。理科が好き 78.2 %、よく分かる 83.6%、数学が好き 80.9%、よく分かる 95.4%と比べると苦手意識を持っている生徒が多いことが分かる。しかし、1学期の間にできるだけ英語を繰り返し読んだり書いたりさせたり、自己表現に取り組ませた結果、7月のアンケートでは英語が楽しい 74.6% 、理解できる 86.5% と少しずつだが意欲的に学習できる人数が増えてきた。

1 年 3 組は特に英語を読んだり、書いたりすることに苦手意識のある生徒が多いクラスであった。1 学期には、黒板を写すにも正確に写せずに、間違いだらけの文を書く生徒や英文をなかなか覚えられない生徒などがかなりいて、学び合うどころではなかった。しかし、1 学期の学習の成果か、2 学期になると英語の学習に慣れてきて、そうした生徒もしっかり英文を書こうとするようになり、やっとお互いにチェックし合えるようになってきた。また、英語を集中して聞こうとする様子も見えてきた。少しずつだが協同学習の体制ができてきたところである。

(3) 指導観

Who...? の応答や時刻、天気の応答はパターンを覚えれば容易にできるものなので、あまり難しいという意識を持たせることなく学習させることができる。英語に慣れてきた生徒にはちょうどよい教材だと思われる。学校生活についての応答は少し文も長くて、難しいと思う生徒も多いかもしれないが、意味のまとまりで区切って覚えさせて、慣れさせたい。本文を参考に自分達の学校生活について書けるようにして、Writing Plus 1 のところの学校について書く課題と合わせて、まとまった英文を書かせるようにさせたい。表現活動はできるだけグループで考えさせて、学び合いができるようにしたい。

4　単元の指導・評価計画（総時間数 8 時間）

次	小単元名及び目標	主な学習活動	関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	言語・文化の知識・理解
一 2 時間	**Part1　カナダの中学生** ・人について、誰であるかたずねたり、答えたりできる。	・ＣＤを聞いてビルについて聞き取る。 ・有名な人物について Who...?を使った対話をする。 ・ワークシートで Who...? とその答え方を復習する。	次々と人物を取り上げて、問答している。	Who...? を使って問答できる。	ビルについて聞き取れる。	Who... ? の意味と答え方を理解し、運用できる
二 2.5 時間	**Part2　今何時？** ・現在の時刻や天気についてたずねたり、答えたりすることができる。	・時刻や天気のたずね方、答え方を覚える。		時刻や天気について問答できる。	本文の内容が聞き取れる。	
		・本文を参考にテレビ会議をして、各都市の時刻や天気をたずねたり答えたりすることができる。	各都市の人物になって、言う言葉を色々考えようとする。	時刻や天気について、その都市にあわせて言える。		
		・ワークシートで時刻や天気の言い方を復習する。				時刻や天気についてたずねたり、答えたりする

						言い方を理解し使える。
三 1.5 時間	**Part3 カナダの中学校** ・学校生活（授業など）についてたずねたり、答えたりできる。	・ＣＤを聞き、カナダの中学生の学校生活について知る。 ・学校生活をたずねる言い方を覚え、自分達の学校生活について英語で表現してみる。	自分達の学校生活について色々工夫して表現しようとしている。	自分達の学校生活について英語で表現できる。	カナダの中学校について聞き取れる。	カナダと日本の中学校の違いについて理解している。
四 2 時間	**Part4 カナダの中学校** ・学校生活（放課後の活動）についてたずねたり、答えたりできる。 ・Unit 7 で学んだことを復習する。	・ＣＤを聞き、ビルの放課後している活動について知る。 放課後の活動についてたずねる言い方を覚え、自分の活動についても英語で表現してみる。 ・ワークシートで習った表現を復習する。	放課後の活動について、本文を参考に自分に合うように工夫して表現しようとしている。	自分の放課後の活動について英語で表現することができる。	ビルの放課後の活動について聞き取ることができる。	ラクロスやドリームキャッチャーについて理解している。 Unit 7 で学習した表現を理解し、使うことができる。

5　本時の学習

(1) Unit 7 (2) 今何時？（本時２ / 2.5 ）

(2) 本時のねらい

世界の各都市の人物になって、各地の時刻や天気についてテレビ会議に出て英語で質問したり、答えたりすることができる。

(3) 準備・資料など　ＣＤ、ピクチャーカード、フラッシュカード、各都市の名前のカード、ワークシート、時差のついた世界地図。

(4) 展開

過程 時間	学習活動	指導上の留意点	評価（観点、方法）
導入 10 分	①あいさつ ②Warm up：Ｑ＆Ａで今までの文型の復習をする。	・隣同士でＱ＆Ａシート(BERA BERA CONVERSATION)を使ってさせるが、Ｑの人には自分達に合わせた質問をさせ、Ａの人にはシートを見ないで答えるようにさせる。	

展開 35 分	③本文の暗誦 ・単語の意味と発音の確認をする。 ・内容を確認しながら本文を暗誦する。 ・応用表現を紹介。 ・世界各地の人になって、テレビ会議をして、時刻や天気について話し合う。 ④グループで各地の人物になって、テレビ会議をする。 ・各地の時刻や天気の言い方をグループで相談し、セリフを分担する。 ・日本のグループから質問を始め、テレビ会議をする。	・単語の確認のときに、連語や　文もリピートさせ、暗誦しやすくさせる。 ・テレビ会議で使えそうな応用表現を紹介する。 ・4～5 人のグループを作り、どの国を担当するか決めさせて、地図を見ながら時刻と天気を考えさせて、セリフを分担させる。 ☆最低限自己紹介と時刻、天候の質問と答えを、例を参考に用意させる。 〇季節にまつわる話や質問したいことなども考えさせる。 ・発言する人は立ってすることにし、他の人には各地の時刻や天気、そのグループへのコメントなどをメモさせる。 ☆分からなかったら英文を見てもよいが、顔をあげて言うようにさせる。 〇言い方やジェスチャーも考えさせる。	【関心･意欲･態度】 自分達の担当の国についてよく考えて､セリフを工夫しようとしている。〔観察・発表〕 【表現の能力】 時刻や天気について適切に質問することができる､また､答えることができる。〔発表〕
まとめ ５分	⑤各地の時刻や天気を確認する。	・メモしたワークシートをもとに、各地の時刻・天気を担当したグループ以外の人に発表させる。	

☆：努力を要すると判断される状況の生徒への支援

〇：ねらいを達成したと判断される状況の生徒への支援

(5) 意欲を引き出す工夫

・本文の復習の時に応用表現を紹介する。

・グループで１つの国を担当させ、セリフを分担させる。

・地図から自分達で時刻を計算させたり、天気を想像させたりして、その国の人になりきらせる。

・各地の時刻や天気をメモさせて、聞いているときにも課題を与える。

・他のグループの活動について、簡単なコメントを書かせる。

You are in Hawaii now .

1，ハワイでは今何時か、時差を考えて計算しよう。

今 ＿＿＿：＿＿＿

2，データから、季節やどんな気候か考えよう。

天気：曇り　最高気温：２８℃　湿度：８３％
最低気温：１９℃

3，アメリカ人になったつもりでテレビ会議にでよう。
名前例：　アン、ボブ、ジョージ、キャシー、ベス、アレン

4，テレビ会議で話す内容を考えよう。

①時間をきかれたら：Hi, I'm (　　) in Hawaii .
It's (　　) in the (　　).

②リオデジャネイロ
の人に時間をきく：Hi, I'm (　　) in Hawaii.
What time is it in (　　).

③天気をきかれたら：Hi, I'm (　　).
It's (　　) in Hawaii .

④さらにつけたしを：Hi, I'm (　　).

例　It's very hot here .　(cold , cool , warm)
It's a beautiful day .　I don't like rainy days .
It's summer here . I like summer .

⑤ロンドン
の人に天気をきく：Hi, I'm (　　) in Hawaii.
How's the weather in (　　).

You are in リオデジャネイロ Rio de Janeiro now .

1，今何時か、時差を考えて計算しよう。

今 ＿＿＿：＿＿＿

2，データから、季節やどんな気候か考えよう。

天気：曇り　最高気温：２９℃　湿度：７９％
最低気温：１７℃

3，ブラジル人になったつもりでテレビ会議にでよう。
名前例：サントロ、ディニス、スザーノ、メンデス、リラ

4，テレビ会議で話す内容を考えよう。

①時間をきかれたら：Hi, I'm (　　) in リオデジャネイロ .
It's (　　) in the (　　).

②ペキン（ベイジ ng）
の人に時間をきく：Hi, I'm (　　) in リオデジャネイロ.
What time is it in (　　).

③天気をきかれたら：Hi, I'm (　　).
It's (　　) in リオデジャネイロ .

④さらにつけたしを：Hi, I'm (　　).

例　It's very hot here .　(cold , cool , warm)
It's a beautiful day .　I don't like rainy days .
It's summer here . I like summer .

⑤シドニー
の人に天気をきく：Hi, I'm (　　) in リオデジャネイロ.
How's the weather in (　　).

You are in ペキン（Beijing） now .

1，今何時か、時差を考えて計算しよう。

今 ＿＿＿：＿＿＿

2，データから、季節やどんな気候か考えよう。

天気：晴れ　最高気温：６℃　湿度：４３％
最低気温：－３℃

3，中国人になったつもりでテレビ会議にでよう。
名前例：リー、チェン、ビビアン、ロイ、リン、ホー

4，テレビ会議で話す内容を考えよう。

①時間をきかれたら：Hi, I'm (　　) in ベイジ ng .
It's (　　) in the (　　).

②ロンドン
の人に時間をきく：Hi, I'm (　　) in ベイジ ng.
What time is it in (　　).

③天気をきかれたら：Hi, I'm (　　).
It's (　　) in ベイジ ng.

④さらにつけたしを：Hi, I'm (　　).

例　It's very hot here .　(cold , cool , warm)
It's a beautiful day .　I don't like rainy days .
It's summer here . I like summer .

⑤小松
の人に天気をきく：Hi, I'm (　　) in ペキン.
How's the weather in (　　).

You are in London now .

1，今何時か、時差を考えて計算しよう。

今 ＿＿＿：＿＿＿

2，データから、季節やどんな気候か考えよう。

天気：晴れ　最高気温：１１℃　湿度：８０％
最低気温：４℃

3，イギリス人になったつもりでテレビ会議にでよう。
名前例：リサ、エド、メアリー、トム、ジョン

4，テレビ会議で話す内容を考えよう。

①時間をきかれたら：Hi, I'm (　　) in ロンドン .
It's (　　) in the (　　).

②シドニー
の人に時間をきく：Hi, I'm (　　) in ロンドン.
What time is it in (　　).

③天気をきかれたら：Hi, I'm (　　).
It's (　　) in ロンドン.

④さらにつけたしを：Hi, I'm (　　) in ロンドン.

例　It's very hot here .　(cold , cool , warm)
It's a beautiful day .　I don't like rainy days .
It's summer here . I like summer .

⑤ペキン（ベイジ ng）
の人に天気をきく：Hi, I'm (　　) in ロンドン.
How's the weather in (　　).

You are in シドニー Sydney now .

1，今何時か、時差を考えて計算しよう。

今 ＿＿＿：＿＿＿

2，データから、季節やどんな気候か考えよう。

天気：雨　　最高気温：２２℃　湿度：７５％
最低気温：１０℃

3，オーストラリア人になったつもりでテレビ会議にでよう。
名前例：サラ、デビッド、アンソニー、ミランダ、
ジュディー、アダム

4，テレビ会議で話す内容を考えよう。

①時間をきかれたら：Hi, I'm (　　) in シドニー .
It's (　　) in the (　　).

②ハワイ
の人に時間をきく：Hi, I'm (　　) in シドニー.
What time is it in (　　).

③天気をきかれたら：Hi, I'm (　　).
It's (　　) in シドニー.

④さらにつけたしを：Hi, I'm (　　) in シドニー.

例　It's very hot here .　(cold , cool , warm)
It's a beautiful day .　I don't like rainy days .
It's summer here . I like summer .

⑤ハワイ
の人に天気をきく：Hi, I'm (　　) in シドニー.
How's the weather in (　　).

You are in 小松 now .

1，今何時？。
今 ＿＿＿：＿＿＿

2，データから、なにが言えるか考えよう。

天気：曇り　　最高気温：１３℃　湿度：　４０％
最低気温：　８℃

3，日本人の代表でテレビ会議にでよう。

4，テレビ会議で話す内容を考えよう。
〈start〉
①ハワイ
の人に時間をきく：Hi, I'm (　　) in 小松.
What time is it in (　　).

②時間をきかれたら：Hi, I'm (　　) in 小松 .
It's (　　) in the (　　).

③リオデジャネイロ
の人に天気をきく：Hi, I'm (　　) in 小松.
How's the weather in (　　).

④天気をきかれたら：Hi, I'm (　　).
It's (　　) in 小松.

⑤さらにつけたしを：Hi, I'm (　　) in 小松.

〈end〉
例　It's very hot here .　(cold , cool , warm)
It's a beautiful day today .　I don't like rainy days .
It's summer here . I like summer .
Winter is a good season for skiing.

Class　No.　Name

☆各地の時間、天気と情報を聞き取ろう。

都市名	時間	天気	つけたし	グループへのコメント

☆今日の会議をして
自分の感想や、よかった人、気づいたこと、など

[　　]

研究発表会公開授業指導案

第３学年４組　英語科学習指導案

指導者　　黒田　ゆかり

１　単元名

Program 7　Yuki in London　(Sunshine English Course 3)

２　単元の目標

(1) コミュニケーションへの関心・意欲・態度

・間接疑問を使って英語でコミュニケーション活動に意欲的に取り組むことができる。

・英語を使って道案内をするコミュニケーション活動に意欲的に取り組める。

(2) 表現の能力

・間接疑問を用いて英語で自己表現できる。

・英語による道案内で使われる語彙や表現を用いて道順を英語で説明できる。

(3) 理解の能力

・由紀のロンドンでの体験について書かれた英文を聞いたり読んだりして内容を正しく把握することができる。

(4) 言語や文化への知識・理解

・間接疑問の用法を正しく理解し、運用することができる。

・関係代名詞 who（主格）の用法を正しく理解できる。

・関係代名詞 which（主格）の用法を正しく理解できる。

・イギリスの文化について理解を深める。

・英語による道案内でよく使われる語彙や表現を理解し、運用することができる。

３　指導にあたって

(1) 教材観

本課では由紀が冬休みにロンドンへ行っていろいろな体験をする。ロンドンではロンドンアイやビッグベン、テムズ川の遊覧船などの観光地を訪れ、世界への関心を深める。２年生の時に市の交流事業に参加して実際にイギリスでホームステイを経験した生徒や海外旅行を経験した生徒にとっては本課の中の由紀の心情を容易に理解できるであろう。当時自分達がどのように感じたか、についても授業の中で取り上げたい。また、本課では映画や小説で生徒達に親しまれている『ハリー・ポッター』の話題も出てくる。生徒達は自分達がよく知っている『ハリー・ポッター』の舞台とあって興味を持って学習に取り組めると思われる。

本課では〈主語＋動詞＋疑問詞節〉、間接疑問を導入する。ここでは疑問詞節の中の〈主語＋動詞〉の語順が学習のポイントとなる。用法を理解した上で自然に表現できるように文型練習、自己表現活動を行いたい。主格の関係代名詞 who、which については、人や物・事柄について詳

しく説明するときに用いるということや先行詞がある、ということをおさえたい。生徒達にとっては複雑な文の仕組みであり「難しい」と感じる生徒もみられるであろうが、前課で現在分詞や過去分詞の後置修飾についての学習が生かされるのではないかと考えられる。また、関係代名詞を用いることでさらに表現の世界が広がるので、生徒達に英語で表現することの楽しさを実感させたい。Let's Communicate で扱われる道案内については、行き方のたずね方、行き方の正しい伝え方、のどちらの表現もコミュニケーションを図る上で重要である。したがって道案内で使われる語彙や表現を正しく理解し、運用することが大切である。ここではＡＬＴの先生に自分達の校下を道案内できるように練習することで英語を使ってコミュニケーションすることを生徒達に実感させたい。

(2) 生徒観

本クラスの生徒は落ち着いて授業や学習活動に臨む生徒が多い。男女間の仲も良く、ペア活動などにも積極的に取り組む生徒が多い。

5 月に行われた基礎学力テストではほとんどの領域で県の平均通過率を上回った。例えば「理解」や「知識・理解」の領域についてはほとんんどの項目において県の平均通過率を上回った。しかしその一方で「文章の概要・要点について読み取ることができる」「文の趣旨を読み取ることができる」という項目については県の平均通過率を下回った。このことからまとまった文章を読み取る力をつける必要があることがわかる。生徒の中には「まとまった量の英文を聞き取ることが苦手だ」という生徒もみられることから、書かれた英語だけでなく話された英語の内容を理解する力も同時に育てるということが課題である。また、「表現」の領域については通過率が50%を下回った項目がいくつかあった。定期テストでも「英作文の問題には手をつけられない」という生徒もいる。したがって、初歩的な英語や既習の文型を用いて自分の思いを表現する力をつけることが課題である。

(3) 指導観

授業の導入時にＱ&Ａを日常的に行っていることから疑問詞を使った疑問文の用法やそれぞれの意味が定着している。したがって間接疑問については、生徒達は英文の意味は比較的容易に理解できると思われる。用法をおさえた上で文型練習を行いたい。主格の関係代名詞 who、 which については前述したように前課で現在分詞や過去分詞の後置修飾を学習しているので、それらを元にして導入したい。道案内では既に学習している相手に依頼したりそれに応えたりする表現も参考にして表現の幅を広げたい。

本研究の英語科のテーマにある「意欲的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する」ために新出文型の導入時に十分な文型練習を各セクションで取り入れる。その際に自己表現につながるような文型練習になるように工夫したい。それによって生徒達が英語で自分のことや思いを表現しようという姿勢を持つ習慣ができると思われる。さらにペア活動やグループ活動を通してお互いに学び合う中で表現する力だけでなく理解する力の向上にもつながることを期待したい。また、由紀のロンドンでの体験について書かれた本文の内容理解を通してまとまった文章の内容を読み取る力を育てたい。

4　単元の指導・評価計画（総時間数 8 時間）

次	小単元名及び目標	主な学習活動	コミュニケーションへの関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	言語・文化の知識・理解
一 2時間	§1〈主語＋動詞＋疑問詞節〉の間接疑問の用法を正しく理解し、これを使って自己表現できる	間接疑問の用法を理解した上で文型練習、コミュニケーション活動をする	英語を使ったコミュニケーション活動に意欲的に取り組む	イラストの人物について間接疑問を使って説明できる		間接疑問の用法を理解し、正しく運用できる
		・p.58、59の内容理解 ・本文の音読練習をする		本文を正しい発音で読むことができる	青年と由紀との対話の内容を理解できる	
二 2時間	§2関係代名詞who（主格）の用法を正しく理解し、これを使って自己表現できる	関係代名詞who(主格）の用法を理解した上で文型練習、自己表現活動をする	ライティング活動に意欲的に取り組む			関係代名詞who（主格）の用法を理解している
		・p.60、61の内容理解 ・本文の音読練習をする		本文を正しい発音で読むことができる	ホワイトと由紀の対話の内容を理解できる	
三 2時間	§3関係代名詞which（主格）の用法を正しく理解し、これを使って自己表現できる	関係代名詞which（主格）の用法を理解した上で文型練習、自己表現活動をする	リスニング活動に意欲的に取り組む			関係代名詞which（主格）の用法を理解している
		・p.62、63の内容理解 ・本文の音読練習をする		本文を正しい発音で読むことができる	由紀が書いた絵はがきの内容を理解している	イギリスの文化について理解を深める
四 2時間	Let's Com－municate ・道案内についての英文を聞き取ったり読み取ったりする ・英語で道案内をする	・英語で話される道案内を聞いて地図上で確認する ・対話を聞いて英語の質問に英語で答える	リスニング活動に意欲的に取り組む		・英語で話される道案内の理解 ・英語で書かれた道案内の理解	道案内でよく使われる語彙や表現を理解し、正しく運用している
		・英語で書かれた道案内の英文を読んで道順をたどる	スピーキング活動に意欲的に取り組む		自分の家までの道順などを英語で	

					説明できる	

5　本時の学習

(1) Program7　Yuki in London (1) (本時　1/2)

(2) 本時のねらい　間接疑問の用法を正しく理解しこれを使って自己表現できる。

(3) 準備・資料など

ピクチャーカード、ワークシート、人物のイラスト、ＣＤ

(4) 展開

過程 時間	学習活動	指導上の留意点	評価（観点、方法）
導入 10 分	①あいさつ ②Warm-Up／Q&A をする ③BERA BERA CONVER－SATION シートを使ってペア活動をする	・座席の一列の生徒に英語で質問し答えさせる。 ・BERA BERA CONVERSATION シートを使ってペア活動をさせる。	
展開 37 分	④間接疑問の用法を確認する ・有名人のイラストを見ながら教師の英語を聞き、教師の質問に答える。 ・間接疑問の用法を正しく理解し、これを使って自己表現できる。 ⑤文型練習をする ・ワークシートの絵を見ながら英語で絵の内容について言う。 ・すらすらと言えるようになったらワークシートに英文を書く。 ⑥コミュニケーション活動をする ・4 人グループでイラストの人物の出身、年齢などについて尋ねる英	・有名人のイラストを見せながら間接疑問を使った英文を聞かせて意味を考えさせる。 ・板書を見ながら間接疑問の用法を理解させる。 ・ワークシートに記入して新出文型を確認させる。 ・絵を見ながら頭の中で英文を作らせる。 ・全体的に大きな声ですらすらと言えるようになったらワークシートに英文を書かせる。 ☆机間支援して単語の綴りや語順を説明する。 ・指示にしたがって英語で表現する。 ☆どのように書けばいいかわからない場合は日本語で文を考えさせてから英文を作るよう支援する。 〇他にも英文を作るように指示する。 ・イラストの裏にある情報を参考にするよう指示する。 ・グループに英文の作り方がわからない人がいる場合はお互いに教え合うように指示する。	【言語・文化の知識・理解】 間接疑問の用法を理解し、正しく運用できる。〔観察〕 【関心・意欲・態度】 英語を使ったコミュニケーション活動に意欲的に取り組んでいる。〔ワークシート・観察〕

	文を作る。 ・各グループでイラストを見せながらクラスメイトに尋ね、手をあげて答える。 ・グループのメンバーが考えた英文をワークシートに書く。	・各グループの質問に対する答え方を説明する。 ☆英文の作り方がわからない場合は単語の綴りや語順を説明する。 ○イラストにはない情報についての尋ね方についても考えさせる。 ・グループのメンバーが考えた英文をなるべく写さずに聞いてから書くように指示する。	【表現】 間接疑問を使ってイラストの人物について説明できる。 〔ワークシート･観察
まとめ 3 分	⑦間接疑問の用法を確認する	・板書で確認する。	

☆：努力を要すると判断される状況の生徒への支援

○：ねらいを達成したと判断される状況の生徒への支援

(5) 意欲を引き出す工夫

・ペア活動やグループ活動をすることでパートナーや他のメンバーと協力させる。

・文型練習では絵を見ながら頭の中で英文を作って声に出して言わせる。

・生徒達がよく知っている有名人について英語で説明し、新しい文型に興味を持たせる。

特　別　支　援

1　教科研究主題

個の特性や能力を生かし、見通しを持って学習に取り組める指導・支援の工夫

2　主題設定の理由

本学級は、知的障害学級で２年男子生徒１名が在籍している。性格は明るく、元気である。1年時に比べると、学校生活にも慣れ、名前を覚えた友だちや先生とコミュニケーションも少しずつ摂れるようになってきたが、音声言語での意思の伝達は難しい。また、いろいろな事に慣れるには時間がかかるが、同じことを繰り返し経験することで少しずつ自信を持てるようになってきた。2 年生になってからは気持ちの面で落ち着きつつあり、学校ではパニックになることはほとんどなくなったが、自分の思い通りにならないことがあると大きな声を出したり、自分の顔を叩いたり、自分の腕を噛んだりするなどの自傷行為がみられる。情緒が安定し、気分の良いときには､自分でリズムをとって体を揺らしたり､お気に入りの歌を元気に歌っている。

平素の観察から、本生徒は視覚より聴覚情報が優位と思われ、繰り返し聞くことによって習得していくことが多い。そのため同じことを何度も聞き、確認している。また、具体物や視覚で分かる写真や絵カードで示すと理解がスムーズな場面もみられる。

生徒の特性を把握し、能力を引き出し、生き生きと自信を持って活動できる場面を設定することが大切である。本生徒の発達段階を考えると、見通しを持って学習に取り組め、いい自分を実感できる場面を設定することだと考える。そのために、自分でできることを増やし、それができたことで自信が持て、情緒の安定につながってくるのではないかと考えている。本生徒については、教科の指導より、生単・作業学習を多く取り入れた方が、繰り返し学習ができるので、定着しやすいと考えられる。安定した情緒の下で学校生活を送れることが、今後の本生徒の家庭生活・社会生活の中で大切なことだと考えている。

また、授業のほとんどが、教師との１対１対応のため、単調になってしまったり、ついつい生徒のやる気や自発的な動きが起きるまで待てなくて、指導者の思いが先走りがちになっている。

今年は生徒の実態に即した効果的な指導・支援のあり方をさぐりながら、生徒が進んで学習に参加できる授業づくりをめざして、この主題を設定することとした。

3　実践の内容

(1) ねらいを明確にした授業

① 生徒の特性や実態を把握し、育てたい力を明確にする。生徒の特性や実態を把握し、一人ひとりに適した指導目標やねらいを設定することが大切である。指導者としては、いつ・どこで・何をねらい・どんな指導・支援をしたらよいかを押さえておくことが大切であると考える。

② ①をふまえて、具体的な手立てを考え、生徒に合った教材や指導方法を考え、繰り返し学習できるように配慮しその定着を図る。

(2) 主題にせまるための工夫

① 個別の指導計画の作成。

② 学習全体の見通しが持てるように、学習の流れやねらいがわかるようにする。本生徒には特に、具体物や視覚でわかる写真や絵カード、ビデオなどを利用するようにした。特に写真やビデオは、学習の後に自分の姿をみることで、学習の意欲を次につなげることに役立った。

③ 学習内容については体験的・実践的活動を多く取り入れ、繰り返し学習できるように配慮した。そのことで、基本的な動作やコミュニケーション能力が定着する。

(3) 評価の工夫

① 自己評価：そのつど、できたことについては褒め、「ここまでできたね」「すごいね」「やったね」といったイイ気持ちになれるような言葉かけや確認をするように支援をした。また、イイ自分を実感できることで生徒のやる気や頑張りが途切れないように配慮した。

② 記録：生徒の学習内容や学習の様子について記録し、できたことを確認し、励ますようにした。また、嬉しい表情やがんばっている様子を写真やビデオでみられるようにすることで、イイ自分を確認できるようにした。

4　成果

① 学習の流れや作業手順を写真やビデオで掲示することで「今日のお勉強は？」「何をしたらよいか？」がわかり学習の見通しが持てるようになった。その結果、情緒が不安定でパニックになることはなくなり、学習に集中できる時間も長くなってきた。

② また、繰り返し学習することで、学習したことが確実に定着し、徐々に作業もスムーズに進められるようになってきた。また、自分から「みずやりがんばります」「先生、今日はどうやった？」「グーやった？」と聞けるようにもなった。

③ できない時やむずかしい時には、「先生、どうすうれん」「先生、できません。」や「教えてください。」が言えるようになった。また、1、2 回やってできなくても、「もう 1 回がんばります」が言えるようになった。

④ 野菜を育てたり、作った作物を調理することにも関心を持ち、野菜の名前や料理名を知ることができるようになった。また、半年間世話をすることで、同じ作業を繰り返すことで学習が定着し集中できるようになった。

⑤ 何よりも「グーだったよ」「すごいね‥‥今日は新記録」「速いね」などのイイ自分を実感することで「自分にもできたよ」「がんばったよ」「グーグーだったよ」という満足感を得ることで自信を持ち、明るく、元気に活動することができるようになった。

5　今後の課題

① 生徒に単元全体の見通しが持てるように、全体計画を図や写真でわかりやすく掲示したり、単元カレンダーを作って、常に掲示しておくことで、進み具合を確認できるようにしておくことが大切であると思う。

② 生徒の頑張りや評価がわかるように、ひとつ終わるごとに頑張りシールを貼って、お互いに確認しながら進めていく必要がある。また、生徒の実態に応じて掲示の方法も工夫する

必要があると思った。

③ 「大きなさつまいもを育てよう」は生単の 44 時間を設定し実施したが、生単の学習は、実践的・体験的活動が多く、継続した取り組みを重視するために、計画や事前の準備等に時間がかかるのでそのための時間を十分に確保する必要がある。

④ 一日のほとんどの時間が教師と一対一対応のため、学習が単調になり、マンネリ化する危険がある。また、人との関わりやコミュニケーションの方法を学べるようになるためにも、他校（特学）との合同学習や地域の人との交流の場を増やしていきたい。

⑤ 指導者は、計画（Plan）⇒実施（Do）⇒評価・反省（See）を常に頭に置き生徒の実態を考慮しながら、進めていく必要がある。また、目標を達成するためには、焦らず、一つひとつを着実に身につくように配慮する必要がある。

⑥ 家庭との連絡を密にし、本生徒のできたことや成長の様子を知らせるとともに、家庭でもできることを増やすことで、より効果的であると考えられる。

研究発表会公開授業指導案

かけはし学級　英語科生活単元学習指導案

指導者　　松原　順子

1　単元名

大きなさつまいもを育てよう

2　単元の目標

・野菜の中でも、身近でなじみのあるさつまいもを育てることで、自然との関わりや食べ物についての関心を持ち、収穫の喜びを体験する。

・毎日の水やりや草取りに意欲的に取り組み、その活動を通して、自分のできることや役割に責任を持てるようになる。

・収穫したさつまいもを調理しておいしく食べたり、友だちや先生といっしょに調理やお茶会を楽しんだりすることができる。

3　指導にあたって

(1) 生徒について

① 行動面：本学級は、知的障害特殊学級である。現在 2 年男子生徒 1 名が在籍している。性格は明るく、とても元気である。一年時に比べると、学校生活にも慣れ、名前を覚えた友だちや先生とのコミュニケーションも少しずつとれるようになってきたが、音声言語での意思の伝達は難しい。いろいろなことに慣れるには時間がかかるが、同じことを繰り返し経験することで少しずつ自信を持てるようになってきた。また、親しくなった人には、甘えて体に触れたり、突然体を叩いたりすることもあるが、自分のしたいことや感じたことを言葉で表現できるようにもなってきており、他の人との関わり方にも変化がみられるようになってきた。2 年生にな

ってからは気持ちの面で落ち着きつつあり、学校ではパニックになることはほとんどなくなってきたが、自分の思い通りにならないことがあると、大きな声を出したり、自分の顔を叩いたり、自分の腕を噛んだりするなどの自傷行為がみられる。情緒が安定し気分のよい時には、自分でリズムをとって体を揺らしたり、お気に入りの歌を大きな声で歌っている。新しい場所や活動などには、どうしてよいかわからないため不安になり、次の行動に移せないことがあるが、同じ繰り返しの中から、「やってみよう」という姿勢がみられるようになった。

② 学習面：2 年生なってから、「これ何」を連発するようになり、周りの者や身近な者への興味や関心が出てきたようである。先生の名前を写真を見ながら憶え、今では全員の名前を間違わずに言えるようになったが、まだ「ひらがな」は書けない。ひらがなの絵カードは大きくてわかりやすく、色使いもきれいなので好んで使うようになってきた。まだ絵と文字のマッチングは完全ではないが、休み時間には自分でカードを持ってきて、さるの「さ」、きりんの「き」などと指をさしながらを憶えるようになってきた。教師の声掛けや補助により、数も 1〜30 までは数唱できるようになっており、ひらがなの点結びやなぞり書きもできるようになってきた。

平素の観察から、本生徒は、視覚より聴覚情報の処理能力が優位と思われ、繰り返し聞くことによって習得していくことが多い。そのため同じことを何度も聞き、確認している。また、具体物や視覚で分かる写真や絵カードなどで示すと理解しやすい場面もみられる。

歌を歌うことやリズムに合わせて体を動かしたりすることが好きで、「先生聞いて、聞いて」と言って、知っている童謡や校歌を大きな声で伸び伸びと楽しそうに歌う。いい自分を実感でき嬉しい時には、校歌と童謡をメロデイーで元気に歌う。

(1) 単元について

生徒の特性を把握し、能力を引き出し、生き生きと自信を持って活動できる場面を設定することが大切である。本生徒の発達段階を考えると、見通しを持って学習に取り組める題材は何か？、本生徒が「できた」「がんばった」と言って満足できる活動場面をたくさん設定できるようにするにはどうしたらよいか？の二つのことを大切に考え、昨年と同じ単元を設定することとした。本生徒の学力＝自分でできることが増えることだと考えている。そのために、自分でできることを増やし、それを確実にできたことで自信が持て、それが情緒の安定につながっているのではないかと考えている。そこで本生徒については、教科の指導より、生活単元学習・作業学習を多く取り入れた方が、繰り返し学習ができるので、定着しやすいと考えられる。

本単元では、さつまいもの苗の植え付けから収穫までの「さつまいもの栽培」と収穫後の「さつまいもの調理」に分けて学習することとなる。半年の長い期間学習することになるが、前半はさつまいもの育て方や生長を観察できる力を養い、後半はさつまいもをおいしく食べるための調理の技能を身につけるとともに、食生活や食事のマナーや人との関わりについて学習できるようにしたいと考えている。

学習したことが定着し、自信をもてるようになると、いい自分を実感し情緒も安定してくるのではないかと考える。安定した情緒の下で学校生活を送れることが、今後の本生徒の家庭生活・社会生活の中で大切なことだと考えている。

(2) 指導について

学校生活の中では、簡単な音声言語での指示はほとんど理解できているようであるが、指示

されたことをひとりでするには至っていない。かならず補助する者が必要である。ひとりでできることでも何度も確認して行動する。そこで一学期は主に「さつまいも」の栽培を通して、水やりや草取りを自分の仕事として自覚し、ひとりでもできるようにと考え指導・支援してきた。その結果、一ヶ月ぐらいで、仕事の手順や見通しが持てるようになり、教師の指示がなくても「先生、今日の水やりは？」と言って自分で着替えをしたり、倉庫の鍵を持ってきたりと準備できるまでになった。また、同じような活動を繰り返し行うことで作業パターンが確立し、集中力と根気強さも身についてきたように思われる。本時は、収穫したさつまいもを使って本生徒の好きな芋ようかん作りを体験する。できた芋ようかんをお茶菓子にして、交流学級や他校の特殊学級とのお茶会を計画している。

本生徒の将来の社会生活での場面を考えると、必要な力は、自分でできることを増やし、他とのコミュニケーションの方法を身につけることなのではないかと考える。また、そのようになることを願っている。

4　生活単元学習の単元計画

『大きなさつまいもを育てよう』・・・・・・・・・・・・4 月～11 月まで

第一次　さつまいもを植えよう（8 時間）・・・・・4 月～5 月

・草取り・土づくり（3 時間）

・畝作り（2 時間）

・苗の買い物（1 時間）

・苗植え・水やり（2 時間）

第二次　さつまいもを育てよう（20 時間）・・・・5 月～9 月

・草取り・水やり

・観察・記録

第三次　さつまいもを収穫しよう（6 時間）・・・10 月

・収穫・販売

第四次　さつまいもパーティをしよう（10 時間）・・・・・・10 月～11 月

・調理（ふかし芋・芋ようかんづくり）（3 時間）（本時　2/3）

・お茶会・準備（6 時間）

・反省・まとめ・ふりかえり（1 時間）

5　本時の学習

(1) 題材名　「さつまいもパーテイをしよう」

(2) ねらい

・手順書（サポートブック）を手がかりに、芋ようかんが作れる。

・調理に関する言葉「洗う」「切る」「ゆでる」「つぶす」などの言葉と動作をマッチングさせて調理ができる。

(3) 個別の指導計画との関連

番号	指導内容	指導目標
⑥	対人関係	・身近な人と活動をともにして、楽しむ。
⑦	国語（聞く・話す）	・日常生活に必要な言葉と動作をマッチングさせて行動することができる。
⑮	自然	・さつまいもを育てその生長に関心がもてる。
⑰	役割	・自分の役割や仕事の内容がわかり、教師と一緒に調理ができる。
⑱	自立活動	・安定した情緒の下で、見通しをもって活動ができる

（4）準備・資料等

調理の材料、調理用具、手順書（サポートブック）など

（5）本時の展開

学　習　活　動	教師の支援（・）　と　　評価　　～か？（★）
1　始まりの挨拶をする。 2　本時の学習の内容を知る。	・笑顔で接し、元気に挨拶をする。
おいしい芋ようかんを作ろう	
	・実物を見せて、芋ようかんを作ることを知らせる。 ・本時の流れを、写真やカードで示し、手順をわかりやすく説明する。（手順書「サポートブック」を手がかりにして、活動の見通しがもてるように配慮する）
3　移動する。	・服装・手洗いなどの準備ができているか？確認する。
4　準備をする。	・手順書を示すことで、自発的に動けるように配慮する。
5　調理をする。 ・洗う。 ・切る。 ・ゆでる。 ・つぶす。 ・固める。	・「わかりません」「おしえてください」と聞かれたら答えるようにし、できるだけ指導者の声かけは少なくする。 ・「じょうず」「すごい」「がんばってるね」など言い、自分を実感でき、やる気がでるような声かけをするようにする。 ★「洗います」「ジャー」と言葉と動作をマッチングさせて行動できているか ？ ・手順書を一枚ずつはずして、黒板に貼り進み具合を確認する。
6　ふりかえり。	・危ないときには、STOP をかける。 ★　手順書（サポートブック）を手がかりに、芋ようかんを手順にそって作れていたか？ ・今日のお勉強の、楽しかったところは？がんばったことは？をいっしょに考える。
7　終わりの挨拶をする。	・芋ようかんを作れたことをいっしょに喜ぶ。 ★　安定した情緒の下で、見通しをもって活動ができたか？ ・芋ようかんが固まっているかを見て、成功したことを確認する。 ・次時の予告をし、お茶会への意欲がもてるようにする。 ・一緒に、元気に挨拶をする。

	・あとかたづけをする。

(6) 意欲を引き出す工夫

・個別の指導計画を基本にしながら、本生徒の興味・関心・特性をふまえ、個に合った題材とタイミングを考え、設定することが大切である。

・指導者が見本を示したり、わかりやすく提示することで、見通しを持って学習に臨めるようにする(特に視覚でわかりやすく、見やすいもの、自分で確認できるものが有効である。。)。

・指導者としては、同じことを繰り返し学習することで、基本的な力の定着を図りながら、個の成長に応じて、少しずつバリエーションを変えながら授業を組み立て進めていく必要がある。

・「できたこと」や「がんばったこと」はその場で認め、誉めるようにし、自信を持たせることで、やる気や意欲が次時につなげられるようにする。

個別の指導計画

番号	指導内容	目標設定学期	指　導　目　標	期間	評価
①	食　事	1	衣服の表裏、前後をまちがわずに着ることができる。	長	
		1	衣服をハンガーにかけることができる。	短	○
		2	衣服のボタンのかけはずしができる。	長	
		2	自分の脱いだ靴やズックをそろえる。	短	
②	着脱・身だしなみ	1	給食のエプロンと帽子をつけることができる。	短	○
		1	はし、スプーンを正しく使って食べる。	長	
		1	「いただきます」「ごちそうさまでした」の挨拶ができる。	短	○
		2	盛り付けられたものを残さず食べる。	長	
		2	茶わんをもって食べる。	短	
③	用　便	1	１人でトイレに行くことができる。	短	○
		1	便器に座って大便ができる。	短	○
		1	戸を閉めて排泄ができる。	長	
		1	失敗したら教師に知らせる。	長	○
		2	トイレを使用した後水を流すことができる。	短	
		2	用便後は手を洗う。	短	
④	整理整頓・健康衛生	1	いつもタオル・ティッシュをもっている。	長	
		1	鼻がでたら鼻をかむ。	短	○
		1	外から帰ったら、手洗いやうがいをする。	長	
		2	汗がでたら自分で拭く。	短	
		2	食後歯みがきができる。	長	
⑤	遊　び	1	ビデオは、昼休み時間にみる。	長	○
		1	すすんでひらがなカルタをする。	短	
		1	順番を守って魚釣りゲームができる。	長	

		2	順番、交替がわかり友だちと簡単なゲームができる。	短	
⑥	対人関係	1	先生や友だちに「おはよう・さようなら」の挨拶ができる。	長	○
		1	名前を呼ばれたら「はい」と返事をする。	短	○
		1	自分の名前・学年・学校名が言える。	短	△
		1	身近な人と活動をともにして楽しむ。	長	△
		2	指示されて「ありがとう」「ごめんなさい」が言える。	短	
		2	学校の先生や関わりのある友だちの名前が言える。	短	
⑦	国語（聞く・話す）	1	説明や指示を最後まで聞く。	長	
		1	先生や友だち、学校の名前を言う。	短	○
		1	簡単な挨拶をする。	長	
		2	今日の学習を振り返り、「○限○○をしました」と話せる。	長	
		2	「始めます」「終わります」などの動作と言葉をマッチングさせて行動ができる。	長	
⑧	国語（読む・書く）	1	鉛筆で線や丸を書く。	短	○
		1	文字を書くことに興味を持つ	長	
		2	まる、三角、四角を描く。	短	
		2	「あいうえお～ん」まで順番に言える。	長	
		2	自分の名前のひらがなが読める。	長	
		2	わからないときは、「わかりません」や」「おしえてください」と言える。	短	
⑨	数学（弁別・数）	1	数の多い、少ないがわかる。	短	○
		1	1～10 までの数字が読める。	短	
		2	1～30 までの数が読める。	長	
		2	1～10 までの数が書ける。	短	
⑩	数学（空間・計測）	1	大きい・小さい・長い・短いがわかる。	短	○
		1	前後がわかる。	短	○
		2	左・右がわかる。	短	
		2	円・三角形・四角形の名前がわかる。	長	
⑪	数学（暦・時・図表・金銭・買い物）	1	今日・あしたがわかる。	短	
		1	今日は何日？がわかる。	短	
		2	今日は○月○日がわかる。	短	
		2	一週間の曜日がわかる。	長	
		2	「これください」など買い物に必要な言葉を使える。	長	
		2	教師と一緒にジュースが買える。	短	
⑫	音　楽	1	音楽を聴いて楽しむことができる。	長	
		1	校歌を１題大きな声で歌うことができる。	短	○
		2	ちょうどよい声の大きさで歌うことができる。	長	
		2	リズムにあわせて、手や太鼓をたたくことができる。	短	
⑬	美　術	1	点と点を結ぶことができる。	長	△
		1	丸・三角・四角が描ける。	短	○

		1	自分の描いたものを意味づけて話せる。	長	△
		2	紙を折ったり、切ったり、貼ったりできる。	短	
		2	はみださずに、枠の中をぬりつぶすことができる。	長	
		2	はさみを使うことができる。	長	
⑭	体　育	1、2	校舎の周りを１周歩かずに走ることができる。	長	△
		1	バスケットボールを投げてゴールすることができる。	短	
		1	顔を水につけることができる。	長	○
		2	相手にむかって、ボールを投げることができる。	短	△
		2	投げられたボールをとることができる。	長	
⑮	自　然	1、2	天気がわかる。	長	○
		1、2	さつまいもを育て、収穫を関心を持って待てる。	長	
⑯	社　会	1	芦城公園がわかる。	短	○
		1	自分の住んでいる町の名前が言える。	短	○
		2	教師と一緒にバスや電車に乗れる。	長	
⑰	きまり・役割	1	責任をもって、鯉のえさやりができる。	短	○
		1	サポートブックを手がかりに水やりの手順がわかり、手順にそって野菜（畑）や草花（花壇）の水やりができる。	長	△
		1	遠足や集会に参加できる。	長	△
		1	給食の配膳車を教師といっしょに運ぶ。	短	○
		1	雑巾を絞ることができる。	短	○
		2	廊下を走らない。	長	
		2	教室の机と床の水ぶきができる。	短	
		2	運動会や文化祭に参加できる。	長	
		2	職員室にお使いに行ける。	短	
		2	自分の役割や仕事の内容がわかり、教師といっしょに調理することができる。	長	
⑱	自立活動	1	安定した情緒の元で見通しを持って活動ができる。	長	△
⑲	その他	通年	合同学習・交流学習に先生と一緒に参加できる。	短	△

○：目標を達成したもの　　△：継続して指導を必要とするもの

第１学年部会

1　はじめに

１年としては全体的に学習する雰囲気づくりはできてきている。しかし個々の状況を見ると、人間関係がうまく作れない生徒、相手の気持ちを推し量ることができず、友人同士のトラブルを引き起こしたりする生徒がまだまだいるように思う。年度当初、めざす１年生像として「自主」「思いやり」「自律」の３つの柱を示した。中でも「思いやり」では心豊かで相手の気持ちを考えられる生徒をめざし、互いに認め合い、尊重し合える雰囲気づくりに心がけている。そのためにも、学校でのさまざまな行事、道徳の授業を大切にして集団としての力を十分つけて「学び」の土台を築いていきたい。対教師だけではなく、対仲間との関係をより良好なものにしていくことで、関わり合い、より高め合う集団になっていくと思っている。

2　学習習慣定着のために

１年の学年では、昨年の１年生同様に朝学習に漢字ドリル１日、計算ドリル１日、読書３日を取り入れている。また、自学ノートに取り組ませ、週 1～2 回提出させている。

(1) 朝学習について

朝学習に取り組ませる前の事前指導に、学習の基本は「読み」「書き」「そろばん（計算）」であることを紹介し、漢字と計算ドリルを週１回ずつ、読書を後半の３日間取り組むことで、基礎の力をつけていくことを説明した。

漢字と数学は朝学習用のドリルの冊子をもたせ、自分のペースで進ませている。また、読書は学級文庫を活用させ本を持ってこない生徒にも対応できるようにしている。

(2)自学ノートについて

各教科でどのようなことを自学ノートで取り組めば効果的な学習ができるかをまとめて紹介した。それは、次の５つである。

① その日授業でやったことをノートにまとめたり、授業でやった問題をもう一度ノートにやってみる。
② ワークブックで間違えたところをもう一度ノートに書いてやってみる。または、ノートに一度ワークブックの問題をやってから、二度目をワークにする。
③ 漢字や英語の小テストのための練習を合格の自信がつくまでやる。
④ 社会や理科の難しい漢字を含んだ用語を正しく覚えるために、繰り返し書く練習をする。
⑤ 余裕のある人は、自分の持っているワークなどを自学にやってみたり、発展的な課題を担当の先生に聞いてやってみる。

3　テストの事前事後の取り組み

テスト 2 週間前には、学習計画表を書かせて学習の見通しを立てさせてから、家庭学習に取り組ませている。また、毎日進んだ分にマーカーで印をつけさせ、実施した時間と自分の学習への評価を書かせ提出させている。

テストが帰ってきた後で、テスト勉強と自学ノートの取り組みの振り返りをさせ提出させている。

4　学年独自の取り組み

定期テストのあとに自学ノートの振り返りをしている。自学ノートで取り組めばよいと紹介した①から⑤までの項目につき、「5：大変よくできている」「3：普通」「1：あまりできていない」の5段階で自己評価をさせている。

1 学期に漢字ドリルと計算ドリルに取り組ませた中から、20 問程度の小テストを作り、7月の朝学習で今までの朝ドリルの成果を見るということで、振り返りをさせた。

読書については、 1 学期にお話宅配便も利用して本の紹介をしていただき、本のおもしろさを体験することで意欲的に読書に取り組めるような行事も取り入れた。

また、「道徳の授業」の学年での参観や教材の情報の共有を意識的に行った。そのことにより、教師集団がお互いの授業から学ぶことも多々あり、生徒の中に「道徳」の授業を楽しみにする者が増えた。

5　成果と課題

自学ノートの取り組みに関するアンケートをしたところ、下のような結果になった。

①　4月から比べて、意識して自学ノートにするようになったこと	（複数回答可）
授業の復習	55%
ワークブックそのものや違ったところ	24%
漢字や英単語練習	36%
社会や理科の漢字を含んだ用語練習	25%
発展的なもの	6%
上記の項目を意識してやっていない	9%

②　4月から比べて、自学ノートの取り組みで変化したこと	（複数回答可）
授業の復習に活用し、授業が分かるようになった	42%
単語テストや漢字テストの練習をして、テストに合格している	28%
定期テストの前にワークや教科書の復習、語句の確認に使い成果をあげている	29%
自学ノートに十分取り組めるときと取り組めないときがあり、成果が見えない	39%
自学ノートの取り組みは不十分で成果が上がっていない	18%
自学ノートを活用していないが、十分成果が上がっている	4%

その他	5%

③ 自学ノートについての考え

しっかりやれば授業が分かるようになるものだから大切	41%
取り組み次第では、自分の力をどんどん伸ばしてくれるものだ	59%
やっても効果がないので、必要ない	5%
やり方がわからないので、活用できていない	4%
することがないので、困るときがある	23%

朝学習についてのアンケート結果は次の通りであった。

① 朝読書をするようになってどう思っているか

もともと読書が好きだったので、本を読む機会がふえてよかった	30%
読書が好きになって、家でもよく読むようになった	15%
読書が楽しくなったが、学校で読むだけだ	32%
本を読むことに慣れてきた	17%
やはり本を読むのはあまり好きではない	15%

② 本について友だちと話し合うか

おもしろかった本などの情報交換をしている	31%
本を貸し借りしている	22%

自学ノートの取り組みのアンケートからも分かるように、生徒自身は「自学ノートの取り組みをしっかりやれば自分の力を伸ばしていける」という意識は出てきている。中身を吟味し、よいものを紹介したり、やり方を指導することでまだまだ活用の幅を広げることができると思われる。あくまで「自主的な取り組み」ということを意識しながら、「やらせっぱなし」にならないように、個々に指導していきたい。

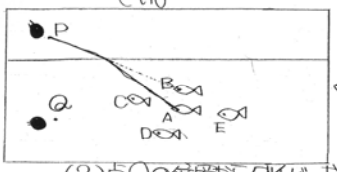
道徳の時間の取り組みに関しては、まだまだ内容が伴わず、資料も少ない現状がある。

しかしともすれば、自分と気が合うことだけしか遊ばない子、人とのかかわりに積極的でない生徒が増える中で、今こそ「人間関係能力」「思いやりの育成」が大切であり、そのことを感じ、考え、育てるためにも「道徳」の時間を大切にし、研究研鑽していかなければならないと思う。「道徳の時間は漢方薬」といわれる。心を育てるのに近道はないということを忘れず、粘り強く取り組んでいきたい。

理科自学ノートの例

No. 6
Date 10・11

3 光の屈折
水中の点Aの位置に魚がいる。
(1) 次の魚を点Pから見ると魚は点B～Eのどの位置にいるように見えるか。 B
(2) (1)のとき、点Aから点Pまでの光の道すじを書きなさい。



(2)の答えを、ここにかきこもう。

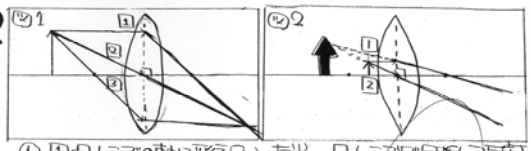
(3) 点Qの位置からダイバーが水面を見ると、点Eの魚が水面に映って見えた。このように見えたのは、光の何という現象になるか。 全反射
(4) (3)の現象になるものを、次のア～ウから1つ選びなさい。
ア、鏡に映る富士山　イ、木の影
ウ、光のファイバー　ウ

ワークP4～5　2. 凸レンズでできる像
1 物体をa～dの位置に動かして、凸レンズとの距離を変え、スクリーンに像が映るかどうか、像の位置や大きさ、向きを調べた。像が映らないときは、凸レンズを通して見える像のようすを調べた。
① 焦点…凸レンズの軸に平行な光が凸レンズを通ったとき、光が屈折して集まる点。
② 実像…光が実際に集まってできる像。スクリーンに映る。
③ 物体の位置は、焦点より外側。像の向きは上下、左右とも逆。

No. 7
Date 10・11

④ 物体を凸レンズに近づけるほど、できる像の位置と大きさはどうなるか。
位置 遠くなる。 大きさ 大きくなる。
⑤ 虚像…光が集まらず、凸レンズを通して見える像。スクリーンには映らない。
⑥ 物体の位置は、焦点より内側。像の向きは上下、左右とも同じ。

2



① 1凸レンズの軸に平行に入った光…凸レンズで屈折して反対側の焦点を通る。
2凸レンズの中心に入った光…直進する。
3焦点を通って入った光…凸レンズで屈折して凸レンズの軸に平行に進む。
② 1～3の光の道すじを図1、2にかきなさい。
③ 図1では、光が集まって実像ができる。この像をかきなさい。
④ 図2で1、2でかいた線を光源側に延長すると、ある点から光が出ているように見える。この像が虚像である。この像を図2にかきなさい。

1 平行な光の進み方
太陽の光をスリットにあてると、光は凸レンズを通り、点Fに集まった。
(1) 点Fを何というか。 焦点
(2) スリットから点Fまでの光の道すじを書きなさい。

第 2 学年部会

1　はじめに

互いに認め、励まし合うことにより、心温まる集団を形成し、その中で落ち着いて自己や友だちを見つめ、互いに理解し協力する気持ちを高めていくことのできる生徒の育成を指導方針とし、「心の通い合う集団を形成し、自己実現に向けたそれぞれの活動を支え合い、尊重し合おう」を学年目標とした。

昨年度からの成長を基盤に、学級という小集団のまとまりから、今度は学年集団の形成へと望ましい方向に発展させていくことをめざしたいと考えた。学校生活の中での様々な活動実践を機会ととらえ、道徳や学級活動、教師の指導のもと、理想を追求する姿勢を生徒の中に求めていった。

とはいえ、形式的な部分での躾は身に付いているものの、実質的な中身においては、非常に幼いのが現状である。行事などの取り組みにおいても、リーダーとして思いを持つ者もいるが、まだまだバラバラで、自ら考え、まとまって実行するという力は乏しく、常に目的意識を植え付けて取り組まないとただ流れていってしまうだけになる危険性もある。

年度最終の取り組みとして「感動的な卒業式を作りあげる」というものがあるので、そこに至るまでのこれからの過程において、リーダー会の運営、行事への取り組み、中心として活躍する部活動での経験を大切にし、60 周年を迎えた丸内中学校の歴史と伝統を受け継いでいく、「いの一番」の 3 年生として成長していくように指導していきたい。

2　学習習慣定着のために

2 年生は 1 年の頃から学習習慣定着のために、自学ノートと朝自習の読書に取り組んでいる。この取り組みは 2 年目となるが、それぞれ次のように取り組んでいる。

(1) 自学ノート

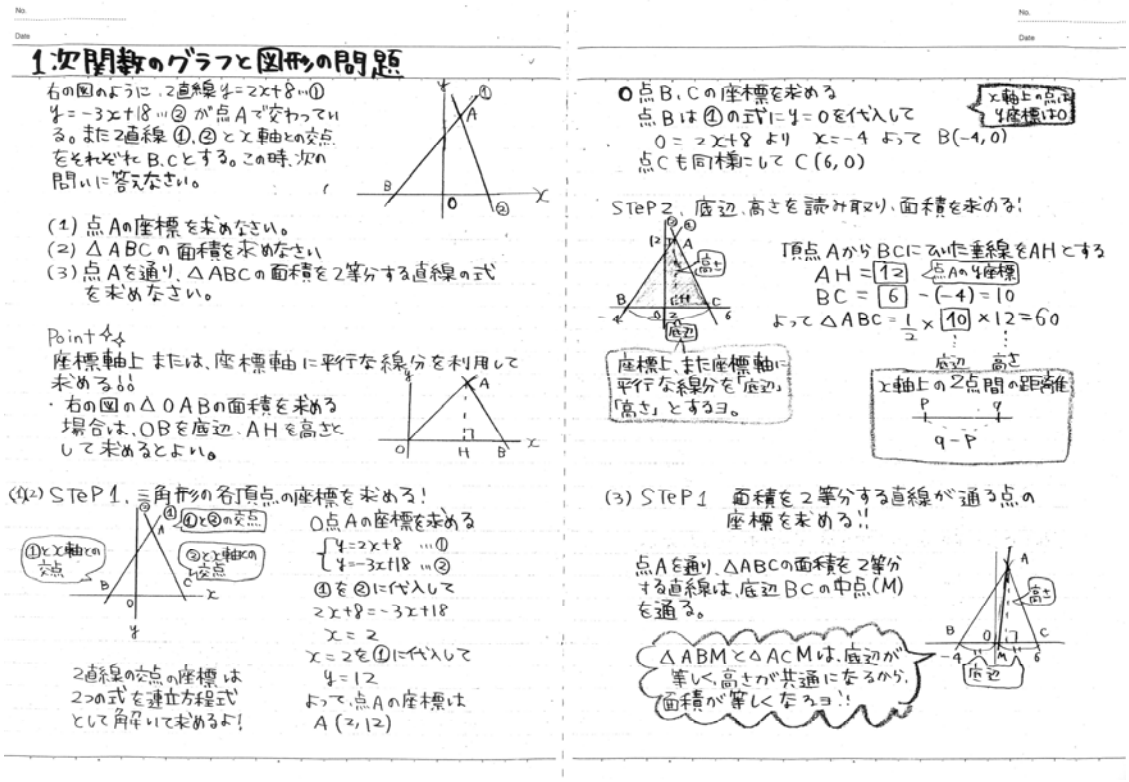
自学ノートは 1 年時より毎日 1 ページを目標に取り組んできた。今年は 2 年目なので生徒は違和感がなく取り組んでいる。基本的には 1 週間に一度提出し 7 ページが目標である。自学ノートの使い方については、それぞれの生徒の取り組みを紹介しながら今まで進めてきた。自学ノートを学習のまとめとして使っている例や問題を解くのに使っている例、また、単語や漢字などの練習に使っている例などを紹介し、自分の活用の仕方の参考にさせた。

このような方法で取り組んできたが、全く取り組んでいない生徒はいないものの差があるのが現状である。9 月末の状態は、一番多く実践している生徒は 500 ページ以上であるがほとんどの生徒は 100 ページ前後である。

(2) 朝学習

朝学習は週 2 回はプリント学習、あと 3 回は朝読書に取り組んでいる。プリントは国語と数学の基本的な読み書き計算を主にしている。これは基礎の定着のために行っている。朝読書は読書習慣をつけるために行っているが、生徒達は集中して静かな状態で読書している。これは、図書

数学自学ノート事例



館司書の啓発によるものが大きく、朝読書のおかげで図書館の利用も2年生は大変多い。

3　テストの事前事後の取り組み

事前にはテスト2週間前に計画表を書かせ、テストの心構えをさせた。この計画表で見通しを持たせ、計画に従って家庭学習を進めるようにさせた。生徒はこの計画表を参考に目標を決め、進めていた。教師はこの計画表を毎日点検し、各自の取り組み状況に対してアドバイスを行うようにした。

また、事後ではテスト直しをした後、各教科の自分の取り組みの反省をし、これを計画表に綴っている。こうすることで、1年間の自分の取り組みの変化や反省を確かめ、前回のテストを振り返りながら次に生かしていくようにした。

4　学年独自の取り組み

学年目標を具体的に実現していくために、5つの項目をあげている。

① 共感する優しい気持ちを大切にし、励まし合っていこう。

② 集中力をもって学習に取り組み、部活動との両立をめざそう。

③ イヤと言える勇気、ダメと言える勇気を持とう。

④ 身近な人を大切にできる心を持とう。

⑤ 自分の生活リズムをしっかりと作ろう。

この中で、「共感する優しい気持ち」を柱とし、②⑤については、学習習慣定着の観点から指導にあたり、部活動においては3年生からのバトンタッチという重要な時期でもあったため、道徳の授業の中にも位置づけを考え、授業を行ってきた。③も道徳の授業を中心に、価値観、判断力、勇気、人権の観点から指導にあたっている。学年集団の幼さから、何かしら自分の立場を優位にしようと、つまらぬからかいやちょっかいといった行為が見受けられ、周囲も流される傾向がある。大切なのは「高さ」ではなく「方向」である、と機会をとらえ指導にあたっている。④は、色々な場面で共通して指導内容に入ってくるものであるが、特に来年度の修学旅行に向けた「平和学習」の中で大きく関わっていこうと考えている。

また、「わく・ワーク体験」の活動も2年生独自の取り組みで、夏休みの期間を利用し、 3日間の体験を行うことができた。体験の中から、働くことの意義や生き方について、マナーや礼儀などの基本的な行動様式について学ばせていただいた。特に、各事業所の方で、中学生の体験に合わせた事前の準備をしっかりとしていただいていたことにも感謝の気持ちでいっぱいになった。

5 成果と課題

目標の実現に向けた取り組みは、まだ途中の段階であって課題は残っている。しかし、3年生を手本とした運動会では、共通の目標を達成しようとする時の集団のまとまりやパワーを改めて学ぶことができたように思うし、合唱コンクールを中心とした文化祭の活動にもその影響が出ていることを見て取れる。部活動においても、今の3年生にひけをとらない充実した活躍の様子である。

先にも述べたように、「感動の卒業式」を築き上げる力をつけることが、60周年という区切りからスタートを切る今の2年生にとって最大の課題である。心を表現し、学年はもとより1年生をもまとめ、次代を担うことを期待される学年となるべく成長していくよう褒め、叱り、諭しながら導いてやりたい。

第 3 学年部会

1　はじめに

全体的に明るく元気な学年である。行事になるとクラスの対抗意識をむき出しにして取り組み、学校全体の雰囲気を盛り上げていく力を持った学年である。授業においても、積極的に発言する生徒が多く見られる。しかし、学級内でお互いを認め合うなどの寛容さに欠けたり、男女がまとまって学習活動を行うことが苦手であるなどの面が見られる。また、今年度 5 月の学習アンケート調査からは、「1 日の家庭学習時間が 1 時間から 2 時間程度」「主な家庭学習の内容は、宿題が中心」「1 月に 3 冊以下しか本を読まない生徒が 6 割以上」という事実が浮かび上がった。家庭での学習習慣の向上をめざすために、また、温かい人間関係の中でこそ学習意欲が向上するという仮説のもとに、学年として以下に示すような具体的な取り組みを行っていくことにした。

2　学習習慣定着のために

(1) 毎日の受験対策学習

3 年生であることから、当然ながら毎日の受験対策の学習は欠かせない。学習教材を利用しながら、計画的に毎日の学習を行えるよう支援した。多くの生徒は、計画通りに学習を進めることができるが、残念ながら月日がたつにつれ、少しずつ毎日の学習努力を怠る生徒も見られるようになった。毎日の学習が続かない生徒には、積極的に声をかけ励ますようにした。

(2) 自学ノート

「家庭学習の中心が宿題である」という課題を解決するために、自学ノートの利用を行っている。宿題や受験対策学習以外の、自分独自の学習習慣の定着をねらったものである。1 年時からの継続的な取り組みであるが、残念ながら一部の生徒にしか浸透していない。そこで今年度は、夏休みの宿題の一環として、「自学ノート 1 冊を完成させる」という課題を提示した。学期中にはなかなか自学ノートを進めることができなかった生徒も、夏休みを利用して自分の力でノート 1 冊を完成させることができた。

(3) 朝自習・朝読書の取り組み

朝自習の時間は、月・火・水曜日をプリント学習、木・金曜日を朝読書の時間として利用している。プリント学習においては、国語・数学・英語の教科の基礎的な内容のものを用意し、基礎基本の充実を図ることを目的としている。また、読書量の増加をめざし、2 年時から取り組んでいる朝読書も継続して行っている。現 3 年生においては、朝読書の継続のおかげで、読書量が確実に増加している。図書館での貸し出し数の増加がそれを物語っている。

(4) 学習時間調査

テストが近づくのにあわせて、家庭学習時間の調査を行った。3 年生になって、毎日の受験対策の学習があるため、2 年時に比べてさすがに家庭学習時間は増加している。しかし、塾に頼ることなども多く、自学が増えたとは決していえない。一人ひとりの学習時間を調査することで、

お互いを刺激し合うことにもなり、また、教師の指導の資料￥としても使うこともできた。

3　テストの事前事後の取り組み

(1) テスト計画表の作成

テスト前には、テスト計画表を配布し、学習の計画を立てさせた。見通しを持って学￥習に望むことで、さらなる学力向上へとつながると考えられる。計画表は、同時に実施￥記録表ともなっており、毎日の計画が達成されたかを自己評価するようになっている。計画通りに学習が行われたかを反省しながら、次のステップにつながるよう利用している。

(2) 予想問題集の作成

テスト前には、各学級独自の取り組みも行われる。その中で多かったのが、予想問題の作成である。生徒自らが問題を作成することは、学習内容をしっかり把握していないとできないことである。作成された問題が多くの生徒に利用され、学級全体の学力向上につなげることができる。と同時に、問題作成者にとっては、自分の力が、学級の友だちのために役に立っているという充実感を味わうことができる。

(3) テスト直しノートの利用

テスト終了後、必ずテスト直しを専用のノートにさせ、それを提出させている。テストの点数は気にするが、間違った問題の内容まで気にする生徒は少ないのが現状である。間違った問題を解決することこそが学力向上への近道であると信じて、この取り組みを継続して行っている。

4　学年独自の取り組み

(1) グループワークトレーニング

お互いを認め合ったり、協力して物事に取り組む楽しさを感じさせるために、グループワークトレーニングを取り入れた。グループワークトレーニングは以下のようなものである。

① グループに対してある課題を与え、グループのメンバーが協力して課題解決に臨む。
② 課題は、グループの一人ひとりが知恵を出し合わないと解決できないものを用意する。
③ 取り組み後、グループに対して、各個人がどのように関わることができたかを振り返る。
④ 振り返ったことを、日常の生活に生かす。

最初は作業にとまどっていた生徒達も、何回か継続して取り組むことで、協同作業のこつをつかめるようになった。また、協力して行うことの楽しさや充実感を感じ取れるようになった。

(2) 思考力・表現力を高めるトレーニング

思考力・表現力を高めるため、文章作成トレーニングを行った。ある問に対して、文章として

正しく、かつ論理的に説明できるようにするための練習である。学級活動の時間を利用して内容を説明し、朝自習の時間に集中してトレーニングを行った。

5　成果と課題

学習習慣においては、 3 年生になり毎日の受験対策の学習があるため、昨年度に比べると、日々の家庭学習の時間は増加している。ただし、自ら進んで学習しているかというと、疑問が残る。自学ノートなどを利用し、自主的な学習を促してはいるが、まだまだ義務感で取り組んでいる域を脱していない生徒も多い。受験生という立場であるため、最低限の学習習慣と学習内容が確保されることが重要であり、その点では取り組みがある程度成功しているといえる。今後は、未だに学習習慣が作れない生徒への継続的な対応と、さらなる学習意欲の喚起をめざす取り組みを計画していかなければならない。

また、学級におけるコミュニケーションづくりの取り組みを継続して行うことにより、少しずつお互いを認め合うことの大切さや、協力して物事に取り組むことの楽しさを理解してきているようである。しかし、このような取り組みには終点がなく、さらなる向上をめざして、新しい取り組みを進めていかなければならない。

学力の向上と、よい人間関係を作るための力の向上をめざし、今後も具体的な取り組みを展開していきたい。

資料：各教科の『学びくん』の例

国語科（３年）

平成１８年度

単元名 「教材名」 教科書ページ	古典を味わおう 「おくのほそ道」 ｐ８６～ｐ９３	学習予定	９月下旬 （４時間）
学習目標	・ 優れた表現を読み、そのリズムを生かし、朗読することができる。（読む） ・ 「おくのほそ道」の文学的な価値や芭蕉の生き方について考えることができる。（読む）		

【 学 習 内 容 】

☆ 「松尾芭蕉」について知ろう！

□ 「松尾芭蕉」とはどんな人なのかを知る。

□ 「おくのほそ道」の旅程を参考にして、地元「小松」「加賀」で読まれた俳句を言うことができる。

□ 「芭蕉」にとって旅はどんなものであったかを文章にすることができる。

☆ 「おくのほそ道」を読もう！

□ 歴史的仮名遣いに注意して音読ができる。

□ 現代語訳と照らし合わせて大意を知ることができる。

□ 漢語的な表現・対句的な表現を見つけられる。

□ 地の文に俳句を配した効果について意見が言える。

☆ 芭蕉のものの見方や感じ方を捉えよう！

□ 「旅」への思いがよく表れている部分が抜き出せる。

□ 平泉で芭蕉を感動させたものは何だったかが言える。

【 自学へのアドバイス 】

- 資料集で「芭蕉」を知り、旅程をじっくり眺めるなどフルに活用しよう。
- 特に「小松」「山中」「大聖寺」ではいくつもの俳句が残っているよ。「太多神社」「那谷寺」「山中泉屋（今は存在しない）」「全昌寺」でのエピソードを家の人に聞いたり、現地に赴いて石碑を調べるのもいいかも。
- 芭蕉が何の目的で長い旅に出たのか？芭蕉のあこがれの人って誰？
- お金はどうしたの？　曾良って誰？
- 歴史の資料も紐解いて調べると「平泉」で芭蕉が涙した理由がわかるよ。

単元名 教科書のページ	５章　近代日本の歩みと国際社会 １　欧米諸国の衝撃と日本の変革 ｐ１４２～１４９	学習予定	１０月下旬～ （６時間）
学習目標	・開国から幕末の激動期を人々がどう生きたか興味を持って学習しようとする。（意欲・関心・態度） ・市民革命や産業革命を経た欧米諸国が、なぜアジアに進出したのか考えることができる。（思考・判断） ・図やグラフから、開国による影響が読み取れる。（技能・表現） ・開国から幕末までの流れを理解できる。（知識・理解）		

【学習内容】

○江戸時代の復習と江戸時代の文化

１年生で習った江戸時代の復習と江戸時代の文化について学びます。

○外国でおこった「近代」の芽ばえ

- □ 産業革命とは何か、説明することができる。
- □ 市民革命とは何か説明することができる。（絶対王政、自由・平等の語句を使おう）

○世界に進出する欧米諸国

- □ 産業革命によって生まれてきた問題点がわかる。
- □ 欧米諸国がアジアに進出した理由が説明できる。
- □ アヘン戦争の原因、結果、結ばれた条約がわかる。

○開国とその影響

- □ ペリーはいつ、どこに、何を要求しにやってきたのかがわかる。
- □ ２つの条約名と内容（違い）、開かれた港がわかる。
  （港の場所は地図で確認すること）
- □ 開国が人々の生活に与えた影響を説明できる。

○倒幕運動と幕府の滅亡

- □ 開国から倒幕までの大きな流れが理解できる。（下の重要語句を参考に確認しよう）
- □ 次の人物がどのように倒幕に関わっていたのかがわかる。
  〔坂本龍馬　高杉晋作　西郷隆盛　大久保利通　岩倉具視〕

《重要語句》

絶対王政　市民革命　フランス革命　人権宣言　アメリカ独立戦争　産業革命　植民地　アヘン戦争　清　南京条約　日米和親条約　日米修好通商条約　尊皇攘夷　安政の大獄　桜田門外の変　下関砲台占領　薩英戦争　薩長同盟　大政奉還　王政復古の大号令　戊辰戦争

《重要人物 》

エリザベス１世　ルイ１６世　ペリー　井伊直弼　吉田松陰　高杉晋作　西郷隆盛　坂本龍馬　大久保利通　岩倉具視

【自学へのアドバイス】

- 江戸時代の復習をしておこう。授業の前に一度教科書を読んで、流れをつかんでおこう。
- ヨーロッパで市民革命や産業革命が起こっているとき、日本はどのような出来事が起こっていたか、年表に書いてみよう。
- イギリスの市民革命（清教徒革命、名誉革命）フランス革命、アメリカ独立戦争について調べてみよう。
- 開国から倒幕までの流れをノートにまとめてみよう。
- 歴史小説「竜馬がいく」司馬遼太郎　著を読んでみよう。

知ってる？
武田鉄矢はもと「海援隊」というグループを作っていたが、それは竜馬がつくった貿易結社の名前からつけたものです。

単元名 教科書のページ	３章　方程式 １節　方程式 ｐ６６～ｐ８５	学習予定	９月下旬～10月上旬 （７時間）
学習目標	・数量の間の等しい関係に関心をもち、式で表そうとする。【関心・意欲・態度】 ・方程式とその解、方程式を解くことの意味を理解する。【知識・理解】 ・等式の性質について考えることができる。【見方・考え方】 ・等式の性質や移項の考えを使って方程式を解くことができる。【表現・処理】		

《 学習内容 》（[ ] は新しく学習することや重要語句などです。）

① 方程式（ｐ６８～７１）　**[等式，左辺，右辺，方程式，解，解く，等式の性質]**

・等式

□ 数量の間の関係を等式で表すことができる。

（例）１個80円のりんごを a 個買い、1000円払うとき、おつりは b 円だった。
この関係を等式で表しなさい。

・方程式

□ x にいろいろな値を代入して、方程式の解を求めることができる。

・等式の性質

□ 等式の性質を使って、方程式を解くことができる。　（等式の性質は４つあったね）

（例）次の方程式を解きなさい。　（１）$-8x=6$　（２）$\frac{1}{3}x=5$

② 方程式の解き方（ｐ７２，７３）　**[移項]**

□ 移項の考えを使って、方程式を解くことができる。

□ 方程式を解く手順が分かる。

（例）方程式 $5-3x=x+13$ を解きなさい。

③ いろいろな方程式（ｐ７４，７５）　**[分母をはらう，１次方程式]**

□ かっこ（）をふくむ形の方程式を解くことができる。

□ 小数係数の方程式を解くことができる。

□ 分数係数の方程式を解くことができる。

（例）次の方程式を解きなさい。

（１）$5x-3(x-1)=6$　（２）$1.8x-0.7=2.9$　（３）$\frac{1}{2}x=\frac{1}{3}x-10$

《 自学へのアドバイス 》

基礎の力をつけるには

・たくさん問題を解いて（ｐ１９６「方程式を解く練習をしよう」）、解き方をしっかりと理解しよう。

・分母をはらうことと、通分して計算することの違いを理解しよう。

チャレンジしてみよう

・かっこ・分数・小数をふくむ問題を何度も練習して、速く、正確に解けるようにしよう。

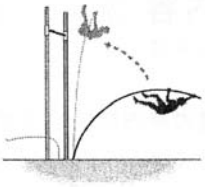
・興味のある人は、大小関係を表す式（教科書ｐ１７８）について研究してみよう。

理科（1年）　　１８年度２学期

1、身近で起こる不思議な現象（光・音・力）

単元名 教科書のページ	単元名　力による不思議な現象 １分野上　Ｐ２３　～　Ｐ３４	学習 予定	９月　下旬頃 （８時間）
学習目標	１、物体の変形や運動の様子から、物体に力がはたらいていることを認識する。 ２、物体にはたらく２力がつり合うときの条件を見つけ出すことができる。 ３、空気に重さがあることを調べる実験を行い、その結果を大気圧と関連づけて理解する。		

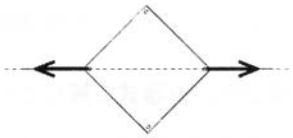
学習内容と学び方

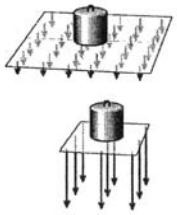


（1）学習内容

□１、物体に力を加えた時、力が物体にするはたらきは、
- ★　物体を（　）させる。
- ★　物体を（　）。
- ★　物体の（　）を変える。

□２、２力がつり合う条件は、
- ★　２つの力は（　）にある。
- ★　２つの力の向きは（　）である。
- ★　２つの力の大きさは（　）。





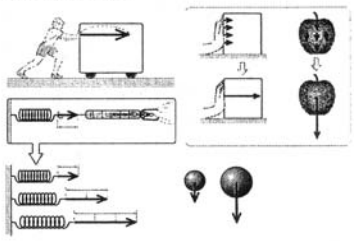
□３、同じ大きさの力でも、力がはたらく面積のちがいにより、そのはたらきが異なることを理解しよう。

□４、圧力の大きさを求めることができるようになろう。

圧力（N/㎡）＝

□５、大気圧とは何かを理解しよう。（★）

《力の表し方》



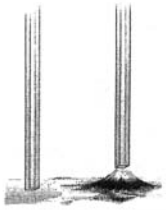
（2）観察・実験のポイント

□１、身のまわりで力がはたらいている場面を見つけ出し、力を表してみよう。
□２、２力がつりあう条件をつくり、その時の条件を見つけ出そう。

（3）重要語句

□　重力　　□　まさつ力　　□　ばねの力　　□　抗力　　□　ニュートン（N）
□　力の３要素　　□　作用点　　□　圧力　　□　大気圧　　□　気圧

自学へのアドバイス



１、力のつりあいや圧力の範囲をワークブック、プリントで復習しておこう。
２、水の圧力や大気圧について、図書館やインターネットを使って調べてみよう。

音楽科（１年）

題　材　名	千年前の日本の音楽「雅楽」の 響きに親しもう・やってみよう	学習予定	１月上旬～１月下旬（４時間）
学習目標	・「雅楽」に関心を持ち，「雅楽」の持つ音楽的特徴を意欲的に聴くことができる ・「雅楽」の持つ音楽的特徴（音色など）を感じ取ることができる ・「雅楽」の持つ音楽的特徴（音色など）を生かした演奏をする技能を身に付ける ・「雅楽」の持つ音楽的特徴を日本の文化・歴史と結びつけて聴き取れる 【関心・意欲・態度】【音楽的感受や表現の工夫】【表現の技能】【鑑賞の能力】		

「千年前の日本の音楽」というものを聴いてみよう

聴くときのポイント

・曲の速さは勢いのある速さかゆるやかな速さか？
・曲の雰囲気は明るいか暗いか？
・楽器の音色にはどんなものがあったか？・いくつぐらい聴こえたか？
・どこかで聴いたことがないか？

「千年前の日本の音楽」＝「雅楽」という

- [ ] 「雅楽」の歴史について知ろう
- [ ] 「雅楽」で使われる楽器は？
- [ ] 「三管二絃三鼓」という楽器編成
  （各楽器の名前を読めるかな？・各楽器の特徴が分かるかな？）

各パートを決めて、最初の部分をやってみよう

しかし

本物の楽器を使うのは難しい→・・・えっ　どうするの？

雅楽の雰囲気を出しながら合奏しよう

- [ ] 雅楽の持つゆったりとした速さや雰囲気を考えながら自分のパートを演奏しよう
- [ ] タイミングがずれる雰囲気を出してみよう

もう一度「雅楽」を聴いてみよう

- [ ] 最初に聴いたときとどんなふうに印象が変わったか？
- [ ] 「雅楽」の音楽的特徴や、歴史を考えながら聴き取れましたか？
- [ ] 日本音楽の音色について、また伝統音楽の雰囲気について感じとることができましたか？

【自学のポイント】

こんな人もいます

「東儀　秀樹」　雅楽演奏家。奈良時代から続く楽家の家系に生まれる。1996年にファーストアルバム「東儀秀樹」でデビュー。映画、テレビ番組やＣＭにも曲を提供している。バラエティーなどのテレビ番組に出演。古典芸能であった雅楽を現代音楽と結びつけその素晴らしさを一般に広く認知させた。専門は「篳篥」である。

美術科（１年）　　平成１８年度

題　材　名 教科書のページ	遊び心のかたち Ｐ．２６，２７	学習 予定	９月 ～ 11月 ９時間
学習目標	・ユーモアに富んだ遊び心について理解し、それを表す制作を楽しむことができる。（関心・意欲・態度） ・飾ったり、遊んだりする機能を理解しながら遊び心を生かし、発想や構想をすることができる。（発想や構想の能力） ・材料の特性を生かしながら自分のイメージに近づけるよう工夫し制作することができる。（創造的な技能） ・遊び心の工夫について考えながら作品の楽しさやよさを味わうことができる。（鑑賞の能力）		

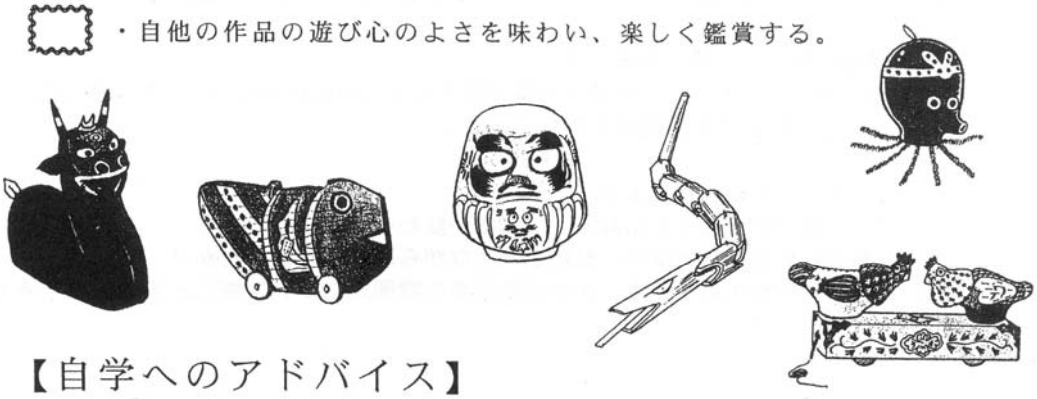
【学習内容】

・遊び心を理解し、それを生かした制作を楽しむ。

・飾ったり、遊んだりする機能（首振りや歩き仕掛け）を生かした遊び心豊かな構想を練る。

・計画を立て、表現の効果を確かめ、柔軟に工夫して制作する。

・自他の作品の遊び心のよさを味わい、楽しく鑑賞する。



【自学へのアドバイス】

・身のまわりにあるものから「遊び心」を感じさせるものを探し出してみよう。

・つくりの簡単な昔の玩具など、興味のあるものを再現してみよう。

体育科（1年） 器械運動 跳び箱　　H・18

領域名 「種目名」	器械運動 跳び箱運動	学習予定	2月 （8時間）
学習目標	・跳び箱運動の特性に関心を持ち、互いに協力して練習できるようにするとともに、器械・器具を点検し、安全に注意して練習ができる。（関心・意欲・態度） ・自己の能力に適した技を選び、課題を解決するための練習の仕方を工夫できる。（思考・判断） ・ある程度できる技はよりダイナミックに、また新しい技に挑戦して技能を高めることができる。（技能） ・跳び箱運動の特性や学び方、技の構造を理解するとともに、練習の仕方や技のできばえの確かめ方を理解する。（知識・理解）		

【学習内容】

▼自分の能力に合った跳び方の技能を高める。（切り返し系の技）

- □ 第一空中局面、第二空中局面を意識することができる。
- □ まずは第一空中局面を意識した開脚跳びができる。
- □ 開脚跳びから水平跳びへと技を発展させることができる。
- □ かかえ込み跳び（閉脚跳び）ができる。
- □ かかえ込みとびから屈伸跳びへと技を発展させることができる。
- □ 手の突きはなしを意識した練習に取り組むことができる。

▼変化のある高度な技へ発展させる。（回転系の技）

- □ 台上前転ができる。
- □ 第一空中局面を意識した台上前転ができる。
- □ 技の構造を理解した上で、頭はね跳びができるよう場の工夫をし、練習に取り組むことができる。
- □ ３段階の下向き跳びにチャレンジすることができる。
- □ 前方倒立回転跳び・側方倒立回転跳びの構造を理解し、段階的な練習に取り組むことができる。

▼学習を振り返り、次のステップとしていこう！

- □ 跳び箱運動に興味・関心を持ち、自発的・意欲的に取り組んだか。
- □ 自分やグループに合った課題を持って練習に取り組むことができたか。
- □ 場のセッティングの仕方や、練習方法を工夫して取り組むことができたか。
- □ 練習の補助、アドバイスなど、協力し合って取り組むことができたか。
- □ ルールを守って、自己中心的にならず、練習に取り組むことができたか。
- □ 創意工夫、努力による技術の向上があったか。
- □ 健康・安全に留意し、ケガのないように取り組んだか。
- □ 進んで用具の準備や後片付けができたか。
- □ 運動の特性や技の系統、運動の発展、変化などを理解できたか。

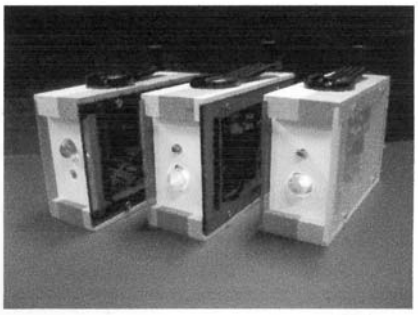
【自学へのアドバイス】

・腕の筋肉を使う技が多いので、腕立て伏せや倒立の練習をすると効果がでます。
・柔軟性も求められるので、ケガの防止の観点からもストレッチは積極的に行って下さい。
・段階をふんで練習すること、補助をつけて練習すること、場を工夫して練習することを忘れないで下さい。また、教科書・指導書のイラストをイメージして行い、誰かに見てもらってアドバイスしてもらうのが上達の秘訣です。

技術・家庭科（技術分野　３学年）

題材名 教科書のページ	ダイナモコンデンサライトを製作しよう P.１１０～１１７	学習 予定	６月 中頃～７月下旬 （６時間）
学習目標	・ はんだごてや工具を用いて安全に正確な配線作業ができる。 ・ 工具や工作機械を使い、正確に作業を行うことができる。 【関心・意欲・態度】【工夫・創造】【生活の技能】【知識・理解】		

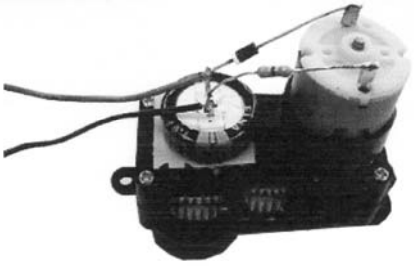
学習内容



○ 工具や機械を使い、ダイナモコンデンサライトを製作します。

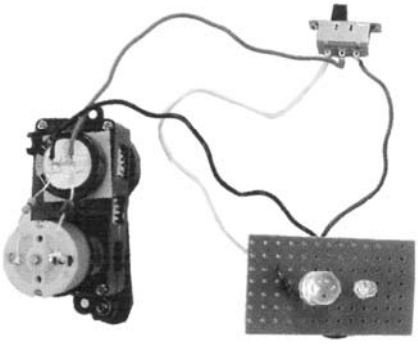
□ 部品や材料があるかまずはチェックしよう

□ 自分で作った回路をもとに部品を組み合わせてみよう。



□ はんだごてで発電機と逆流防止ダイオード、抵抗器はんだつけします。

□ 基板に発光ダイオード、定電流ダイオード、コードをはんだづけする。

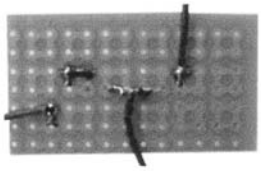


□ スイッチにコードをはんだづけする。

□ プラスチック板に穴空け加工を施し、ケースを組み立てる。

ポイント

与えられた回路図をもとに、ただ部品を組み立てていくのではなく、なぜこの部品が必要なのか、なぜこの向きについているのかなど、学習したことを思い出して製作してください。



家庭での実践

身の回りにある製品は複雑なものが多くて、簡単には理解できないものばかりですが、
電子部品１つ１つにちゃんとした意味があることを考えながら、電気製品を利用してください。

技術・家庭科（家庭分野　２学年）

２組　　１８年度

題材名 教科書のページ	「わたしたちの生活と住まい」 安全に住むには？ P. １４０～１４８	学習 予定	２月下旬～ ３月 （５時間）
学習目標	・室内の安全に関心をもち，安全な住まい方を心がけることができる。（関心・意欲・態度） ・安全な生活ができるために，自分の生活を改善する方法を工夫できる。（工夫・創造） ・安全な生活ができるためのハザードマップを作ることができる。（技能） ・家庭内で安全に住むための室内環境の条件を理解する。（知識・理解）		

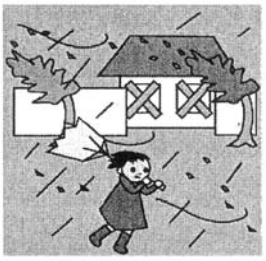
◎学習内容

○家庭内の安全（１，２時間目）

□家庭内での事故にはどのようなものがあるか調べよう。

□阪神・淡路大震災の様子を知ろう。

□地震や洪水の際の家の中の危険度をチェックしよう。



○ハザードマップの作成（３～５時間目）

□洪水の際の自分の家のハザードマップを作ろう。

□我が家の *Before after*

→　洪水に備えて自分の家の安全度を高めよう。安全度を高める工夫を考えてみよう。

＜家庭での実践＞

やってみよう

◎災害は日頃からの備えが大切です。地震や洪水などの災害時に少しでも被害を少なくするために，この学習を生かして家族で話し合ってみましょう。

話し合ったこと

※　災害に備えて準備しすぎることはない。

英語科（１年）

平成１８年度

単元名	Unit 6 グリーン家の人々 (P50- P53)	学習予定	１０月中旬～下旬 （６時間）
学習目標	・グリーン家の人々について聞き取ることができる。〔理解〕 ・話題の人物（３人称単数）について話すとき，一般動詞にｓをつけることを理解し，文を作ることができる。〔知識理解〕 ・話題の人物について，たずねたり，それに答えることができる。また，その人物がしないことについて言うことができる。〔知識理解〕 ・友達や自分の知っている人物について紹介することができる。〔表現〕		

《学習内容》

６（１）

□　グリーン先生の家族の紹介をききとり，話題の人物について紹介する言い方を覚え，色々な人物について言えるようにする。

□　話題の人物（１人）を紹介するときの言い方が分かる。

This is Ms. Blue.
She likes music .
She plays the guitar .

話題の人物を１人（I , you 以外の人）を紹介するとき動詞に（　）をつけるよ！

３単現のｓ

□動詞のｓのつけ方に注意！

①そのまんまｓ　②-es　③ｙをｉに変え -es　④不規則に変化

plays 〔ｚ〕　teaches 〔iz〕　study → studies　have → **has**
likes 〔ｓ〕　goes 〔iz〕
wants 〔ts〕

６（２）

□　リサについての対話を聞き取り，話題の人物について問答できるようにする。

□　話題の人物について問答することができる。

Does Tom like sports?　Yes, he **does** .

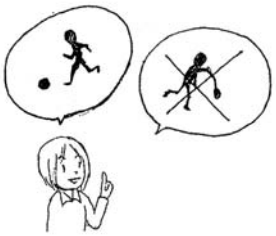
Does he play tennis ?　No, he **doesn't** .

６（３）

□　リサの夫浩司とトロントの友達について聞き取り，話題の人物がしないことについて言えるようにする。

□　話題の人物がすることしないことが言える。

He plays soccer .
He **doesn't** play tennis .



□　友達や自分の知っている人について紹介できる。

《自学へのアドバイス》

・グリーン先生について分かることをできるだけたくさん英語で書いてみよう。
・教科書の本文を暗誦しよう。
・新出単語・熟語や本文をコピーノートに練習しよう。
・ワークをやり，３人称単数のｓに慣れよう。

お わ り に

本校は、「確かな学力を育む指導の研究」という主題のもと平成 17 年度・18 年度と 2 年間にわたって研究実践してきました。

昨年度は、学力分析や生徒の実態をふまえ、教科指導に重点を置き、確かな学力について全教職員が共通理解を図りながら、わかる授業づくりに取り組んできました。また、各教科でもねらいを明確にした授業実践、教科を越えた授業交流からは、共通の「授業参観の視点」を基に、「指導と評価の一体化」を図る授業改善を進めることができました。

今年は昨年度の反省から、指導法の工夫や授業改善を進める中で、確かな学力を育むためには「課題に向かう力」「学ぶ意欲」を高めることが大切であるという考えから、教科のつけるべき力を大切にしながら、「学ぶ意欲」に焦点をあて本主題を設定しました。「学ぶ意欲、自ら学ぶ力」をつけるために、授業理解と意欲の相乗効果をねらい 3 つの仮説を立てて実践・検証してきました。仮説 1、2、3 の項目は、教師が生徒の変容を日々の授業の中で心がけるべきことですが、現実にはなかなか思うようには効果をあげることができてはいませんでした。それゆえ、この機会に単元を見通した学習と毎時間の目標を明確に示す工夫や協同学習を取り入れた授業の工夫・評価の工夫、家庭学習の指導の工夫、全体構想図の《手だて 1》～《手だて 8》を行ってきたことにより各教科の指導のあり方について見直しを図ることができました。また、教師の意識の変容と教師自身の指導力向上という点からも大変有意義であったと考えています。また、教師集団の真剣さが子ども達にも伝わっているようであり、生徒の学び方の質も徐々に向上している事実を日々の授業の中で実感しています。

「県基礎学力調査の通過率が昨年度より伸びが著しく、授業アンケートからも授業が改善され授業に楽しく取り組んでいる生徒が増えている。」とはいえ、研究実践という視点から見れば、まだまだ内容的に不十分であり、検討・改善すべき点も多くあります。今回明らかになった課題を解決すべく、さらなる前進が必要であることを痛感している次第です。

最後になりましたが、中京大学の杉江修治先生には確かな学力と協同学習についてご指導をいただき、石川県教育委員会小松教育事務所及び小松市教育委員会の指導主事の先生方には、研究の進め方、指導案、紀要作成、学びくん等、親身にそして的確なご指導ご助言をいただきました。心よりお礼を申し上げます。

監修者あとがき

小松市立丸内中学校研究同人

平成 18 年度

西　　市造	竹下　千賀	広瀬　真樹	打田　匡宏	竹川　淳子
宇野　孝博	山口　綾子	岡　美登子	任田　和弘	黒田ゆかり
久坂　早苗	浅田　收一	四日研一郎	北井　修平	西尾　伸子
亀田憲一郎	西　　美香	加藤　丈司	山本　哲夫	本間　真弓
松原　順子	寺島　康江	福岡　広美	山上　菊恵	山本ありさ

平成 17 年度

中出　　進	太田　玉喜	河端　真一	井田　洋美	森　　泰規
多田　睦子	西村　早織	中小田洋子		

監修者

杉江　修治　中京大学教授
博士（教育心理学）

確かな学力を育む指導の研究

学ぶ意欲を高める授業をめざして
（協同教育実践研究資料　３）

2007 年 3 月 3 日　第 1 刷発行
著　者　小松市立丸内中学校
監修者　杉江修治
発　行　日本協同教育学会
〒839-8502　福岡県久留米市御井町 1635
久留米大学文学部　安永悟研究室内
TEL. 0942-43-4411(ext.393)